

といふ一縷の望を胸に秘めて一目散に急いだ。しかし、君が住宅の附近に來た時は、すでに猛火は八官町と數寄屋町の兩方面から氏の住宅に向つて恐ろしい魔の手をのばしてゐた。やうやくのことで歸宅して見ると三階建のビルディングは幸に無事であつた。急いで自分の部屋に這入つて見たが人影はない。「さては無事に避難することが出來たか。」とよろこびながらも「どこに避難して行つたらうか」と第二の不安に襲れた。ところが意外にも、電車線路の交叉點に停車してゐる電車の中に四人の家族（妻、長女、長男、次男）を無事に見出すことが出來たのである。家族の無事にやうやく安堵の胸をなでおろした氏は、今度は其の食料について心配しなければならなかつた。そこで附近のパン屋で一圓程パンを買ひ、家族にそれを渡しながらかのやうに語つた。

「自分は三時まで役所に歸へらなければならぬ。役所に歸れば當分は歸宅することは出來ない。

——自分が留守でも決してあわてゝはならぬ。それに屋内は危険であるから這入らぬやう。萬一家に火のつくやうな場合になつたら祖先の位牌だけは出してくれ、その他のものは決して出すには及ばないから。」

更に、焼け出された場合には風下に逃げることを避け、第一に日比谷公園——そこもあぶなくなつたら第二に麴町集町の親戚に——そこも不安と見たら今度は麴町のお濠の近所を廻つてゐるやうに——

殊に避難する場合には人通が頻繁で混雑するから家族の者はお互に帯か何かにつながつて、決して離れぬやうにと——沈着にして周到な注意を與へ、後に心をひかれながらも「役目大事」と急いで區役所に引返したのが丁度午後の二時頃であつた。歸所した吏員は區長や掛長の指揮の下に、或る者は避難者に給與すべき食料品の調達、炊出しの準備、應舎の警戒等に任じた。日の暮れるにつれて火災が四方から起つた。九時から十時頃には役所も全く危険になつて來たので、各掛は配當された塵芥車に重要書類を積み始めた。禰寝君は戸籍掛である。先づ戸籍簿、印鑑簿を出した。紅蓮の焰は猛烈な勢を以て櫻川小學校方面と、琴平町方面とから襲來して、役所を一なめにしようとする脅威してゐる。見る中に櫻川方面からの火が愛宕警察から練習所に延び、とうとう役所に移つた。その頃大部分の吏員は重要書類と共に豫定の如く芝中學附近の園丁詰所に避難してしまつたが、禰寝君は踏み止まつて應舎内に飛び込んだ。そして受附帳を一包かゝへて出た。そして又這入つた。今度は早速必要であるべき埋葬書戸籍用紙埋葬認可證等一かゝへ出した。火は益々猛烈の度を加へ、息苦しい煙は應舎内にみなぎつた。それでもまだ應舎をあとにすることは到底出來なかつた。思ひきつて三回目飛び込んだ。それは重要な戸籍用の職印を出すことに氣附いたからである。丁度其の時、そこを通りかゝつたのは、折柄應舎内巡視の小室山區長であつた。

「誰だッ！ そこにゐるのは」

「福寝です。」

「何をしてゐるんだ、あぶないぞ。」

「職印を忘れましたから、それを出してゐるのです。」

永年住みなれた廳舎の全く焼け落ちるのを見届け、それに最後の訣別の辭を残して引上げようとする雄々しき區長と、あくまでも職責を全ふして踏み止まらうとする沈着なる福寝吏員と——この二人の尊き魂がこゝに嚴肅なる一場面を展開したのである。火はやがて警察官舎からも襲つて午前零時十分頃には廳舎は全くあとかげもなく焼失してしまつた。

沈着にして周到なる福寝氏の注意は四人の家族を無事に避難せしめ、職責を尊重する福寝氏の義務感はよく重要な公文書類及職印等を安全に搬出せしめた。福寝君の如きは眞に、沈着にして思慮深き模範吏員と言ふべきである。

總町區平河町六ノ一〇北本榮藏方 芝區吏員 福 寝 清 隆君 (三十八年)

●郵便局の書類を保管し得た苦闘

一日、十五日といへば遊樂境を控ふる淺草の書き入れ日で、窓口は一人込合つて平日に倍して受拂に目が廻るほどである。漸く一片付したかと思ふ間もなくガタ／＼と來た。局は舊い煉瓦造りで天井が墜ちる、煉瓦が飛ぶ、局内は暗膽として咫尺を辯せぬ程で、實に間髪を容れなかつたが、夫れでも局員は咄嗟に飛び出したので幸ひ怪我人もなかつた。第一震が終ると共に金庫だけは始末しなければならんと、大井局長の命により堀川、小島の兩君は倒れかゝつてゐる柱の下、壊れ物の間を縫うて近よつたが、既に床が弛んで倒れかゝり、餘震毎にぐらついて危くて手が付けられぬ。辛うじて受拂の残りと證據書類とを取纏めて來る事が出來た。そのうち各所からは熾んに火の手が擧がる。分けても十二階の倒壊と共に起つた猛火は一面に渦巻き、一方藏前の高等工業學校から發した火は北へ／＼と延焼するといふ譯で、危険は刻々に逼るばかりである。そこで局長は急速避難の準備を命じ、先づ下谷局方面の安全なるを見込んで、オートバイや電氣自動車で幾度となく重要書類を送り届けた。何といつても市内隨一の熱鬧地を控へ群集が一度に避難するのだから、その混雜は名狀する事が出來ない

これを見た局長は團體行動の不可能を語り、先づ保険カード三千の搬出を保険集配人取締の松井榮太郎君に命じた。松井君は手早く保険カード全部を行囊に入れ、オートバイに積んで下谷局目がけて驀地に走らしたが、避難者蝟集の爲め一步も前進する事が出来ない。

その間を右に避け左に轉じ寸前尺退の有様で、辛うじて下谷局に着いた。處が翌夜九時頃になると上野坂下方面から非常な勢で燃え延びて来る火に下谷局も形勢刻々に危険に瀕して来た。これを見て取つた松井君は件の保険カードを早速箱車に積替へて上野山内に入らうとしたが充滿した避難者の爲め寸隙もないので、またも箱車を引いて池の端寄の樹の下に止まる事にした。然し猛火は益々近付き火の粉は盛んに降りかゝる。躊躇すれば早晚焼死を免れない。然し一步も進む事が出来ない。そこで君は局長から命せられた保険カードと共にすべく決心し、バケツのあつたのを幸ひ、池の水を汲み上げては乾き切つてゐる行囊に注ぎかけ又自分も浴びて夢中になつて火焰と戦つた。そして幾度か昏倒せんとしたかわからない。彼是する中に石段寄の方は既に燃え盡して安全のやうに見えたので、其の方に車を引寄せ、やつと危機を脱する事が出来た。其處に井戸水を呑みながら居る事五日に及んだが偶々前を通る集配人を呼び留めて、小石川局に避難したといふ自局の應援を求め車を局長に引き渡して責任を果す事が出来た。

一方同局窓口受拂事務擔當者に堀川小島の兩君が居る。堀川君は受、小島君は拂であつた。處が激震と共に天井や壁が墜ちて局内は黒煙濛々と立ち罩め而も震動は少しも歇まない。その中局長からは受拂は兩君の責任だ纏めて避難して呉れ給へ、行先は下谷局だといはれる。小康を窺つて兩君は事務机などが倒れてゐる中に飛び込み、手早く現金と書類とを取纏めて持出し相携へて下谷局へと避難した。處が二日夜八時頃に此處へも火が逼つて危険になつたので、主事とも相談し上野の山へと割込み寛永寺で不安の一夜を明したが、何せよ空腹に堪へられないので山を辿つて田端へ出た。折から不逞鮮人横行の風説が盛んな最中とて大金を所持した身は危険の上もない。そこで王子の濫澤男爵邸に第二夜を明かした。食糧は依然補給の途なく殆んど飢餓に瀕した。加ふるに大金を抱いて居てはどうする事も出来ない。そこで二人は相謀つて小島君は千駄ヶ谷の親戚を頼り、堀川君は陸路二十八里を踏破して郷里上州磯部へと辿ることにした。災後兩君は程なく引返し小石川局の假局舎に落合つて精算したところ一錢の相違もなかつたので吻と安心したのであつた。

東京市浅草區千束町二丁目一四〇番地 浅草郵便局保険集配人取締 松井榮太郎君 (五十一年)

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町糶田二一番地 浅草郵便局通信書記 堀川元重君 (二十四年)

東京府荏原郡目黒町中目黒四五七番地島田方 浅草郵便局通信書記補 小島義平君 (二十七年)

●自家の危険を顧みず職務に盡瘁した日本橋區長

九月一日正午激震があると新居區長は鎮靜するのを待つて所員をして區内の被害状況や學校の被害程度等を視察させた。又これより少し前から所員に所管書類箱の整理やら持ち出の準備を爲させた。その外豫て規定した、非常災害準備手續に依つて活動する様用意の擔捧箱を持ち出して命令を待たせた。

午後一時十五分十思學校から午後二時五十分には箱崎學校から、四時十五分には有馬學校から御眞影を奉遷して來たので、區長は御警護方を命令したのであつた。午後二時である。前島市主事外一人來所三時五十分は東京府川越屬外一人來所せられたので、區長は面會して區内の被害状況を告げた。又久松警察警部補來所焚出を求められ、又箱崎四丁目總代からも再三焚出を求め來つたので區長は早速應援し協議した。そして一方區長は此ま、日没に至つては、罹災者の困憊甚しいだらうと察せられ即刻焚出をなす様庶務會計兩掛長に命令した。吏員は混雜の際なので辛ふじて米二俵と梅干とを持つて漸く準備を調べて焚出をやつたのである。然も應舎危険におち入つたので搬出するに至らないで止

んだ。別に久松警察署内でやつた焚出しは配給することが出來たといふ。

當日火災は最初二方面に起つたので火勢は猛烈を極めたのであつたが、消防隊の活動はとんとなく悲慘の極みであつた。そこで區長は武田書記をして第一消防署に有馬學校の危険を報じて出動を求めた。當時の概況は同日午後に於て市長及び知事に對して二回書面で申報したが何れも區長の命によつて立案したものである。

さて箱崎方面の火勢は遽に當應舎方面に向つたので區長は先づ東華學校に選舉名簿やら、戸籍、稅務諸臺帳兵事書箱を搬出させ、會計掛長には會計上重要書類を携帶立退かせ、區長は庶務掛長稅務掛長その他の署員と共に應舎の前庇倉庫等焼けるに及んだので、遂に退去するの止むなきに至つたのである。

當時鐘橋は通行は出來ず荒布橋も亦通行が遮断せられて、本石町、小傳馬町方面の猛火は漸く東華學校を襲はうとしてゐる。區長は今は急速他に避難に若かないと重要簿書等更に日本橋高等小學校に移し午後八時半頃に至つた。然も危険が亦迫つたので比較的安全な濱町學校に避難する外道なきに至つたが、既に人夫は散逸し、所員は漸く小數である。所員は自ら車をひき或は途中から各自互に之を助け群集中を潜つて濱町學校に向つたのである。ここに居ること二時間餘で同校も亦火焰を浴びるにい

たつて刻々危険にならうとしてゐる。折柄避難者は新大橋附近に殺到して殆んど身動きが出来ない。是迄苦心して持ち出した書類簿冊を遺留するは遺憾の極みであつたが、最早如何ともすることが出来ない。可成人家をはなれた學校前の廣場の中央に置いて天祐を頼みとして身を以て同校を立退くの止むなきにいたつたのである。先づ日本橋高等女學校に向つた。同校は淺草橋際にあつて元より安全といふわけではない。然し區長は所員の一人が肩に荷つた有馬學校捧戴の御眞影の安全を祈り又引率する部下を安全な地帯に連れ出すことには非常に苦心せられ、其至情は無言の間卑職等をして感激せしむるものがあつた。

既にして淺草代地の火は兩國橋附近に積重ねた荷物に飛火し、西の方左衛門橋附近亦火焰猛烈であつて、退路は全く遮断せられるの虞があつた。遂に一行は午後十二時前後又々同校を出て上野に向つた。上野の山内に徹夜した區長は、翌午前四時上野を發し、元應舍跡附近に所員と會合して善後策を講じたのである。この大震災火災に區長の住宅の危険であつたのは、言をまたない。然し區長は之を顧みないで其夜遂に全焼したのである。淺草橋方面に避難の途次には、尙住宅を顧慮する時間はあつたが毫も之を意に介せず少しも歩を住宅に向けなかつた。

又家族老幼六人は丸之内方面に避難したといふのみで、安否は勿論三日間所在明かでなかつたが、

私事を抛擲して専心全力を職務に傾注し、今日にいたる迄廢休勵精救濟その他の激務に執掌したのであつた。ために足部を痛めて切開し、或は咽喉を害して音聲が全くかかれても意の如く手當を爲すの間なく極度の熱誠以て職分を全ふせられつゝある。實に部下一同の鑑とする所である。是がため士氣を鼓舞振興し所員をして發奮せしめた所は實に大なりといふべきである。

曾て朝日新聞紙上區長が一家を顧慮して公簿を焼失せしめた様な記事があつたが無稽も亦甚しい記事で何人かの中傷に出たものと察せらる。區長は當時記事の無根なるを以て記事取消を請求せられたといふことである。

日本橋區長 新居友三郎君

● 猛火が身に逼るまで活動した上野驛の交換手

焼けた上野驛には、二十餘名の電話交換手があつた。九月一日は丁度土曜日なので、朝から汗を拭ふ暇もない程忙しかつた。

そこへ突然に、あの大地震が襲つて來た。晝間でさへ電燈の光で仕事をしてゐる薄暗い交換室は、

一時に真暗闇になつてしまつた。壁は落ちる、交換臺と交換臺とが衝突する、ガラスが飛ぶ、その物凄さと言つたらお話しする事も出来ない程だつたから、二十歳前後の若い人達は、忽ち色を失つて、テブルの下などへ逃げこんだ。けれどそれはほんの瞬間の出来事であつた。一刹那も忘れてはならない自分の大切な職務が、眼の前にあることを、誰れも彼れもが知つてゐた。

で、まだしきりなしに來る餘震に慄へながらも、元氣を出して、また交換臺に坐つた。そして或る者は眞暗な部屋の爲めに提灯をつけた。一人が提灯を持つて立ち、他の一人が、その灯でプラグを差し込む。その働きは平常ならば何でもない事だつたかも知れない。

けれど餘震がくるたびに、その灯を消すのも一つの仕事であつた。消してはつけ、つけては消し、そしてその餘震は、極度に恐怖してゐる人達を、一層恐怖に驅つて行くのであつた。さうしてゐる中にもう市中では火事が起つて、あちらこちらに遁げ惑ふ人々の叫びが手に取るやうに聞える。

けれども此の場合、此の人達は、青森、仙臺、大宮その他の地方からくる電話の取次に、少しの間もゆるがせにすることは出来なかつた。恐れと戦きとにふるへながらも、お互に鼓舞し、鼓舞されつゝ一夜を明した。そこへ追つて來たのは食物の問題だつた。

夜になつて氣のついた、取締の大倉せん子さんは、五人の交換手と一人の電信係の人を連れて、谷

中上三崎北町一三番地の自宅へ走つた。そしてお握をこしらへて、二日未明に再びそれを上野へ運んだ。

二日になつても、餘震と火事は已まなかつた。本所深川其他の區も全滅、下谷の火はすん／＼上野へ延びて來る。こうした報告が刻々に傳つて來る。

中でも、本所深川に家を持つ三人の交換手には、それがどんなにひどいたらう。しかし家を想ふひまはなかつた。家族の安否を氣づかふ餘裕はなかつた。皆の者は職務の爲めに、手を耳とを一瞬も休めることが出来なかつたのである。

火は遂に隣の區役所に移り、驛前の交番にまで迫つて來た。交換室にまで、火の粉が遠慮なく降つて來る。煙はむせぶまでに襲つてくる。驛内に集つた人々の怖れ惑ふ聲が、人事とは思へぬまでに胸を衝く。それでも動かかなかつた。

助役はもう逃げるがよいと注意したが、いざとなれば窓からと覺悟をして、その場に踏みとどまつてゐた。

上野驛の焼け落ちたのは、二日の午後六時頃であつたが、健氣な交換手達は、その僅か前まで危険を冒して働いた。

既に家を失つた人も、またその安否さへわからぬ人達も、その夜、火の粉をくどりながら共に大倉さんのところへ歸つた。

而し皆の働きはまだ／＼終らなかつた。睡眠不足と疲労と不安の心を休める時もたず、翌朝からは田端驛に詰めかけて、また新しい繁忙に、我が身を忘れて一日の休暇もとらず、なほも働きつゞけたのであつた。

『あの騒ぎの中で、人力とは思へない程、皆の者がよく働いてくれました、中でも佐藤清子さん、原田きよ子さんなどは、家もなく、家族の安否さへ永い間知れなかつたのに、事務服一つで、續けざまに働きました。けれども誰一人不平も言はず、よろこんでやつてみました。今ではかへつて、自分達のやうな者が、あれまで働けた事を感謝してゐます。』と疲れた様子もなく、大倉さんは雑沓の田端驛で語るのであつた。

●生命を的に職責を全うした住友銀行員

大地震は不可抗力である。とはいへ帝都の大部分を烏有に歸せしむるやうな慘狀を齎したのは、

人事を竭さなかつた國民否市民の責任といはねばならぬ點も少くない。

地震のため如何に家屋が壊裂し崩潰しても非常時の精神的訓練や火に對する警備心が修養されて居たならば、今回の災害はあの三分の一以下或は猶輕微であつたかも知れない。窓に防火戸を設け、鐵材鐵板を以ての耐火的建築も警備の際防火扉に毫毛の缺陷があつたなら猛火はよくその中に竄入し、その内容は全く焼燬せられてしまふのである。

全焼した日本橋區、そしてその中央白木屋のやうな高層の建物の多い日本橋通りから茅場町に曲つた所に、然も巍然としてそびえて居る住友銀行はさしたる破損もなく、又燃焼もなく、地震後間もなく、店員も事務員も愉快に事務を執つてゐたのは事實であつた。これは同銀行が耐震耐火の建築物として火災保險にも附せず銀行も自ら信じ切つて居たものでもあつたが、四面の猛火が烈風に煽られる時何千度かの高熱を生じて忽ちに鋼鐵を飴の如くに曲げ、各種の建築材料を粉碎したあの九月一日の震災の夜、周圍の白木屋を始めとして加島銀行等總ての家屋が焼け落ちるまで泰然自若として防火作業に従事し命をかけて職責を全うしたが人居たためであつた。

それは同銀行庶務掛主任平賀昌一君を始め守衛権名權之允君、渡邊與一郎君、本島芳次郎君、使丁大倉永作君等の人人であつたのだ。

九月一日の地震！それは確かに強烈なものであつた。瓦は飛ぶ、煉瓦は壊れる、建物は裂ける、忽ちにして都は叫聲の巷と化した。恐怖と騷擾の中に火災が益々猛烈になるといふので本館内の行員は午後三時頃迄に事務を取片付け總て家路を指して避難した。

平賀氏は庶務掛としてこの建物の保全監督に關する一切の責任を持つてゐる。氏にとっては全く絶對的なこの住友銀行の危急の場合、職責上死を的にしてもと職務の遂行を堅く決心したのであつた。氏は前記守衛の外野口恭三郎君、使丁市川丑太郎君、石丸新三郎君、澁谷三藏君等合計九人で先づ上から下まで窓硝子とシャッターとを閉鎖するに決した。同行のシャッターは同行獨特の設計にかかるとので重い鋼鐵製なるにもかゝはらず、僅かの力で上げ下げが容易に出来るものであつたが、今日に限つて窓がしまらない。シャッターも更に動かない。數が多いので氣が氣でないが、これは全く地震のため損傷したのである。平賀主任は應急策として動かぬところは大工道具で叩き落した。窓のしまらぬ箇所はヤスリで鐵を切りもした。午後六時頃迄には漸く完全に閉め終らせることが出来たのであつた。夜に入ると暗黒の裡に群集の叫びが段々大きくなる。火の手は各方面にあがる。銀行の周圍も刻々危険におちいつた。平素から住友の耐震耐火の建築であることを聞いてゐた附近の人々にははかに同行附屬別館内に押寄せた。さなきだに事の多い平賀主任はこれ等避難民の身邊をも案せざるを得なかつた。

つた。夕食を與へる心配やら、周圍の火勢によつては守衛をして呉服橋方面の避難方向を絶えず監視せしめる必要もあつたのだ。

この時各方面に疾走しつゝあつた警視廳自動車は殊更に車を止めて注意した。「命を思ふ人は一刻も早く宮城前廣場へ避難せよ」と。これを聞いた別館内の大部分の避難者にはかに心が動いてここを退いたが只一つの未練があつた。それは各自の財寶であり道具である。重要書類である。やがて若い人達がどつと荷物を別館内に持ち運んだ仁義に勇む平賀君は亦もやこれを庫の地下室に運ぶの勞を惜まなかつた。これがため三十有餘世帯の財寶は全く安全であつたといふ。

かうして民衆救助に努力しつゝも主任は寸時も行内警備から意を放さなかつた。絶えず行内の始末を部下に指揮命令すると同時に自ら先登にたつて各階毎に嚴密なる點檢を加へ萬に一つの遺漏なきを期したのであつた。

時の経過につれ電燈の點れぬ行内は全く暗くなつた。しかし主任は非常の場合腹が減つてはならぬと考へて「一先づ防火作業も完全に終へたから飯を食べよう」と避難の人々と一同揃つて夕飯を終へた此して十分の用意と覺悟をしてゐた折柄猛火に加ふるに四面から寄せ来る烈風就中呉服橋鐵道省方面からの火勢は最も強く大旋風が起つた様だつた。避難者一同の恐怖は時々刻々濃くなつて行くばか

りだ。危険を知つた人々は吾先にと宮城前へ難を避けた。

防火作業を完全に遂行するためと、偶発的な避難者の世話などで、全く避難の時機を逸した平賀主任も一度は揃つて通用門から避難しようとした。

然し飽迄同銀行の建築に信頼した平賀君は四圍の状況に鑑みて「自分は避難するより寧ろ此中を安全と思ふ故に残る。然し諸子が若し安全な血路があると思ふなら一刻も早く避難するがよい」と部下に申し渡した。

此時主任に従ふ者は椎名、渡邊、本島、大倉の四名で確に籠城今後の警備に任じたのである。あとの四名は白木屋がまだ焼けてゐないといふので丸の内に立ち去つた。しかしこれ等の人が呉服橋から丸の内に入るときは鐵道省の燃えてゐる最中で火中を突進して行く苦しさは想像以上であつたさうだ。當時呉服橋の上には黒焦の死體が澤山あつたさうだ。彼等は漸く丸の内へはいつた。

一方主任等は裏口から行内に這入らうとすると火煙の臭が鼻をついた。地下室の電線のごむがくすぶつた爲であるといふ。その後五名で何回となく各階の窓シャッターの狂なきやを検してゐたが今や同行も全く火の大海に没した。各階から銀行周囲を精査したが防火作業には遺漏がないと思はれたので五名で下の大廣間なる營業室を根據と決した。行内最も面積廣く熱度の上昇が少く火煙の抱擁力が最

も多いとの平賀君の判断であつた。

突如として烈風が猛火を煽りたてた。火焰は渦巻いて飛ぶ風は鳴り物凄いな音をたて、焼石がシャッターにぶつかる。見る／＼うちにシャッターは眞赤になつて火花が飛ぶ。さしも行内唯一の大廣間營業室も煙は遠慮會釋なくありとあらゆる間隙から吹き込む。熱度は益々高くなつて呼吸は益々困難になるばかりである。もうとても駄目だとあきらめた事が數回あつた。然し仁に厚く義に勇む主任は金庫の前に部下を集めて曰く「かゝる危急の場合我々が職責上銀行と運命を共にして金庫の前で最後を遂げるのは我々の本望之に若くものはない」と觀念しながらも勵してゐた。

幸にも熱氣が少し減じた。ふと階上小窓から望むに驚くべし。一轉瞬の間にあの莊麗な然も高層な白木屋呉服店が直ぐ前に跡形もなく焼け落ちたのだ。日本橋方面も坂本公園方面も四面全く火の海で見渡す限り只々猛火の荒れ狂ふに任ずるのみだ。只僅かに形をとどめるものは、大建築の殘骸に過ぎなかつた。

夜半十二時頃大火も漸く鎮まつたらしいので裏庭を見ると、先に避難者の持ち込んだ自動車車庫の内の荷物が勢盛んに燃え狂つてゐる。續いて別館の一部は隣の加島銀行からの延焼なる可く内部に火がまはつたらしく黒煙濛々としてゐる。主任はそこは耐火設備のない建物である。愚圖／＼すれば全

體に火がまはる。危険がある一刻も早く食ひとめる様部下を激勵した中に這入らうとすれば煙々、熱氣は高く呼吸は苦しくいかんともなす術がなかつた。その時主任は屋上防火用タンクの水を想起した部下は主任の懐中電燈にたよりながら各自バケツに水を取つて浴びてはかけること數回漸くにして鎮火するを得たといふ。

暫く營業所で休息後午前二時頃亦も大餘震が起つた。然し主任は人事を竭して天命を待つの一念一度起るや勇氣凜々百倍したので今村副支配人に宛てた大體の今迄の経過を記録し終つたといふ。主任は先に立つて屋上に出て見た。

眼前に展開された光景は何といふ惨たるものであつたか。見渡す限り皆火だ。高層の大建築の窓といふ窓は皆赤い焰だ。今迄暗黒な室に閉鎖された主任等はこの慘憺たる光景に打たれて呆然自失黙視するのみだ。然し吹く風も熱く走る煙も黒い。呼吸はなほ苦しい。さて五人は天命が確に恵まれて居た。午前五時頃になると今迄の熱さが次第に減じて來た。周圍の家が皆焼け落ちて燃ゆべき物がなかつたからだ。そのうちに四邊の火も下火となつて住友銀行は安全になつたのである。夜の八時頃から猛火に包圍され危険の身に迫るを顧みず奮然と部下を指揮督勵した平賀君の熱誠が終に完全に勝利を獲得したのだ。

次いで平賀君は地下室から五階屋上迄再検査をして何等の被害なきを確めて「五時二十分平賀外四名立退く。」と書き配し銀行を出て丸の内方面へ行かうとした。先に避難した四名は吳服橋方面から同僚の安否如何と迎ひに來られた「おゝ生きて居ましたか」とあとは感激と狂喜の涙に全く前後を忘れたといふことだ。かうして宮城に一度避難して九時頃平賀外四名の人は銀行を訪ひ一店員に逢つた。折柄地下室に火煙を認めたので警視廳迄消防方を托した。

主任は大體責任を果したと考へ自宅なる小石川白山御殿町百二十七番地に歸つたが母親の不在。待ちわびた可憐な二人の子供の聲をきいた時君は感極つて思はず泣いたといふ。君は火煙に兩眼をおかされ二三日は朦朧としてあくことが出来なかつたといふことだ。然し責任感強き君は其後も三日四日と地下室の鎮火作業に小使に手を引かれながら従事し、七日の朝消防署長が「既に安全なり」との言ある迄終始一貫職責の遂行につとめたのであつた。

かくして住友銀行支店は確實に火災から免れ建物全部平常に復し翌八日から營業開始をなし得たのであつた。

因みに平賀主任は岩手縣花巻の人で幼時より同郷平野安吉、名須川他山（良平）君の漢塾に學び長じて岩手縣立盛岡中學に入學し同校猪川靜雄君の講述された古聖賢の教特に孔孟の教には最も親んだ

といふ。始め別子銅山に勤務、次いで大坂住友合資會社を経て大正元年十月住友銀行東京支店に入り爾來通じて住友に勤めること十有餘年終始庶務掛であつたといふ。その間格勤精勵身を以て職務に従事しつゝあるので行員上下の尊信は頗る厚かつた。殊に行内では侃々諤々の人として上下通じて措かない人であるとの事だ。責任觀念強き平賀主任は平素も同行建物保全に對しては釘一本硝子一枚の果に至るまで綿密な注意を拂ひ廊下の如きも塵一つ落ちてゐることを厭ひ宛も鏡の如き光澤ある廊下として有名であつたといふ。かくの如く平賀君にとつては住友銀行が何を措いても絶對のものであつたのだ。平素から庶務掛の責任を果す可く着々從事する所があつたのだ。

「至誠にして始めて氣慨生ず」と又行爲は品性の表現なり、といふが平賀君に於て始めて見られる即ち日頃責任感強き忠實さがあの危急の場合奮然と立派に實現され自然の暴威を征服したのだ。

同銀行庶務掛の職といへば用度、文書、人事、非常の場合等非營業的に屬する仕事であると。平賀君は當年四十八歳であるがいつも古びた同じ仕事をするので新時代におくれる感じもするが、「生活即精神生活」は平素からの思惟の根強い標的であると主任自ら話された。現に氣のすさんだ時など古文眞寶とか史記列傳等の漢書が唯一の相手だといふ。

同銀行では住友男始あ重役協議の結果生と死との恐しい岐路に立ちつつ寧ろ決死的に徹背籠城して

或は部下を指揮激勵して、その職責を完全に遂行した壯絶極みない行動に感激して、是は銀行をして多大の損害を免れさせたのみならず銀行の聲譽を益々發揚させたものであるとして金壹萬圓と金牌とを贈つてその功勞をねぎらひ、外八名の守衛及び使丁等も賞狀並びに金一封を贈られたといふ。

日本橋區住友銀行庶務掛主任 平賀昌一君 (四十八年)

● 日本銀行を救つた殊勳者

1、責任觀念強き渡邊君等の活動

三井銀行、三越呉服店、同別館等東京否東洋の代表的大建築物が揃も揃つてあの大震災のため猛火の犠牲となつた間に立つて只一つ日本銀行が僅かに三階調査局を焼いたのみで一般の如き大損害を免れたことは注目すべきことだ。

恐怖におそはれた九月一日の夜は明けたが下町方面は炎々として燃えつゝある噂は口から口に傳へられた。大藏省が焼けた。文部省も焼けた。印刷局も烏有に歸した。而して金城鐵壁と信じた日本銀行も亦今類焼しつゝあるとの噂を耳にした時聞く人何れも戰慄を禁じ得なかつた。大震火災の損害は

莫大である。各官廳、會社、銀行、商店の焼失はそれぞれ怖ろしい大損害である。併し國家經濟の大
局から觀ればなほ部分の損害たる感がある。之に反し日本銀行が印刷局と共に焼けたならそれこそ重
大な問題を惹起したに違ひない。實に我國をして經濟上財政上大混亂に陥れ正に産業界の根本的破壊
である。

既に三階をなめ始めたあの猛烈な火勢が如何にして止まつたかが不思議？ いや不思議でない。そ
こには重大な責任の岐路に死を賭して働いた井上總裁始め渡邊庶務主任、守衛小使等の殊勳者が居つ
たためである。

さて日本銀行は今回の大地震に逢つても一條の龜裂も生じなかつた。總裁以下の重役は銀行に被害
のなかつたことを互に心から喜び火災に對しても絶対に安全であるといふ深い自信の下に午後四時頃
歸つたのである。他の行員も總て各我家をさして歸途を急いだ。然るに此時奮然一人居残つた人が居
る。それは同行庶務掛主任渡邊次郎といふ人である。君は局長に申出て曰く「自分は本日非番である
が庶務掛主任として警備のため残りたい」と許可を得て卒先今後の警戒に任じたのであつた。引續い
ての餘震で火焰は各所に見える。人々の不安恐怖は時々刻々増すのみである。守衛小使等も各我が家
を案ずる餘り歸宅を乞ふ者さへあつた。此時渡邊君は守衛小使に宣言して曰く「日本銀行は耐震耐火

ではあるが、萬一火が這入つたら大變である獨り日本銀行の損害に止まらず、實に國家的機關として
その損害の波及することは甚大で計り知れない。故に自分も居止まるが諸君の中非番の者も一人なり
とも此際歸宅は許されない云々」と挺身七十有餘名の守衛小使を率ゐて徹宵警備に盡力する様激勵し
たのである。丁度午後七時頃である。大藏省は既に猛火に包まれ、帝劇は過半焼け落ち夕暮の帝都は
炎々として各方面に燃え上る猛火が空にうつり物すごき極みであつた。

七時から八時の間であつた。内務省大藏省方面の火の子は神田橋方面から舞ひ狂ひ、附近三井三越
の火も折柄の烈風に紅々と燃え狂ふに任せてゐる。同行庭に雨の如く降りしきる火の子は遂に銀行三
階の調査局上の塔に燃えついたのであつた。

これより先渡邊氏は既に危難が銀行に迫つたと感知したので防火作業の第一歩として本館別館内の
窓硝子シャッター全部を閉鎖させることにした。平素閉鎖せぬ所は臨時大工、人夫迄雇ふて數多いシャ
ッターを漸くにして閉め終らせた。次いで貴重の帳簿類テール絨緞等安全地帯に運んだり、或は發火
延焼をたたくき消す等卒先部下を激勵したのであつた。當時水道は全く断え防火作業も僅かにバケツの
水のみであつた。ガソリンぼんぶも水が盡きて如何ともすることが出来なかつた。

渡邊氏は始め西分館に本據地を定めたが火に包まれたので東分館に引上げた。然るに東分館も焼け

たので八時半頃本館に引上げた。貴重帳簿の運搬や防火に極力務めてゐたが折柄三階八角塔に燃えうつた火が益々猛く火の子は二階に迄落ちて来た。黒煙は濛々、火花は散る。本館内の人々はとても目も開き得ず窒息せん許りであつた。渡邊氏は此時衆を本館外電車通り側へ誘導避難させた。火花は到る處から飛んで来る。烈風はあふる。建物が燃え狂ふのみだ。然も水はなし如何ともする事が出来ない。渡邊氏は今は是迄と急を告ぐ可く翌未明傳令二名をして井上總裁、深井理事、川田理事、横邊局長迄急派した。丁度午前五時半頃であつた。銀行の小使二人は漸く命からかく井上氏邸に着いて「銀行に火が這入つた」ことを告げたのであつた。

2、渦まく猛火をくぐつて死守した井上總裁

火勢は猛烈である。故に銀行附屬の建物は或は焼けるであらう。併し本館に火が這入ることは決してあるまいと確信した總裁も流石にこの二人の注進に一驚し、直ちに自動車を銀行に走らせた。丸の内の凱旋道路にさしかゝると自動車は陥没した道路の中に陥つて動かない。氣のあせつた井上氏は止むを得ず車を捨てて徒歩でかけ出した。朝鮮銀行は既に焼け高田商會も亦焼けてゐた。而してその前に停まつてゐた電車は火焰に包まれ盛に燃えてゐる。

拂曉の丸の内は人の往來も少くただ猛火の炎々として天をやき爆發の音のもの凄くひびくのみであ

つた。氏は吳服橋から日本銀行に近づいた。七層の雄大なりし三越吳服店は凄い爆發の音をひびかせて焼けつゝある。三井の建物も燃えてゐたが日銀からは火焰を發してゐない。濠側にいたつて始めて三階が今正に燃えつゝあるを見た。是より先一臺のポンプは渡邊氏の注意によつて行内隈なく濠水を注ぎかけた。内外共に熱しきつてゐるので水は湯となる有様だ。井上氏の來るに先だち深井英五外五六の行員もかけつけてゐた。が如何ともすることが出来ぬ。元來日銀建物の中央頂上には、一基の裝飾塔があつた。周圍は鐵で包まれてゐるが内部は木造である。附近の猛火が炎々として燃え上るに従ひ塔をつゝんだ鐵も亦高熱し内部の木材を焼き塔の崩壊と共に猛火は三階に向つて猛進し室から室へと豊富の可燃物をなめつゝあつたのである。火勢は猛烈である。このまゝに放任すれば國家社會の一大事であると思つた井上氏は直ぐに深井氏と渡邊氏を警視廳に走らせ日銀今危険である一刻の猶豫もなく即刻全力をあげて消火に努めて貰ひたいと依頼せしめた。總監も報を得て大いに驚き直ちにあり合せの一臺のポンプをかけつけさせた。次いで二臺來た。四臺のポンプは何れも最善の努力を以て一齋に濠の水を注ぎかけた。

井上氏は消防署長等に向ひ「三階は既に火勢猛烈である。今はポンプの力を以てするも如何ともすることは出来ぬであらう。これは致方がない。併し行内の倉庫だけは、如何なる犠牲を拂つても助け

ねばならぬ。印刷局が全焼した今日日銀の倉庫が火となつて兌換券を灰燼とすれば今日只今から經濟の運行は停止し國家の財政經濟に與ふる大損害は計るべからざるものがある。どうぞ死力をつくして日銀の倉庫を助けて貰ひたい」と兌換券の使命を説明し且つ懇請した。

署長は「能く分りました。死力をつくして大いにやります。然し私共にはその大事な場所の所在が分りませぬ。従つて何處に主力を注ぐがよいか分りませぬ。倉庫は何處にあるかそれを示して下さいと云ふ。宜しい己が案内するからと井上氏は自ら先頭に立ち署長筒先を案内し、深井氏と共に二階に上り一々重要地位を指示した。その時三階は燃えつゝあつて濛々たる黒煙は行内に満ちて一行を取巻き爲に幾度か窒息の危機に逢ふた。筒先を揃へて注ぎかける水は熱火に逢つて土塵を交へた熱湯となつて一行にふりかゝる服はびしょぬれとなり身體に火傷したものもある。かくして四臺のポンプは全力を指示せられた重要地點に集注し瀧の如き水は一齊に同一地點に注がれた。當時火勢の刻々に險惡に向つたのに憂心安じなかつた氏は署長に對し「日銀が助かる見込がないとすれば致方がない。併し建物は焼けてもせめて兌換券の倉庫だけは助けたい。その一手段として寧ろ爆彈をかけて建物を倒潰したら或は之によつて倉庫だけは火災を免れることはあるまいか」とまでいつた。

署長は「それまたしかに最後の一策であるが。今少し待つて下さい」と答へ部員を督勵し益々防火

に努力した。

午後一時頃になつて署長が「もう大丈夫です。御安心下さい」といつた。心配に心配を重ねて井上氏はこの時始めてホット安心して覺えず流るゝ涙をふるひつゝ深き感謝の辭を述べ三時愈々銀行の安全なのを見警視廳に總監を訪ねてその好意を感謝したといふ。

上は總裁かち下は小使にいたる迄死守した効か將又天祐か大火災に逢ひながら全く同行は類焼を免れたのである。銀行は三日から常の如く業務を取り何百萬圓を拂出し震災後の財政經濟の大變に當り着々良績を擧げてゐる。これは獨り日本銀行のみならず實に日本の名譽である。

その後 皇后陛下焼跡を御見聞あそばされた時君は拜謁を賜り且つ「市中銀行が多數に焼失し金の支拂に困るだらうといふ時東京に歸り罹災地を視て慘害の甚大を悲むだが日本銀行に來てその焼けずに營業せるを見て安心した」旨の御言葉を賜り君は滿身の血液が後頭部に止つた心地し嬉しさに言葉もなく感激の涙を以て御禮を申上げたといふ。あの堂々たる日本銀行の建物のある限り行人は永へに井上總裁始め庶務主任渡邊君、外守衛小使等の美しい行爲に感激の涙をそそぐであらう。

因みに渡邊君は明治三十三年東京府第四中學卒業後慶應義塾大學部に入り三十八年同校卒業後爾來日本銀行に勤務すること十九年有餘。勤務頗る實直精勵の人。修養のため廣く教育家、宗教家、軍人

官吏等あらゆる階級の人と交際するを唯一の楽しみとして居る。

三九八

● 焼けても幸福であつた芝郵便局

——局員及集配人の協同作業により重要書類、郵便物全部無事——

御成門通り第一の大建築物として美観を誇つてゐた。芝郵便局も今は唯だ見渡す限りの焼野原にさゝやかなバラックの建つてゐるのみである。同局所管区内二萬九千の戸数は灰燼に化し、残るは僅九百戸に過ぎず、殆んど全滅同様となつてしまつた。

俄然強震と知るや、直ちに従事員を戸外に出させたため、幸に一人の死傷者も出さなかつたが。局内は彼方此方に龜裂を生じ、頗る危険であるので、局外で執務することにして準備してゐると、丸の内や赤坂方面に見える猛烈な火勢は漸次延焼して来るらしいので、萬一を慮り、局長は非常避難準備の命令を下し、先づ重要書類と郵便物の全部を取出し、更に式紙備品類を搬出しようとしたら震動がはげしくて扉は開かず、壁は龜裂して危険極まりなく到底搬出することは不可能であると思つてゐる中に、さながら破竹の勢を以て攻め寄せる蓮紅の焔は高く天に沖し、愈々危険に類して來た。時に午後

十時、最早や一刻も猶豫出來ぬ場合と、豫め協定して置いた芝公園内の芝中學校の校庭に避難した。ところが風向次第で芝中學もあぶないといふので更に榮町の給水場構内に避難した。

時に丸の内方面よりの火は区内櫻田本郷町。新橋、烏森、芝口方面を焼き盡し、赤坂方面の火は虎の門、巴町、愛宕町を烏有に歸し、遂に芝郵便局も猛火に包まれてしまつたのである。斯くして区内は僅に芝公園地と榮町及今入町の一部を除くの外全く其の影を止めず、翌日の午前七時に至つてやうやく鎮火した。

従事員は避難所の給水場で夜を徹して郵便物を保護し、翌二日假事務所と定めた芝中學校の屋内體操場に引移り、事務開始の準備をするやうになつた。

震災時に於ける沈着なる局長の指揮と、従事員全部が集配人に至るまで一人も歸宅することなくその責任を全ふしたために、郵便局の生命とも言ふべき重要書類は言ふに及ばず、郵便物の全部を安全に搬出することが出來たのである。

● 身を以て主人の愛兒を救つた二人の小僧さん

三九九

井關義美、由種の兩君は同じ村の出身であるが兄弟ではない。深川區木場山本町三番地の材木商で區會議員をしてゐる林熊吉君方に奉公して、忠實に働く上に氣立てがよいので、皆のものから可愛がられてゐた。

大震の日、林君方では一家を舉げて洲崎の飛行場へ逃げようとしたが、川には筏が一杯だし、陸には家屋や材木の倒潰したものが路上に散亂して容易に通れない程であつた。初めは扇橋町に出ようとしたが、通れないといふので鶴歩町に向つた。さうしてゐる中に火が廻つてきたので、一同は筏の上を渡つて逃げて行つた。その時、林君の妻女は愛兒の芳郎さん(七)を義美君に、三郎さん(五)を由種君に頼んで一緒に逃げた。けれども二人は少しづつ一同の者に後れて走るうち兩岸は全く火に圍まれてしまつた。最早や一方の血路をさへ見出すことが出来なかつたのである。二人は主人の愛兒を抱れたまゝ仙臺川の水中に飛込んだ。さうして二つの筏に兩腕をかけ、水の中にあぐらをかいて子供を抱いた。

荒れ狂ふ熱風と火の粉は遠慮會釋もなく降りそゞいだ。二人は子供大切と思ふばかりに我が身の熱さを忘れて、子供たちに水をかけては抱きしめた。熱くなつてはまた水をかけてやり、又抱く。かうして午後の七時前から翌朝の七時頃まで十二時間餘も續いたのである。二人の上半身は黒焦げに焼け

たゞれた。殊に義美君の右腕などは骨の露はれるまでに苛くなつた。それでゐて、二人の子供は幾分か火傷で濟むことが出来たのである。

火が安全になつてから、二人は子供たちを抱いたまゝ陸に上つて、殆んど前後不覺に倒れてゐたが通り懸つた在郷軍人に救はれて洲崎警察に引取られた。警察で應急手當をして貰つてから、家人は尋ねて洲崎の原をうろついてゐるのを、三日の朝になつて、一方此の四人を探し廻つた家人に見出されて互の無事を祝しあふことが出来たのである。家人は勿論四人はたゞ嬉しさに泣くばかりであつた。殊に由種君は張り詰めた氣が一時に緩んで氣絶した位であつた。

林君は四人を大崎の松田病院に入院させ、手厚い療養を加へたので、十二日には退院が出来たけれども、尙ほ靜養を要するので郷里の徳島縣に歸してゐる。實に聞くさへ美しい話ではないか。

本籍	徳島縣勝浦郡勝浦村大谷	井關	義美君 (十七年)
住所	東京市深川區本場山本町三番地林方	井關	由種君 (十六年)
本籍	同上		
住所	同上		

● 本尊様を濡蒲團に包んで

淺草區山の宿町に九品寺といふ淨土宗の寺がある。住職を萩野順導といひ、同派宗務所より朝鮮出張を命ぜられ妻子同伴、今は京城觀水洞に居て新附の國民の教化に盡力中である。留守の間は同町田島町の仁壽が兼務して不在中の佛事一切を處理して居た。然し兼務であるから時々來ては見巡るに過ぎない。

そこで參詣人の接待や掃除其他の雜務を執るべき人物が必要だ。而もその人は着實で信用の出来るといふ條件が必要である。かくして選ばれたのは平松定玄君であつた。君は親子五人暮して長男は某會社に勤め、長女も二男もそれ／＼自活して居るのでその日の暮しには不足のない身であつた。彫刻が職業なので氣が向けば／＼やつて獨り會心の作を得て喜んでゐた。元來物堅い性質なので平素から自分の寺の如く忠實に働いて不在の住職に復興の憂なからしむると同時に、壇家の人々からも非常に目をかけられて居た。君は常に妻子に向つて、いざ火事でもあつたら自分の荷物には一切目をくれな。第一はお本尊様、次は過去帳及重要書類だ。これだけは責任上どうしても出さなければならん。」と口癖のやうにいつてゐた。所が這般の大震災である、附近一帯を舐め盡した猛火は刻々寺に迫つて來た。この時子供等は勤め先にあつたので、手早く大風呂敷に過去帳と大切な書附を入れこれを妻のきしめ(五〇)に負はせ、吾妻橋の假橋の所に避難すべしと命じた。妻女はこゝに約一時間も待つ

たが夫の姿が見えない。然し火は益々身邊に迫るので夫の身を案じながら大風呂敷を荷なつて本願寺に難を避け又もや火に追はれ／＼上野に避難して一夜を明すことになつた。

一方平松君は獨り寺院に踏み止まり火の形勢を見てゐたが愈々危険と見てとると先づ本堂に駆け込み須彌壇に飛び上つて、高さ三尺五寸位の阿彌陀如來の坐像をかゝえて本堂前まで持ち出し、一度は井戸の中に入れやうとしたが、それは不可能に終つた。そこで方々見廻した上、本山建立の開祖、間部侯の墓所に移さうと決心した。間部侯の墓は廻りに鬱蒼と茂つた樹木の中に一丈にも達するやうな墓石が幾墓となく立つてゐて、避難所としては屈強の場所である。君はその真中に如來の尊像を安置し、新調したばかりの四布蒲團を充分に水を含ませて上から之れをおほひ、その廻りをトタン板で幾重にも圍ひ、周りの地面に打水をして火氣を防ぐ用意をした。時は丁度一日午後四時十五分過ぎであつた。この作業が終ると同時に猛火は本堂に燃え移り、また／＼間に寺は火に包まれてしまつた。君は口惜しげに紅蓮の焔を見あげて居たがやがて棟の落ちるのを見届け暫時淺草公園に避難し、ついで仁壽院の荷物を背負つて上野公園に避難した。

上野にある事三日、さしもの猛火も鎮まつたので、本尊の安否を氣遣ひつゝ焼跡に戻つたが、苦心は空しからず安全な姿を拜し努力の無益でなかつた事を喜んだのであつた。君は獨力で假小屋を急

遺しその一室に阿彌陀如來を安置して今は堂守のやうになつてつとめて居る。

かくして自己の責任を果す爲め全財産を犠牲にしたが少しも悔ゆる所がないばかりでなく、僅かの内職に生活の資を得つゝ、本堂再建の一日も早からん事を祈つてゐるのであつた。

東京市淺草區山の宿町九番地 彫刻師 平 松 定 玄君 (五十三年)

● 重い責任と同僚を助ける爲めに生命を捧げた警官

一日午後二時頃日本橋區堀留警察署管内は各所に火災を認め署長以下六十有餘名の署員は極力防火につとめたのであつた。然し折柄の烈風に猛火は益々荒れ狂ふのみ。騒擾と混亂遂に消火栓は破損の破目におち入つた。

同署長、上田一郎君は家財道具を救助すべき萬策盡きて主人を人命救助に注いたのであつた。先づ本隊を小傳馬町交叉點に置いて更に三小隊を左の區域に配置した。

第一小隊は常盤橋から倉掛に至る電車線路の以北。

第二小隊は三越脇から堀留警察署を経て甚兵衛橋にいたる。

第三小隊は三越から叙上以南(羽出逸郎警官の所屬部隊)

炎々たる火焰は市街から市街へと飛んで火に追ひまくられたので本隊は遂に江戸橋に引上げた。今や管内全く火の海だ。ために署員はほとんど連絡を失つたのである。午後八時頃同署勤務當時本隊所屬石井警部は最後より警戒を加へながら小傳馬電車交叉點から小網仲町を経て親爺橋に着いた。橋のたもとの詰所には同勤務羽出逸郎君がその時居合せた。北島莊輔巡查と老巡查塚本君を激励しながら警備に任じてゐたのであつた。同派出所附近には民衆の荷物が山の如く然も皆燃え出してゐるが人の影すら見えぬ。

石井警部は直ちに自分と共に出羽氏等に引上方を命じた。然るに出羽氏は真先に進んで曰く「自分は今日こそ非番であるが元來交番の詰員です。交番内は避難者の貴金屬で一杯ですから自分としては交番の焼け落ちる迄踏み止る」ときつぱり言切つた。然し警部は尙も之を留めて曰く「もう澤山だ。時が一刻も早く立退く様。」にと再三警告する所があつた。時に江戸橋もあら目橋も橋上の荷物の燃焼中だ。一方の間道思案橋は既に墜落したとの事である。

石井警部は江戸橋から宮城方面に避難す可く道を急いだが、今は全く三方火に攻められ親爺橋を引返す一途あるのみだ。外の八九名の巡查を率ゐて親爺橋を渡つて元の道を引返したのであつた。出羽

氏外二名も警部の厚意に感じて親爺橋を續いて渡らうとした。折しも後方、あら目橋の方面濛々たる火の中から三人の叫びがきこえる。出羽巡査は「ソラ大變」と是等の人達に橋を早く渡る様に手配した。自分等はその後をついで渡らうといふ一瞬時、橋上に山なす荷物は突如火焰と化した。今まで熱しきつてゐたのである。これこそ全く猛火に包圍されたのだ。橋下の舟にたよらうとするに、これも亦火事絶體絶命だ。遂に奮發一番川中に飛び込み泳ぎ渡ることにした。出羽、北島の二氏は先頭にあつて今少して向岸に泳ぎつかうとする際、塚本巡査は一人河岸に立つて叫んだ。「待つてくれ君等は俺一人をこゝに残して行くのか」と出羽氏も北島氏も事の意外に驚いた。あゝこれは大變。塚本氏は泳を知らぬ。「失敬、では引返さう」と。折角ついたものを又引返して、木か綱にたどらせて向岸へ渡さうと手配したのであつた。

此の引返しの瞬間、折柄の烈風で既に向岸小網仲町はあろか、川の兩岸は全く猛火になめられて泳ぎ渡るも退くも、不可となつた。今は「是迄」と、三人共「水中で夜を明かさう。」と共に橋の下のけたにつかまつてゐた。

橋は木橋である。荷物の火でそれこそ熱しきつてゐる見る／＼中に遂に焼け落ちた。丁度兩岸及び橋の焼け落ちるまで火の子は飛ぶ。煙は渦巻く。河水は湯となる許り呼吸は苦しくなる一方だ。

塚本氏は「苦しい／＼自分はとても駄目だ。」と幾度か二人を呼んだ。二人は幾度か堪えず足で河水の下を通る冷い水をかきよせては塚本氏の身邊におくりながら勵してゐたが、何時の間にか、お互の聲は消え失せた。かくして水中に居ること十三時間。

翌朝未明町民某が焼跡に來た時、人に呼ばれて始めて氣がついた。見あげようとすれば全く身體の自由を失つて三人共に眼が見えない。後で人事不省、失明といふことがわかつた。三人とも町民に手を引かれながら救護所に送られた。北島氏は今は日本橋區本石町一丁目交番にいつもの様に勤務してゐるが塚本氏は年も五十平素から虚弱であつたが、永く赤十字病院に加療中であつた。

出羽氏は當時直ちに北里病院に入院したがまもなく一週間後に永眠されたのであつた。聞けば入院中腦に變化を來したそうだ。涙ぐましい一片の哀話そこには職務に忠實然も同僚を思ふ厚き情操の最高の發露を見る。

當局も其の功勞を認むるに吝かでなかつた。死に臨むで、勳八等巡査部長に昇進されたのであつた

東京市日本橋區留警署詰巡査部長 出羽逸郎君

●繁忙を極めた板橋署の通信連絡

攝政宮殿下の御動靜及び宮城、離宮の御模様につき日光に御避暑中の聖上陛下から御下問があつたのに對し第一に答へ得たのは板橋警察署である。

一日の大震と共に東京地方との通信機關は悉く杜絶した。栃木縣知事は、陛下の御下問を受け、直ちに埼玉縣に移牒し、埼玉縣は警察課長を派して板橋署に報告を求めたのである。

二日には埼玉警察部の努力に依つて板橋署と同警察部との電話連絡が復活し、日本全國の通信は埼玉警察部を経て悉く板橋署に集中した。

板橋署は更に自轉車に依つて警視廳との連絡を圖り、情報を得て之を各地に通じた。こゝに板橋署は通信の咽喉となり、二日には各宮家の御狀況、山本内閣の成立等を報じたのを始とし、幾多の重要な通信事務が取扱はれた。左に九月二日中に扱はれた一二の例を擧げよう。

大正十二年九月二日

板橋警察部長

内務大臣殿

只今埼玉縣警察部ヲ經テ神奈川縣知事ヨリノ報告ノ件左記ノ通り電話有之候條此段及申報候也

左記

神奈川縣知事

内務大臣殿

一日正午横濱市及ビ附近ニ一大地震アリ引續キ大火災ヲ起シ全市火ノ海ト化シ死傷者幾萬ヲ知ラズ交通、通運、諸機關不通 至急警護ヲ要ス。以上

右ハ交通機關杜絶ノタメ神奈川縣知事ヨリ無線電信ニテ茨城縣ニ依頼アリ、茨城縣ヨリ埼玉縣ニ依頼シタルモノナリ。

以下前文を略する。何れも埼玉縣警察部を經由し板橋署の手を経たものである。

茨城縣知事

内務書記官殿

米輸送ニ關スル貴辨、接受、直チニ縣營倉、其ノ他ニ向ケ手配セシメタリ。尙ホ福島、宮城兩縣ニ轉電濟ミ。

板橋署長

内務省出張所御中

只今埼玉縣廳ヨリ馬鈴薯六十俵、押麥三百貫、川口町マデ送付致スベク、直チニ責任者ヲ受取リノ爲出張セシメラレタキ旨有之候條、此ノ段及移牒候也。

山形縣知事

内務省社會局長殿

一、先刻取次ノ東京災害ニ付キ食糧輸送ノ件

電文拜廳 食糧輸送ノ件ハ目下八方ニ手配中

一、本日午後六時發ニテ内務部長ヲ上京セシム。

九月二日午後八時

秩父宮殿下

明三日午前九時三十分(目光御發)中仙道ヲ通過シテ御歸京アラセラルルニ付警部補警衛ノコト

栃木縣知事

内務大臣殿

罹災民救助ノ件

米十萬石、味噌約二十一萬貫、醬油五千石、干瓢五萬貫、罐詰二萬個、蓆十萬枚、木炭百萬貫、梅干及飯料桶若干 發送

取敢ヘズ現金三四萬圓御發送御取計ヒ相成度候

等、實に市民の生命に關はる重大なる通信が一警察署の手で行はれたのである。當署時内にありては不眠不休此の事務に従事したのは巡查部長豊田與重郎、巡查遠藤哲郎、田中茂樹の三氏で、自轉車を以て困難を侵しつゝ、警視廳と板橋署との連絡を圖つた殊勲者は、

巡查部長 清水金五郎 一森 薫

巡查 笹本忠治郎 平河 谷藏 岡部 秀作 羽切 正男 白松 昌純

阿部 千藏 永杉 義男 栗原 二郎

尙ほ同署の勝れた活動はこれのみに止まらない。彼の鮮人に關する流言の傳はるや直ちに稍危険と認める者數名は旨を含めて檢束し、他の者には誤解を防ぐため外出を避けさせ、更に一般民に管内には既に暴行する如き者は断じて無いから親切に保護すべき旨を通じたので同署管内には一つの不祥事もなかつた。又衛生に格勤な巡查部長岩重昇君が居て熱心に傳染病豫防に従事したので住民は約倍加

し、且つ衛生上極めて不利なる状態におかれたにも關らず、九月十月の間昨年二十七件に對し本年は僅に十七件に過ぎぬとの事である。

北豊島郡板橋警察署

●細民の慈父小野塚巡查の殉職

深川扇橋警察署の高等係小野塚與八君といへば、新聞をみる程の人々は可なりに廣く其の名を知られて居たものである。君は大正四年の十一月四日に警視廳巡查を拜命して以來、精勵恪勤よく其の職に盡した。其の七年十ヶ月の間扇橋署にあつて、殊に猿江裏町の細民部落を擔當すること滿四ヶ年の長きに及んだ。

小野塚さんは風姿恰も田舎爺さんの如く、官憲によくある威嚴などいふことは少しも眼中になかつた。あるものはたゞ細民階級に對する慈愛と同情とのみであつた。君は本當に人格の人であつた。決して威壓の人ではなかつた。労働者町に住む猛獸みたいな荒くれ男が酒に酔うて大喧嘩をしてゐる時でも小野塚巡查の顔をみると「ソレ甘さんが來た」と云つて、さしもの喧嘩が物別れになるといふ位

であつた。「甘さん」といふのは「甘いよい方」といふ意味であつた。けれども、君が更に強く永遠を望んで力を入れたのは其の子供たちであつた。富川町から猿江裏にかけての細民子弟は、小野塚さんを見ると「小父さん〜」といつて慕ひ寄つた。いつも四月の一日になると、木賃宿止宿の兒童を引率して學校へ入學させた。君は労働者の生活を改善するには、其の根本に遡つて、彼等の兒童を教育の力によつて改善するより外に第一の策はないと考へた。そこで君は毎年十二月頃から木賃宿止宿者の兒童を調査して置いて、四月一日になると自ら是を引率して靈岸小學校へ入學させるといふ、誠にあの小子部のすがるを偲ばせるやうな温い心の持主であつた。

かうした間に、君は深く細民其物の研究を進めて行つた。其の中の一つとして有名なものは、富川町木賃宿散布地圖の作製であつた。地圖には一々宿屋名及び收容可能人員並に現在收容人員、疊數及一人配當疊數まで一目瞭然たらしめたもので、木賃宿研究者にとつては頗る有益なものであつた。又細民生活狀況の調査も亦委しいもので、曾て靈岸小學校訓導近藤堅三君が公にした細民生活に關するパンフレットも、小野塚君の研究に負ふ所が多いといふことである。で、最近に於いては、細民研究の人々は必ず先づ扇橋署に小野塚巡查を訪ねるのが例になつてゐたといふ程である。而して突如として來つた大震災が忽ちにして此の人を仆したといふことは「細民部落にとつては無上の不幸である。

大正十二年九月一日、俄に起つた激震は我が帝都に甚大な被害を與へたのであつた。此の時、小野塚君は逸早く富川町方面の被害調査のために出動した。然るに此の方面の被害は意外に甚しく、算を亂して倒潰した家屋、その家屋の下敷となつて呻き叫ぶ聲、到底見るに忍びざるものがあつた。乃ち君は同町の大寅事平井寅吉並に其の部下と共に決死隊を組織して之が救助と防火の事に働いた。其の結果午後三時頃までに三十餘名の者を救助し、之を本所林町二ノ八九燔風會内の空地に收容することが出来た。かうして置いて君は一と先歸署して之を報告し、再び出動したのである。

午後四時半頃になつて東大工町から發した火が、東京紡績會社に延焼し、大勢富川町も延焼の運命にあることが分つた。そこで富川町の住民も急遽避難の必要を感じたのであるが、折柄東元橋に至る富川町河岸の家屋が倒潰して通路が無かつたので、東森下町に通ずる道を岩崎遊園に避難すべき由を絶叫して、數千の住民を其の方面へ落してやつた。

とかうする間に、猛火は四面に襲來して、漸次に危険は我が身に迫つてきた。今は早や此れまでなりと思ひながらも、君は尙ほ逃げ後れた住民を救護する爲めに渾身の努力を捧げてゐた。そのために恰も伊豫橋際に出た時には、四面全く火を以て包まれ、自身の避難さへも困難なる立場に陥つてしまつたのである。而も尙ほ君は我が身を顧るの暇がなかつた。午後五時四十五分の頃君は躍然として伊

豫川の水中に投じて官服を濡らし、再び東森下町方面に上陸し、飽くまで住民の救助に盡力しつゝあつたが、卒然として起つた大旋風は、此の撓まざる勇者を空中に捲き上げて、貴き其の生命を奪つたのである。

噫、小野塚與八君は死んだ。天何ぞ無情なると云ひたくなる。十一月七日、官其功を賞して勳七等に叙し瑞寶章を授けられた。君の英靈或は地下には、笑ひであらうか。

東京市深川區千田町一三八 小野塚與八君 (三十七年)

● 奇蹟的に新大橋を救つて一萬有餘

の人命を救助した羽鳥巡查の一團

大地震に加ふるに大火事で鐵橋も木橋も随分落ちた。厩橋にせよ、吾妻橋永代橋等の大きなものを始めとしてその數は極めて多い。然もこれと同時にその附近で數千數萬の死傷者を續出したのであつた。その原因はといへば橋上の避難者の荷物が火を呼んだのであるといふ。

隅田川に跨るほとんど焼失した六大橋の中日本橋區濱町河岸と深川區安宅町にかけられた新大橋は

今なほ依然として一大交通機關として行き交ふ人の驚異の的となつてゐる。然し火災當時一萬二三千人の人が橋上で救はれたのは確かで其後各方面交通遮断されたのを一手に引受けた効績は埋没すべからざるものである。

いかにして橋をして災禍を免れさせて人命救助をなし得たか、以て交通遮断を防遏なし得たかが問題である。その原因原動力は正に久松警察署新大橋西詰派出所巡查羽鳥源作君外三村光、今給黎克己植木機禪、伊藤盛雄、浅見武雄等の沈着勇敢に一致協力臨機の處置よろしきを得た活動によるものが少くない。

就中同詰所組長羽鳥源作君の一家全焼の悲境に陥りたる妻子を顧みず敏活勇敢に火災の原因を絶つて橋上の人を安泰にさせ、或は救助船を活動させるやら倒壊家屋下から人命救助に努力した手柄は、署長始め同僚はおろか一般所轄區民一同をして感激せしむるものがあつた。

羽鳥君を濱町新大橋派出所に訪ふと「別に殊勳といふ程でもない。只辛じて職責を盡したといふに過ぎない。けれども外の人や署長から命を受けて發動したといふのではない。あの時宿直員として居合せた人が悉く前以て計畫したやうに揃ひもそろつて撤背盡力する事の出来たのは、平素全く同心一體の様にしてをつたからであらう」。なほ當時を述懐して曰く「自分は九月一日丁度宿直當番で派出所

でいつもの様に見張つて居たが、あの大地震で大音響を聞くが早いか、濱町二の一四に立並ぶ棚橋辰次郎君家屋外十四軒は一齊に倒壊されたのであつて、自分は直ぐに飛んでいつて鈴木フサ外五名の婦女を家の下から引摺り出して是等の人を山村病院看護婦に托した。それから詰所に歸つて晝食をすまし今後の警備に任じたのであつた。折柄向岸をへだてて自宅深川區西森下町四十二番地の附近は一面火の海となつた。妻子の事も案じられるが、今は是迄なりと決然派出管内の倒壊家屋及びそれに附随する狀況視察に赴いた。濱町方面の火は益々高く次いで颯殼町三丁目の土洲橋に近い杉村倉庫を焼きつつあつた。四面火の流となるので、かうなつては人命救助が第一だと自分は避難方向を沈思した。上野公園方面が第一次に日比谷方面と確に自分は心中固持するところがあつた。

その時ふと本所深川方面を望んだところが各所に火災が起つて避難の群集は隅田川岸に所を定めたが火煙に追はれて危険が一時に迫る有様であつた」と。

羽鳥君は前記淺見、今給黎三村等の警官と協力一致して是等の死に瀕して居る群集を安全地帯に輸送するに一決した。即ち直ちに新大橋側山村病院前に碇泊して居る汽船堺丸及航行中の汽船を出し、これに傳馬船を曳かせて各三回にわたつて一船一回約三百名位乗船させ、猛火を冒して當時安全地帯であつた管内濱町三の一に移したのであつた。その數は約二千名であつたといふ。その際負傷者も多

敷あつた。皆山病院に入院させ應急手當を施したのであつた。

かくて安宅町を隔てて自宅を焼き拂つた火勢は益強く森下町を焼き拂つて火は此方に押しよせ、三六寺を焼きつくした。續いて本所被服廠方面の大旋風の餘波は御舟藏前安宅町に延焼した。附近に水道出張所があつて水道の職工も死守防火につとめたが、これも焼き拂つた。次いで本多鐵工所に點火した。その時である。新大橋の橋上には日本橋濱町方面から避難する人及びその人の家財道具又深川方面からの群集とその荷物で立錐の餘地なき程であつた。全く身動き出来ぬ程の雜沓で婦女子老人の泣き叫ぶ聲は猛火烈風と相呼應してその慘狀は實に目もあてられぬ程であつた。

見る／＼内に火は橋上に殊に東詰のたもとに延焼した。火の子が附近の荷物に飛んだためである。烈風のために西詰の方に延焼も瞬く間である。羽鳥、三村、今給黎植木等之を對岸視するの情に忍びなかつた。防ぐは今だと許りに荷を越え人を越えて漸く火に近づいた。然し火の強いために防止するの術なきを遺憾とした。

羽鳥君は考へた。「荷物を河中に投ずるに若かず。」とさとして、抜刀して大小の荷物を河中に投じた又燃えつつあつた車や荷物迄皆投棄したりバケツで川水を汲み上げて漸く鎮火させた。

同日十時頃である。濱町方面からの火の子は益々猛烈に降るが如くである。羽鳥君は亦もやあらん

限りの大聲で怒鳴つて民衆に豫吉した「命が大切か荷物が大切か命が大切と思ふものは一刻も早く荷物を河中に棄てよ。」と民衆は唯顔を見合せるのみだ。羽鳥君は仕方がないので更に警告して言つた。「警察は人命救助が主で家財道具保全是従たる故に、諸君がすてなければ警察は率先してすててしまふ。」と怒鳴り續けた。

此時羽鳥氏外三名の巡查は必死となつて麻繩を裁りつつ燃えつつある荷物はおろか延焼の憂ある物品總てを隅田川に投棄した。荷物に未練を持つた民衆中からも應援者が出た。日本橋區在郷軍人加藤肆郎氏と佐藤音吉氏等は極力荷物を河中に投じた。一方橋のたもとには佐藤警官が淺見警官と抜劍して大聲で怒鳴つた。「荷物を持つた者は此橋を通さぬ、命の惜しい者は持つてゐる荷物をみんな棄ててから通れ」と叱呼して荷物を少しでも携へてゐる者は容易に橋を渡らせない有様だつた。居合せた麻布歩兵一聯隊兵卒加藤市太郎君が奮闘したのも此時である。

かうした警官始め應援者の必死的な我れを忘れての活動のため六大橋（隅田川にまたがる）の中新大橋のみが完全なることが出来たのである。然も一萬の生命が安全に救はれたのである。今度の震災に最も悲惨を極めた被服廠跡もこの荷物のためであつたといふことである。

思へば大事な家財道具を棄てさせて、一時人々からひどく怨まれた明敏な羽鳥君外數名の警官こそ

全く一萬人の生命の親であつた。更にこの警官に應援して必死となつて働いた在郷軍人の佐藤君並びに加藤君兵卒加藤市太郎君等も亦この一萬人の生命の救主と云はねばならぬ。所行を斷行するの行動と臨機應變の處置とが遂によく此新大橋を救ひ一萬有餘の生命を安全ならしめたのである。

久松警察署新大橋四詰派出所巡査

羽 鳥 源 作君 外數名

● 火に圍まれた汽船の大活動

火の追撃は、櫓やかいで漕ぎ出す船位ではとても逃げをはせることは出来なかつた。

追ひに追はれて辛うじて河岸まであえぎついた隅田川兩岸幾萬の群集は、傳馬といはずだるまといはず、ボートといはず漁船といはず或は泳ぎついて或はとび乗つて救ひを叫ぶのであつた。

駒田警部を總司令とし烏海警部補以下十一名の警官を乗せた水上署汽艇快進丸は、水面一帯煙と火の粉で先きは分らねど、これら悲鳴を便りに護岸近くにつき進み、川中めがけて船を引き出しては火から遠ざけさせるのであつた。或は石川島へ、月島へ。

永代橋トをこうして十何回も上下した快進丸は、燃料積込みに水上署へ引上げることの餘儀なくさ

れた。そのひまにも、駒田警部以下數名は、自動艇隅田丸を運轉して、明石町河岸一帯に蟬集して居る群集のため多くの空船を曳いて來ることに聲をからした。しかしもつと上流沿岸に、曳き残した多くの船を氣づかつたこの一隊は、また汽船隅田丸三十四號に移乗して、永代橋の上流めがけて突き進んだ。兩岸の炎はもうこの船の上の人までも、頭から水を浴びなければ居られない程押かぶさつて居るのであつた。さうして永代橋の橋臺までも續いて居た。

人を救ふに血走つた駒田警部の一隊と、これらの人の命を守るに嚴な隅田丸三十四號の船長船員はこの危険な火の柱となつてゐる橋の下をも物ともしないでつきぬけたその刹那、永代橋は焼け落ちたのであつた。下流との通路を絶たれたこの隅田丸は、荒狂ふ波や火焰と戦ひながら、又いく十艘かの船を曳き出しては本所方面へと逃すのであつた。或る時は船のもらいを切るために水中に躍り込んだ事も度々あつた又。波をかぶつて危く沈没しかかつた事も二度や三度ではなかつた。燃えながら流れて來る船にくつつかれて、火事となりさうになつた事も幾度かあつた。さうしてこうした目覺ましい活動を續けて居るうちに汽船のいのである燃料コークスがまたも失くなつて行くのであつた。

駒田警部は、附近に群る汽船を徴發しようと思つたが、どの船も數十數百の人の命を曳いてゐるのを見ては、それをどうする術もなかつた。已むを得ず岸の上つては、コークスの有り場を探し

て汽船に運んで又活動を續けたのであつた。

午前三時、尙も炎々たる上流目がけて急航を企てた駒田警部の一隊は、夜中焼落ちた厩橋のため、避難船通路の絶たれたのを見たのであつた。

「もうこの上は軍隊の手によつて。」と思つた警部は、飢渴と疲勞に昏倒せむとしてゐる船員を大聲叱咤して遂に赤羽工兵隊差して猛進し、小池大尉の率ゐる一隊と力を協せて、各橋臺の爆烈に或は群る避難船の指揮にと死力をつくして、水上署へ引上げたのは、實に九月二日の夕であつた。

明暦江戸の大火には、大川沿岸の死傷實に十萬を越えたりときく。しかし今回の大震火災のそれは僅かにその十分の一に過ぎないだらうと。こうした結果はいろいろの理由にもよるけれど、大川一帯に、すべてを忘れて活動した多くの大小汽船や船頭や、又水上署員一同のこうした機敏と努力とで現はされた功も亦忘れることの出来ない大きな事實なのである。

水上警察署部

駒田宗一郎君 外警官數名

●身を挺して職務の爲に奮闘せし警官

強震後間もなく火は緑町から起り狂亂の民衆はなだれを打つて走る。負傷者は十四五名も交番に運ばれた。立原巡査は水野巡査と共に之が應急の手當をしつゝも逃げまどふ民衆の保護に努めた。

見る／＼中に火の手は菊川町からも、徳右衛門町からも上つて来て午後四時にはもう花町派出所管下は恐るべき危機に迫られた。巡査は今はこれ迄と覺悟して管下の民衆や避難の人々を一時石置場へ避難させた。間もなくこゝも緑町方面の火で危くなつたので、「それつ、早く橋を渡つて」と民衆の一人々々に氣勢をそへて燃えかゝつてゐる堅川橋を渡らせた。それからのは火の廻らぬ方を選んで高橋から大川端に出で蛤町を経てやつとの思ひで海軍の糧秣廠近くまで逃げのびた。この邊りは押し寄せる民衆波をうちのろひの火は人を焼き家を焼き天をも焦がして實に物凄光景であつた。二人の巡査はこゝにも長くは居られぬと思ひ、愈々死を決して五町もある海を渡らうとした。早速剣を外し服をぬぎ、それを右手に持つてざんぶとばかり海におどり込んだ。然しながら彼岸は疲れた巡査が泳ぎ切るには餘りに遠すぎる。二人は喘ぎ／＼泳いでゐる中に天祐にも一本の丸太が流れて來たので、それに身を寄せ猶も勇を鼓して遂に向ひの岸に泳ぎ着いた。

そこは航空學校の裏手で丁度大きな沼(越中島の原)があつた。暗闇の沼の中には約二三千の民衆が不安と恐怖におそはれて、腹までもある水の中にひたつては水のかけくらをしてゐる。これを見た

巡査は「やあこれは大變だ。もうぼつ／＼上げ潮になつてくる。すると見る／＼中に彼等は溺れるのである」何とかして救助の途はないかと齒がみしてその策を講ずる折柄、ふと二艘の荷足が目についた巡査はその船に躍り込んで「この船をよこせ」と船頭にいつた。船頭は餘りの言葉にあきれ言下に拒絶した。そこで暫くは巡査と船頭との口論となつた。そして遂に「三千の人命が尊いか二人の命が重いか」の激論となり、飽く迄拒めば己は死を以てお前の船を奪つて見せると、早一人の巡査の手は劍を堅く握りしめた。船頭は暫し考へた：「瞬間に彼れの頭腦にも犠牲の焰が燃え上り不思議にも巡査の奉公心と固く結びついた：「では貸します。そして私も出来るだけ御助力をいたしませう」といつた。二人の巡査はニッコリと美つた。あゝ怖ろしかりし數分前の光景よ！

今は巡査も船頭も打ちとけて猛然沼中の避難者を救済することになつた。それから二艘の船へのれる丈のせては洲崎埋立地の内務省建築場を目掛けて運ばした。救はれた壯年者は我も我もと體を漕いだ。かうした事が一日の夜通し何回となく繰り返されて沼中の人の大部分は皆安全地帯へ逃れた。

けれどもこの雄々しい犠牲の裏には聞くも涙ぐましい哀話がある。立原巡査は飛び来る灰で眼はつぶれ、身は綿の如く疲れてゐた。身は疲れても心にかゝるは老いたる母と一人の妹の身の上であつた翌二日巡査は多分こちらへ避難したであらうと思はるゝ龜戸方面を隈なく尋ね歩いた。けれども母も

妹も見つからなかつた。なほ非番々々に尋ね歩いてやつと四日目に妹を発見したが、その時の妹は見るも憐れにもう不歸の人となつてゐた。巡査は涙ながらに茶毘に附し妙久寺に葬つた。汚れた服に骨瓶をかゝへて思ひに沈んだ巡査が跣足のまゝ歩いてゐた様は實に形容し難い氣の毒さであつた。敬愛せる母はそれから三十日もして漸く発見された。それも五十二人の死者と一緒に着衣のまゝ妙久寺の傍に埋められてゐたのであつた。巡査は涙ながらに發掘して手厚く妙久寺に葬つたといふ事である。

本所區相生警察署花町巡査派出所詰巡査

立原忠治君（三十四年）

●勇敢なる警部の活動

芝の赤羽橋の側に、煙草專賣局赤羽分工場がある。九月一日の震災に同工場は見る見る中に崩壊してしまつた。折柄従業中の男女工は吾先にと屋外に逃がれたが、逃げ残つた者は悉く崩壊した大きな煉瓦の塊や、太い柱のために壓しつぶされ、見るも無慘な有様であつた。急を聞いた三田警察の風戸警部は部下の宮瀬小林兩警部補に、警察醫及藤本巡査外三十七名を率ゐて現場に走せ向うた。ところが建物は非常に危険な程度にまで崩壊して餘震のある度毎に、はりにさゝへられてゐる大きな煉瓦の

塊や倒れかゝつた柱が、頭の上に落下しようとしてゐる。しかし、そんなことを恐れてゐる場合でないといふと堅く決心した風戸警部は、身に迫る危険を冒し、部下を督勵して泣き叫んでゐる哀れなこれ等の人々を救つた。全部救つたと思はれる頃、風戸警部は二三回大きな聲で、生残者の有無を確かめ室内に全く聲のないのを見て引き上げたといふことである。救ひ出された人の中で、最も哀れであつたのは鈴木トナ(十八歳)と言ふ女工であつた。彼女は府下荏原郡の平塚村から毎日専賣局に通つてゐたのである。彼女は地震と同時に直径尺餘もあらうといふ太い柱のために兩脚を壓しつぶされ、如何にもがいても到底逃れることは出来ない、大きな聲で救ひを求めたが、救ふ方の人も、唯だかはいさうだと思ふのみで、矢つ張りどうすることも出来なかつた。しかし、この哀れな女の境遇を目のあたり目撃した風戸警部は、どうして彼女一人を残してこのまゝこゝを引き上げることが出来よう。彼女も他の者と同じやうに救つてやりたい。と考へた。人の力では彼女の上に倒れてゐる柱はどうすることも出来ぬ。この上は彼女の脚を切斷して、救ひ出すより他に道はない。そこで警察醫に、その場に行つて兩脚切斷のことを頼んだが、前にも言つたやうな、危険な場所で大きな餘震があれば、自分の身も危いと言ふ場合であるから、警察醫も躊躇して這入らうとはしなかつた。「そんなことを言つてゐる場合でない。はやく行つて切斷してやつてくれ。」といふ警部の言葉にはげまされて、とう／＼彼女を助

け出した。彼女はその時、手を合せてよろこんだといふことである。

たとへ、警察官の職責とは言へ、かゝる危険を冒して廿三名までも命を救ひ、これ等の人を悉く附近の濟生會に收容した風戸警部以下警察官諸氏の行動は眞に責任を完うしたものゝ範となすべきである。

東京市三田警察署警部

風 戸

光君

● 巡査の機敏感電したる書生を救ふ

九月十七日の事であつた。電燈線に觸れて苦悶してゐる書生があるとの急報が青山警察署に傳へられた。事情はかうである。青山南町五丁目七十二番地川上半三郎氏宅では大地震のため破損した場所を修繕せんものと同家の書生坂本卯之吉君(二十一歳)が屋根に上つて一心に働いてゐた。丁度朝の九時四十分頃である。坂本君は仕事に熱中してゐたためであつたらう。誤つて足を踏みこらせた。ハツと思つた瞬間體のバランスを執らうとして思はず手が頭上に擧がる。頭上にあつた何物かを無意識的に掴む後は夢中で唯苦しみ悶えてゐたのだ。それもその筈、坂本君の掴んだのは三千三百ボルトの高

屋線であつた。右の手に其の電燈線を掴んでやはり屋根の上方にあつた。他の電線三本の上に倒れてゐる。實に危険の話だ一分二分數分は忽ちに過ぎて行く。之を見付けた家人は唯驚いた。救ふべく何等の術もない。アレヨ／＼と叫ぶ中にも坂本君の生命は刻々に奪はれつゝあるのだ。警察署へ知れたのは其の窮餘の結果であつた。

急報に接した齋藤巡査は、取るものも取り敢へず現場に駆け着けた。附近から梯子を借りて来て直ちに屋根に上つた。地震のために破損して處々瓦が落ちてゐる。非常に危険であつたが、齋藤巡査はそんなことには少しも氣をとめず、坂本君の苦悶してゐる場所へ眞一文字に走せ上つた。近寄るが否や着てゐた官服の上衣を脱いで、彼が掴まつてゐた高壓線を包み之をハネ上げた。其の反動を受けて電線を離れた坂本君は屋根の上に轉倒し、あはや地上に墜落せんとした。巡査は自身の危険をも恐れず、片足を踏み出し辛うじて體の中心を保ちながら、漸く坂本君を押し付けて之を引止めた。附近から數名の應援もあつて無事彼を地上に置くことが出来た。

危機一髪の間坂本君は救はれたのである。當時更に數分間を遅れたならば到底彼の一命を全うすることは出来なかつた。齋藤巡査の機敏なる行動と、救助方法の宜しかつたことは、自己の危難を顧みざる犠牲的精神と相俟つて貴重なる一生命を救ひ留めたものと云ふべきである。

青山警察署 巡査 齋藤 忠 治君 (三十四年)

● 巢鴨警察署管内の朝鮮人保護

一、巢鴨警察署

震災後間もなく種々の流言蜚語が傳へられて罹災地一般に少からず不安の状態に置かれてあつた。中にも朝鮮人に對するものは其の影響するところ最も甚しく、爲めに到る所驚くべき不祥事を惹き起したことは何人も知る所であらう。

然るに巢鴨警察署に於ては署長二重作兼藏君の指揮宜しきを得て未然に事を防ぎ、大なる誤なからしめたのであつた。高等係山下義勝君以下は直ちに活動を開始して無辜の鮮人等の保護に當り、本署に連れ來つては演武場に之を收容した。管内は當時一千名位の鮮人が居た筈で、高等係の連れ來つた鮮人等は忽ち演武場に溢れるやうになつた。雜司ヶ谷水久保の活動寫眞館三榮館、宮仲二八〇番地日東紡績會社の空き工場、雜司ヶ谷四二九番地日華青年會館の三箇所を徵發して引續き收容保護した勿論附近の住民や自警團等から抗議のあつた事は云ふまでもない。署長は百方彼等を宥めて飽くまで

保護に盡力した。

三日から始めたのであつたが十一日には鮮人の中三百名を目黒競馬場に送つた。警視廳の鮮人收容所が此處にあつたのである。残餘は二十日まで本署に置いた。朝鮮人の救濟團體である相愛會へ全部を引渡したのが九月二十一日であつた。此の間收容した鮮人が七百七十名、延人員にして一萬三百五十人の多きに上る。此のために費した米は三十一石五升で一升四十三錢として計算すれば一千三百三十五圓十五錢と云ふ數を示すことになる。單に此の一事から老へても決して容易な業ではなかつたことと思はれる。當時本署の巡查であつた普賢種盛、小野高六の兩君は鮮人收容所の專屬係として功績特に著しかつたと云ふことである。

巢鴨警察署に於ては斯くの如く機敏の行動を以て多數の鮮人を忽ち收容し、周到なる用意の下に能く彼等を保護して互に誤らしめなかつたのである。事故としては某所の家屋内に居た鮮人一名が射殺されたといふ一件があるのみであつた。

二、高橋シウさん

西巢鴨町一圓に於て朝鮮人に關する間違の少なかつたのは巢鴨署の適宜の處置が與つて方あるものであつたことは已に明瞭なことであるが、シウさんの如き篤志家が多數にあつたことも亦見逃しては

ならぬことである。彼の女は七名の鮮人學生を自宅で保護した。彼の女の宅には物理學校の生徒で朴誦誠(二十歳)と云ふ鮮人を前から同居させてあつた。神田の神保町邊で焼け出された六名の友人が朴を頼つて高橋方を訪れた。彼女は悉く同情して朴と共に七名を保護することにしたのである。九月二日から二十九日まで全く自費を以て彼等の世話を焼いた其上、銘々に若干づゝの旅費を與へて朝鮮へ歸らせたと云ふことである。

三、貝塚七郎君

三人の鮮人學生が神田小川町で焼出されて九月一日の夜、池袋の方へ逃げて來た。貝塚家の近所に空地がある。彼等は此處まで辿り着いたが疲れた體を休めることも出來ない。思案に餘つた揚句、君の門を敲いて蓆か何か敷物となるべき物を借用したいと哀願した。君は事情を聞いて同情に堪えず、吾が家に導き入れて懇ろに勞つた。其の中の二人は十日まで置いてやつた。なほ一人は九月三十日まで君の許に居た君は自分の用件もあつたので彼を名古屋まで連れて行つた。別れるに當つて金二十五圓を彼に與へたと云ふことである。

四、折戸睦會

折戸睦會といふのは、巢鴨の一部凡そ百戸ばかりが團體である。夜警とか衛生とか其の他色々の事

を共同して行ひ、一同の親睦を圖るのが其の目的である。今回の震災に當り無事の朝鮮人等が迫害を蒙つて何れも困窮度を失ふの有様であつた。同會は彼等の窮状を見るに忍びず、二日から七日に亘つて彼等の保護に盡瘁した。前後實に四百六十八名の鮮人を舉げて、悉く養育院分院に收容した。其の間一切の食料其の他を供給して十分手當を盡してゐた。けれども當時の形勢は随分險惡であつた。施設の團體として五百名にも近い多數を收容してゐることは難事業といはねばならぬ。萬一の手違があつてはならぬと云ふので巢鴨署に引渡すことになつたのである。

同會は更に別の方面に於ても鮮人の救護を行つてゐる。西巢鴨六八〇番地に土工部屋があつて二十一名の鮮人が住んでゐた。彼等が一戸を借りて合宿所としてゐた譯である。それが此の騒ぎになつたので一步も戶外に出ることが出来ない。随つて食糧が盡きても之を補充する途がない。其の窮況を知つたのが睦會である。彼等に同情して食糧を供給してやつた。二十日頃になると世は稍々平靜となり彼等も夫々職に就くことが出来るやうになつた、乃ち食糧の供給も其の必要がなくなつたと云ふのである。

巢鴨警察署

西巢鴨町字巢鴨七一四番地 無職 高橋 シウ君 (三十二年)

西巢鴨町池袋本村二四七番地 畫家 貝塚 七郎君 (三十三年)

西巢鴨町字巢鴨 折戸睦會代表者 三箇 萬次郎君

●支那人張推參氏を救つた田口巡查

大正十二年九月二日大震災のために、人心が極度に動搖してゐた。その時、不逞鮮人襲來の流説が一度民衆の間に傳へらるゝや、自警團、在郷軍人團、青年團等は各自兇器、武器を携帯し、濫りに通行人を誰何、檢問し、甚だしきに至つては、これに對して、暴行、傷害を加ふるが如き者も、頻りに通るやうになつた。愛宕警察署の田口巡查は谷貝警部補の隊員として芝公園附近の警戒に従事してゐたところが、たま／＼通りがりの支那人張推參(三十歳)が、朝鮮人と誤認せられ、自警團員其他の者から暴行を加へられやうとしてゐた。そこで田口巡查は谷貝警部補の命により、張君を保護し、警察署に同行したが、途中同君等が芝公園の入口にさしかゝらうとする時、突如百餘名の群衆のために包圍されてしまつた。昂奮せる群衆は同巡查の制止辯護に耳を傾けず、竹槍、日本刀、棍棒等を以て「たけ!」「殺せ!」「やつつけろ」と大聲をあげて該支那人に暴行を加へ、一人のものは刀劍様のもの

で遂に支那人の右脚に重傷を負はせた。危急を覺知した田口巡査は、決死抜劍して、民衆を四散せしめ、次で小貫巡査他三名の應援を得て、右支那人を危急より救助し保護同行してその生命を全ふした。「たとへ、混乱状態に陥りたる民衆の昂奮的行動とは言へ、外國人を一人でも殺害するといふ事は外交上の問題を惹起す重大事件である。幸にして田口巡査の勇敢、果斷なる處爲によつて、事の大事に至らざりしは幸であつた。」と同署長は語つてをられた。

芝區愛宕警察署巡査 田口繁一君 (二十六年)

●身を挺して鮮人を救つた實例

一身を犠牲に供して鮮人を擁護した實例は決して尠くない。調査員の調査し得た材料中本編にあはむべきものに左記の肥田野君の如きもその一人である。

早稲田警察署巡査 肥田野 亥四郎君 (二十六年)

●無慮二千名を救ふまで

九月一日午後八時頃、火災が京橋及内幸町方面から愛宕署管内の烏森町、愛宕下町等に延焼し、遂に同所附近は忽ちにして烏有に歸した。當時同所附近の避難民は平素の火災には絶好の避難地と目せられてゐた新橋驛橋内の廣場及愛宕下町一丁目三番地逕信省材料置場(舊林伯爵邸跡)に避難して來た。そして其の數は無慮二千名の多きに達した。ところが恐るべき紅蓮の奔流はこの廣場をも一なめにしようとした。危険は刻々に迫る。それでも避難者はそれでもまだ安全だと殆ど意に介しない。そこで堂免部長は部下の巡査松田彌作、殿村松太郎を指揮して極力同所が危険であることを納得させ、芝公園方面に避難すべく警告を發した。そのために大部分の者は他に避難させることが出來たが、其の當時から逕信省の材料は四面猛火につつまれ、加ふるに避難者各自の搬入した家財に、延焼火するに至つた。さうした危険を目撃しながらも、なほ家財に執着して避難を肯んじないものがあつた。事頗る危険と見た堂免部長は猛火を冒して先づ同所に飛入り、急速他に避難方を督勵し、なほ肯んせざる者に對しては強制的に避難させた。極力救護に力を盡し、同所が内外共に猛火となり、人力の如

何ともすべからざるに至つたにもかゝらず、新宿驛構内に於ては一人の焼死者をも出さなかつた。材料置場に於ては大部分は避難させたが、なほ警察官の強制的指揮にも従はず、遂に逃げ場を失つて焼死したものが四十八名あつた。しかし同所は何れも袋地なるが故に、堂免氏等の献身的努力がなかつたならば、尙ほ幾十倍の焼死者を出したのであらうことは容易に想像し得ることである。

警視廳巡查部長 芝區愛宕警察署詰 堂 免 龜 吉君 (二十七年)

●責任觀念の強かつた巡查の子供

十月にはいると白かつた服装が追々に黒くなつて行く。巡查も白服を着替へなければならなくなつて来た。赤坂區表町警察署では或日のこと罹災巡查一同を集めて部長から色々官給品の有無に就て聞

れられた。

「君は冬服があるか」

「私は冬服も外套も焼いて了ひました。」

「君はどうだ」

「私も誰君と同様です」

此のやうな問答が暫く繰返された。

「水谷君はどうだね」

水谷君と呼ばれた巡查は名を龜次郎と云ひ四十五歳の老巡查である。元氣よい聲で答へた。

「私は外套の外、冬服も靴も全部揃つて居ります」

「君の家は全焼した等だが」

部長に重ねて尋ねられた水谷巡查の目は急に曇つた。一同の眼は齊しく彼の方に注がれた。彼の語る所を聞けば實にかうであつた。

水谷巡查は震災當時は赤坂勤務について居た。下谷區金杉下町十六番地なる自宅には二女のモト子(十四)と二男の寛二(十三)の二人が留守をしてゐた。妻は十年程前に死んで、以來獨身生活の中に數名の子供を養育して来た。従つて子供達は依頼心が至つて少く、何事も自身でせねばならぬと心得てゐた。父の官給品が何より大切であると云ふことも常に聞かされてゐた。母を失つた一家は佛の祭に就いても充分に念が届いてゐたのであつた。

地震と共に家は倒壊した。幸にも二人の子供は無事に逃れ出たが、家を奪はれた彼等は全く途方に

暮れた。而も各所に起つた火の手は刻々に擴まつて自分達の方へも追々に近づいて来る。彼等は意を決して頻々として起る餘震の中を潰れた家に入つては出で、出で、は入り、常日頃大切であると思つてゐた父の官給品を全部取出した。次には佛壇から位牌を持出した。若干の着物と蒲團さへも出して小さい體にこれを附け、近所の人々と共に上野を指して避難した。自分の家は夜の十時頃には全く焼失したらしいが二人の子供の働きて官給品の殆ど全部が助かつたのであつた。

涙ぐましい此の話に聞く者すべて感激した。水谷君は三日目に焼跡へ歸つた。子供達は無事で避難したに違ひないと信じて居たので、數時間待つてゐた。折よく二人の子供も無事の顔を見せた。三人は荷物を分けて夫々肩に掛け、疲れた體を江戸川なる親戚へと志した。下谷の金杉から飯田橋まで辿り着くのに十五六時間も掛つたと云ふのを聞いては彼等の疲労困憊想像も出来ない位である。二日程親戚に居てから赤坂の中ノ町小學校の收容所に身を寄せ、二週間の終更に氷川町三井バラック一號の現住居に落着くことになつたのである。

姉は臺東小學校の高等一年生、弟の方は金曾木小學校の六年生であつた。

現住居 赤坂區氷川町三井バラック一號 水谷モト子 (十四年)

水谷寛二君 (十三年)

●患者三百人を運んだ順天堂の看護婦

這般の大震災は萬般の事物に及んで慘狀を呈したが殊に會社、工場又は病院等多數人の群集せる場所に於て最も凄慘を極めた。けれども茲には織物なる婦人の努力により、三百人に近い傷病者を悉く安全地帯に無事避難せしめたといふ美しい話がある。

震災當日に於ける順天堂病院の入院患者は、約三百人近くあつて其内重症患者十四名と、當日開腹術の如き大手術を施した者も數人居つた。大震災に引き續いて火災は各所に起つた。院内は名狀すべからざる大混亂裡と化した。けれども此の際身體不自由な患者の如きは全く絶望の外はなかつた。然るにこの病院の看護婦達は自分自身の事柄を一切放擲し、各自擔當患者の身邊を護つて只管院長の指揮を待った。

午後二時頃神田三崎町からの火が本郷區元町松平邸に燃え移つたとき夫れが風上に當つてゐるから延焼を免れないと知るや、もう一刻たりとも患者を病室に置くことは出来なかつた。因て院長は事務所長天野文彦君と看護婦長青木しか子等に命じ、第一避難所と定めた御茶水女子高等師範學校々庭に

直に避難せしむる様傳達した。之れを聞いた看護婦等は機敏沈着とを以て準備を整へた。即ち非常用擔架七十餘個を取り出し先づ重症患者を之に乗せ、漸く歩行の叶ふ者は肩にすがらせ、小兒等は之れを脊負ひ、治療材料は牛車に載せ指定されたる避難所に集つた。其活動の機敏で秩序整然一糸亂るゝことない行動は、さすがに順天堂の看護婦であると嘆賞せしめた。

其内猛火は益々接近した。殊に神田區淡路町方面から強い南風に煽られて来る火焰は猛烈を極め、とても此校庭には居られなくなつた。因つて第二の避難地を上野竹の臺と定めた。

其頃女子高等師範学校の校庭には順天堂病院の外、濱田、山龍堂、金杉、瀬川等幾多の病院が避難して居た。其混雑は實に言葉に絶えるものがあつた。醫員は『順天堂は上野竹の臺へ避難せよ』と群集中を聲高に叫び廻はり、且つ其先頭には順天堂の高張提灯を掲げて一團の目標とした。

醫員、看護婦、雇人等併せて六百人に近い大團體は、神田明神前を通り御成街道に出た此邊は折悪しく道路が普請中で困難を極めた。其上一人の患者を僅に二人の看護婦が長途を交代者無しに擔架で擔いで行くことは容易でない。加ふるに下町方面から上野の山に避難する多數の人波に押されては一層の困難を感じたが、白衣を着けた婦人一團と擔架の上に蒼白な顔をした重病者の横る状態を見るや群集は『ほら病人が來た道を開けてやれ』と云つて皆通り道を開けてくれた。中には自分も避難しな

がら擔架を擔へる婦人に同情して、僅かづゝ乍らも交代して運搬に助力してくれるものもあつた。生死の境を歩みつゝある間にも麗はしい人情美は輝いてゐた。

看護婦の一人は患者を脊負つて避難したが、御成街道まで來ると、群集の爲に進みきれなくなつた持合の二十五圓を投じて一臺の乳母車を購入し、之れに患者を乗せて運んだ。

猛火の巻は熱風と火の粉とを遠慮なく吹きつける。看護婦等は身を風上に立て火煙を避けて患者をかばいながら、萬難を排し、廣小路を経て漸く上野公園に到着した。時は午後五時頃であつた。

初めは播鉢山に露營の積りであつたが、精養軒の厚意で室のある限りを貸して貰へたので一團は患者を運び入れて一と安心した。其頃順天堂病院は既に燃え盡し神田、下谷方面は全く火の海と化してゐるのであつた。

上野に避難せる十數萬人の中にも、火傷者、負傷者、其他急救を要する者が澤山ゐた。醫員、看護婦等は、所属患者の手當をすますと共に、之等傷病者の應急手當もせねばならなかつた。此の混亂の中にお産がある。踏つぶされさうな雑踏の中でお産の世話もせねばならなかつた。

斯くして朔日を過し、翌二日には患者の全部を本郷駒込佐藤院長の本宅に送つた。邸宅三百疊は其爲に取り拂はれた。けれども、此所は病院としての何等の設備がない。全く一時の避難所に過ぎな

つた。更に三日、四日、五日に亘つて其内の重患者のみを先づ赤阪分院に移して手當を施した。九月十二日までには悉く移し終つた。

三百名に近い看護婦は多く病院内に寄宿してゐたから、各自の衣類其他貴重なる財貨は悉く病院内に置いてあつた。けれども避難の際誰一人自分の荷物に意を留めた者はなかつた。看護婦長青木しかり(五十四才)は三十ヶ年も勤続して居たのでか弱い女の一生の働を集めた大なる品も洋山あつたが、何一つ顧みやうとはせなかつた。そして眞つ先に自ら擔架を擔つて多くの看護婦を激励した。看護婦だちも患者救護の外には更に何物をも考へ無かつた。「非常の場合は先づ第一に患者を救ふことに全力を注ぎ、決して自己の持物などを顧みてはならぬ」と豫て訓誡して居られた故院長佐藤進博士の人格的指導は、今も尙活きて居たのであつた。醫員も助手も雇人も一緒になつて協力救助に従つたことは贅するまでもない。其の爲に醫學用具は一箇も取出すことは出来なかつた。

三百人に餘る入院患者、殊に重患もあり大手術後の危険な患者も交つて居た。其の身體不自由な多数者から一人の焼死者も一人の負傷者も出さず、危難に善處し得たる醫院や看護婦だちの職務に忠實なる行績は永く記録に止むべきである。

東京市本郷區湯島五丁目十番地 順天堂病院

醫員四十名 助手四十名 看護婦約三百名 雇人三十名

● 頓才能く瀕死の病人を活かした看護婦

日本橋區矢ノ倉町に櫻井病院と云ふのがあつた。九月一日の大地震には幸倒潰もしなかつた。殊に新館(日本館)の方は大丈夫と云ふので一同は屋内に居て敢へて外に出なかつた。ところが例の大火となつた。火の見に上つて望めば何方も皆火の手が上つてゐる。此の形勢から察すると病院も何れは火に包まれるに相違ない。多数の患者に萬一の事があつてはならぬと、院長は立退きの用意を命じた。醫員も看護婦も總掛りで仕度に忙しい。上野の山を遠く望んだ一直線は僅かに未だ火となつてゐない。逃るべき途は唯此の一線あるのみだ。全員上野美術學校を目標として避難することになつた。看護婦等は自分自分の患者に附添つて上野に到着すべく夫々自由の行動を執るのであつた。

重患の患者に附添つてゐた看護婦は人一倍の難儀であつた。遠藤はな子が世話をしてゐたのは三井操(二十五歳)といつて四十度と云ふ高熱である。一寸した動搖も病勢を募らせるのは叫らかなことだ。はな子は患者の容體を慮つて容易に動かなかつた。同僚の看護婦等は悉く出て行つた。醫員も居ない

小使さへも死つてゐるものは一人もない。彼の女の心細さはどんなであつたらう。それでも動かずに居たが無情なる魔の手は遂に此處にも迫つた。病院に火が移つては仕方がない。生きられるだけは生かしてやりたい。逃げられるだけは逃げなければならぬ。彼の女は意を決して病院から出た患者を脊負つて走つた。足の續く限り走つた。

人の生命を預つてゐることほど責任の重いものはあるまい。遠藤看護婦は此の責任を十分に心得てゐる。自分の疲れ、餓渴は何等念頭に無い。患者の病勢のほか心に掛るものはなかつた。もう上野の山も間近く見える。後一息といふ所まで来ると患者は俄然として昏睡状態に陥つた。彼の女の驚愕と失望とは其極に達した。白い看護服を看たのみで薬一服持つてはゐない。此の時ふと彼の女の心に浮んだのは患者の氣質であつた。操は極めて鋭い神経質の方である。之にヒントを授けたはな子は附近にあつた薬局へ飛び込んだ。事情を告げて薬一服を乞うた。彼の女のヒステリックな點を話して然るべくと頼んだ。薬剤師は其の旨を諒解して暫く薬局に這入つてゐたが、間もなく一服の薬を調合して患者に與へ、「此の薬を飲めばあなたの病氣は立所に治る」と力強く言つてくれた。靈藥の力かはた又靈威の力か、瀕死の患者は忽ちにして意識明瞭となつた。血色さへ加はつて、はては歩行するとさへ言ひ出した。上野まで數町の間は事實徒歩したのであつた。

美術學校には大勢の同僚や患者が既に集つてゐた。彼の女は漸く蘇生の思がした。安心と共に心が弛み睡眠を催したので、患者には自分の膝を枕に與へ、共に々々深き眠に陥つたのである。

何程の時間が其の間に過去つたかは判然しない。二人が目を覺して見ると、あたりは寂として人影一つ見えない。いつか上野の山にも火は迫つて危険の地域と變つた。一同は安全の地を求めて更に此處を去つた後なのであつた。彼の女も立上つた。疲れた體を勵まして患者を背に歩き出した。何方へ行つたらいいのであらう。府下の王子町には姉が嫁いでゐる。然し王子が果して安全の土地であるかは全く分らない。上野から北を望めばとにかく火事はないらしい。二人は北に向つた。埼玉縣迄も逃れたら安全地帯が得られやうかと思つたのも無理からぬことであつた。氣がついて見れば此處は日暮里である。聞いて見ると王子もどうやら無事らしい。汽車に乗つて王子の驛へ降りた。飛鳥山へ患者を休ませて置き、姉の家へ走つて行つた。王子一〇五〇番地齋藤青五郎君は姉の夫である。来て見れば潰てもいなければ焼けても居ない。互に無事の挨拶も半ばにして、患者の事をかくと告げた一刻も早く齋藤君は自轉車用の荷物車を持つて飛鳥山へ迎へに行つてくれた。

幾つかの難關を漸く逃れて姉の許に身を容れる事の出来たはな子の安堵と喜悅とはどんなであつたらう。けれども患者操には夫がある。深川區猿江裏町三番地には三井の家がある。定めし病める妻を

案じて捜し廻つてゐることであらう。一刻も早く患者の夫政一君に知らせたい。はな子は患者を姉に託して先づ王子警察署に事情を訴へた。此の混雜の時に一人の患者位は警察署として大なる問題でない。幸身を置く所があるのだから夫を尋ねて渡すやうにと話された。それは二日の晩であつた。それから病院の焼跡へも行つて見た。焼跡へ患者を連れて来たとして何にならう。自分で自分の患者を始末してくれと頼まれるのみであつた。深川の三井家を尋ねて行つたが、患者の家は見ると影も無い焼土と化してゐて、尋ねる操の夫もゐない。失望のあまり泣くにも涙は出ない程である。連日の慣れぬ歩行に足は腫れて痛む。三井の郷里は富山縣であると云ふ。萬止むを得なければ富山まで連れて行かねばなるまいかと考へた。けれどもそれは出来るだけの事をしてからの後の事だ。氣を取り直した彼女は操が王子に在ることを記した札を焼跡に残して一先づ姉の宅に戻つて来た。

越えて六日一臺の自動車は王子なる齋藤家の門前に止つた。はな子の残した立札に妻の在所を知つた夫政一氏が迎へに來たのであつた。互に無事なる顔を逢はせた夫婦の喜びはどんなであつたらう。夫婦の再會を傍で見つてゐた藤看護婦の満足は如何ばかりであつたらう。古今未曾有の大災厄に際し何等の豫期なく、何等の用意もなかつた罹災者は唯自己を護るに忙はしく、他を顧みる邊のなかつたのが事實であつた。職責の上とは云ひながら、やさ腕一つで彼の場合を、かくも巧に切抜けた、彼の

女の犠牲的行動は眞に見上げたものと云へやう。頓才を以て患者の危険を救つたところなどは平素の心掛けも思はれて尙更にゆかしく感ぜられる。

埼玉縣北足立郡芝村一六四八番地 遠藤 はな子 (二十二年)

瀕死の患者と産婦を抱へて

病氣を看護することですら容易ならぬ苦心を要するものを、況してあの地震災に瀕死の患者を抱えて火中を彷徨せねばならなかつた看護婦の人達の苦心と奮闘とは眞に涙なくして聞かれぬ哀話と感激とが伴はれて居る。幾度このやうな事實の中にも清水看護婦の如きは稀に見る實例であらう。

神田小柳町敷島看護婦會の派出看護婦清水令子は八月五日から淺草區白柳原町一丁目秋谷君の看護を頼まれて其の家庭に派遣せられて居た。病氣はたちの良くない肺腸結核、二年前からの永い煩ひで病人の氣は益々減入るばかり、病氣の進むに連れて氣むづかしくなるのが、この種の特徴であるが、秋谷君も矢つ張り短氣な氣むづかしくなつて居た。幾人來ても續かぬと聞いては尙更氣の毒さも増して清水さんは心を盡して介抱したが、しかし病氣は悪くなる一方であつた。

九月一日、衰弱しきつた病人の容態が朝のうちから面白くない、心配しながら脈をとつて居るとあの大激震である。家の中は船を荒浪に乗出した様に揺られて、高い處の品物は凄まじい響と共に落ちて来る。清水さんは咄嗟に病人の上を自分の身體で蔽うた。

秋谷君の妻女は其の時恰度臨月の大きいお腹を抱えて居た。病人は危篤なり、妻女は重い身、遁げ出さうにも家を片付けやうにも手がつかぬ。秋谷さんは堅く決心した。

「私はお宅の皆様と最後迄運命を共に致します。決して逃げてかへるやうなことは致しませんから御安心なさつて確かかりして下さい。」

生の執着は如何なる人にも最後までではある。危篤な中にも不安に焦慮する病人と、周章して身をもがく妻女とを慰め勵ましなから清水さんは甲斐々々しく立働いたが、其の内病人の容態は益々悪くなつて貧血が甚しくなつた。脈捕にも結滞が現はれた。道に其の道を専門の看護婦であつて見れば此の場合にも當然爲すべき手段は盡さねばならぬ。咄嗟に走出て野崎主治醫の許に駆付けた。

「どうぞ注射を願ひます。今一度が危険です……」

主治醫も震災でした、かやられて居る。

「注射をしようにも注射器すらわからなくなつた。薬品も皆壊された。手のつけやうがない。兎に

角安靜にして置きなさい。」

無理もなかつた。もう其の時金市には呪の黒煙が烈風に煽られて、紅蓮の舌の一語を豫示するやうに這廻つて居たのだ。

胸を抱いて半壊の家に、安の病人を見詰めて居たが、夜に入つて火勢は益々切憐くなつて来た。僅に上野方面を刺すの外は全市殆んど火の海だと叫ぶのを聞いては、もうじつとして居られなくなつた。清水さんは豫て用意の赤ン坊の着物と脱脂綿やガーゼ、病人に敷かせる丈の蒲團を抱へて瀕死の病人を脊負うて立つた。片手は姪婦に藉さねばならぬ。白晝に劣らぬ火焰の都に芋を洗ふ様な雑踏の街路を轟然上野の方面に走らうといふのである。分秒を争ふ火の手の追撃、餘震にゆらめく大地の上、二十歳の若い娘がこの大舞臺に必死の試練を甘受しようとする悲壯な光景を想像していたゞきたい。

恰度午後の十一時頃であつた。人波といつても緑日の雑踏のやうな緩漫なものではない。命懸けの全速力の往交ひは觸るもの皆突飛ばすやうな修羅場である。

辛うじて潜りぬけて中央劇場附近の僅な空地に戸板を横へ蒲團を敷いて病人をやすませたが、追つ駈けて来る焰に煽られて、熱くて居られなくなつた。再び病人を十文字に脊にくゝつて、妻女の手を引きつゝ御徒町方面に向かつたが、脊中の病人は頻りに苦悶する。

「苦しくて堪らぬ、何でもいゝからあろしてくれ……」

略血は肩から白衣を染める、汚物は裾から身體に傳はる。

通りかゝつた在郷軍人を呼とめて助勢を乞うたが疲れはてた人達はなかく應じてくれぬ、漸く綻つて破れ車を壹臺貸して貰ひ夫れに蒲團を敷いて病人を横へ自ら梶棒を握つて妻女ともども活路を求めて彷徨うた。世には深切な人もある、誰とは知らず押してくれる。二日の夜が明けやうとする頃湯島天神わきの切通し坂下まで辿りついたがもう一足もあるけぬ。病人は苦しさのあまり、

「宿屋を探がしてくれ」「何でも喰べるものを買つてくれ」とせがむ。此の生死の地獄に何でそんなものがあらう。漸く附近の店で西瓜を分けて貰ひ、石で打割つて甘露の雫を口に運んだ。追に短氣な病人もうれしさうにうけてくれた。

夜が明け離れると通りかゝつた番頭風の若者がこの様子を見つけて同情した。

「病人だ、病人だ、退いてくれ、引張つてくれ」

坂の上まで引揚げてくれたので漸く火からは通れたらしい、ホツと一息した三人は午前中を路傍で過した午後になると病人は水が飲みたいといふ。昨日から一食もとらぬ清水さんは方々に駆廻つてやつと水を手に入れた。一口飲ませると病人の顔は急に冴えた。そして口許には淋しい笑さへ浮べて、

「清水さん、随分無理なことばかり言ひました。私があるかつたのです。本當にあなたはありがたい人だ。この御恩は死んでも忘れませんぞ」

そして妻女を呼んで何か言つたかと思ふと、最う其の時は舌がもつれて居た。不幸な秋谷さんは路傍の車の上で眠るやうに息を引取つたのだ。松坂屋が燃えに燃えて、火勢が今鎮まりかけた處である午後の二時であつた。

妻女も泣いた。清水さんも泣いた。「切めて疊の上で死なせたかつた」と愚痴はこぼれるがもう仕方がない。力も根も失せ果てた二人が茫然として佇んで居るのを見た。魚河岸の威勢の好い若い衆が快よく力を貸してくれて車は龍岡町のとある寺の前まで運ばれた。病だとはかり思つて挽いてくれた若い衆も死人だつたと聞いて呆れて居る。そして叮嚀に「お氣の毒さまで……」と慰めるのであつた。二人は昨夜來の汚れた手でも洗はうと寺の境内を探して井戸側まで往つたとき、突然妻女は産氣づいてしやがんで仕舞つた。心と身體の激動は、このとき多くの出産を促したが秋谷君の妻女も夫れであつた。一難去つて又一難、清水さんはびつくりして蒲團を井戸端の土の上に敷いた。名も知らぬお寺である。

近くに産婆はないかと尋ね廻つてやつと見つけはしたがお産の一切の材料が無いといふ。幸に大學

が近い。もう大學の構内に運ぶより外に手段は無いと考へたので清水さんは避難者の群の仲から同情の深い人々の手助をうけて産婦を構内の藤棚の下に運んだ。勿論大學も火災と大破で手のつけやうのない時である。どこかで赤ン坊の泣聲が聞える。若しやと飛んで行つて見ると果して一人の醫者と三人の看護婦とが野天で避難者にお産をさせて居た。拜むやうにして來て貰うと、此の災難の間にも神の助けか案外に軽く懸て球のやうな男の子が産れた。悲喜交々である。二組持つて來た産着は神に感謝の誠を捧げて其の一組を今産れた方の赤ン坊に譲つた。

お産が終ると屍體の世話をせねばならぬ。兎に角氏名住所を明かにし遺棄したものでないことを告げて保管を巡査に依頼した。二日の夜から三日の夕方までは藤棚の下の芝生の上に産婦と共に明かしたが三日の夜は幸に焼殘教室の廊架に入れて貰ひ、二日経つた頃に學生有志の同情で教室に移ることゝなつた。

四日、清水さんは本郷區役所と警察署に出願して死亡を届けた。警察では深切に同情して屍體の處置をひきうけて呉れ、尙「遺骨が欲しければあとで渡してあげる」と迄も言はれてやつと安心したのであつた。

産婦は幸に産後の肥立もよくやがてお乳も出るやうになつた。十二日に親戚の人々が探し求めて引

とりに來たので清水さんはやつと重い責任から免るゝことが出來たのである。

や然の務を果したに過ぎぬ、と言へば夫迄である。がしかし、其の當然の務を果す爲に身命を擲つて惜しまぬものが幾人あるであらうか。東京市内には、焼かずに済む官公署は無かつたか。取出せば出された記録や書類は無かつたか。助ければ助かる人々は居なかつたか。名も知れぬ白衣の婦人に壯嚴なる神の輝きを認むる。

清水さんは其後深川區岩崎公園内の警視廳救護所に勤め閉鎖後は寺島町の東京府救護所に勤務した

東京市神田區小柳町二九番地敷島看護婦會 看護婦 清水 今子 (二十二年)

◎看護婦の美績

か弱い看護婦諸君が、我身を犠牲に供して患者のために盡した美蹟は、以上の數件のみに止まらない。調査員の調べ得た涙ぐましい哀話だけでも、左の三篇がある。茲にはたゞ題目と姓名を掲げるだけに止める。

○火中に病児を護る

府下尾久町下尾久九七八廣瀬正房 青柳 嬢

○病後の二兒をよく護る

市外上尾久一四七七 森川 純子 嬢

○瀕死の患者を護り遂げた忠實なる看護婦

東京市西巢鴨町向原三四三一番地 谷口 てる 嬢

●師弟相携へて三日間

深川區元加賀町にある東京市元加賀尋常小學校では、震災當時校舎の改築工事が初まつてゐたので附近の學校の教室を借り受けて離れくに授業をしてゐた。これは其の一部が明川高等小學校にあつての出來事である。

其の日の式も借家住居の不便さで、他の學校と比較すれば遅い方であつた。さうした關係から、あの大震災當時にも尙ほ兒童の校庭にあるものがあつた。大震災に驚いて急遽遁出した兒童もあつたけれど

それ等を除いてとゞのつまり我が家に歸ることの出來なくなつた子供が、男女合して二十二二人ほどになつた。此の子供らは、一意先生によつて此の大災を免れようとしたのである。そこで鈴木・中川・須藤・長谷川の四訓導は、此の大勢な子供たちを引連れて、何の猶豫もなく洲崎の埋立地に避難すべく校門を後にした。

元加賀町から洲崎埋立の避難地へ出るには、大人の身でも決して容易なことではなかつた。殊に此の混雜の中を、二十二人といふ多くの子供を失はないやうに引上げる先生方の苦心は極めて困難なことであつた。猛火と人の山と荷物と倒潰家屋との間を、辛うじて通り抜けて目ざす埋立地に辿りついた時には師弟ともに可なりの疲労と飢餓とに襲はれてゐた。避難の人に親切なものがあつて、牛糞を二つに三本のサイダーを預けてくれたので、罐詰を碎いて二十二人の子供たちに與へたが逆も足りはしなかつた。けれども、今食糧をどうすることも出來なかつた。三本のサイダーをあけて師弟二十六人が一と口宛呑んで咽喉を濕はしたゞけで九月一日の夜を明かした。

かうして原中に夜を明した師弟の一團は、併しいつまでかうして一緒に居ることも出來なかつた。先生たちは早く子供たちの親を探して、其の大切な子供を返して安堵させなければならぬと考へた。そこで群がり集つた避難者の間を廻つて子供たちの親や身寄りの者を探した。そこで、五人の子供は

引渡すことが出来たけれども。あと十七人の子供たちはどうすることも出来なかつた。

さうかうする間に起つたのが例の鮮人騒ぎである。避難の人々は、洲崎の埋立や越中島の原から續々と引上げた。師第二十一人の人たちも、再び相携へて深川公園へ移つた。今日はモウ昨日の如く火に追立てられる心配はなかつたけれども、甚しい疲労と極度の飢餓とは、此の人たちを厳しく責めた。丁度公園に入つたとき、混雑の中で三升ほどの米を分けてくれた人があつたので、焼跡へ行つて炊事道具を拾ひ集め、それを炊いてお結びを拵へた。それはたゞ米を煮たといふ丈けで、鹽氣一つない。ホンのお結びだけであつたが、極度に空腹を感じてゐた子供たちは、三つも四つもと貪ぼり食べたので、容易に先生の口へまでは引つて来なかつた。それでも有り難い先生たちの心はそれで十分満足してあつた。

お腹ができると、再び先生方は子供を引連れて身内の人たちを尋ねて廻つた。最初の中は仲々見當らなかつたが、そのうち一人二人と親が分つたり兄弟に遭つたりして、とう／＼十五人までは親たちに引渡すことが出来た。けれども二人の子供だけはどうしても引取人がゐない。先生たちもほと／＼困つて、また、其の夜は公園の中で引すより外なかつた。

三日の日になつても、四人の先生たちは大切な二人の子のために此處を立去ることが出来なかつた。

我が家の事も心にかゝらぬのではないが、子供たちのことを考へると、到底見捨て、歸るなどといふことは出来ないであつた。四人の先生は、三日の午前十二時半まで子供を連れて探し歩いた末、とう／＼此の二人をも引渡すことが出来たので、初めて愁眉を開き、各々我が家に歸ることが出来たのであつた。

けれども、先生たちがかうして澤山の子供たちの爲めに働いて居る間に、鈴木・長谷川兩訓導の家は全焼し、幸ひ山の手に住んでゐた中川・須藤の兩訓導も殆んど死去したと思れるほど家人に憂慮させたのであつた。

東京市元加賀尋常小學校訓導

鈴木彪之助君 (四十五年)

同

中川 るい子 (三十七年)

同

君須藤たけ子 (三十三年)

同

長谷川シズ子 (二十九年)

● 嗚呼 佐々木訓導

佐々木哲郎君は大正七年三月岩手縣師範學校第一部卒業の秀才で、卒業後直ちに同縣下閉伊郡宮古小學校に赴任せられ、爾來五ヶ年間終始一日の如くに教壇に立ち其の成績は頗る顯著であつた。彼は

同縣初等教育界の明星として將來を囑目せられてゐたのである。然るに彼は青雲の志抑へ難く遠大の希望を抱いて袖に絶る宮古小學校の兒童や父兄の信頼を犠牲にして上京し、東京本所市江東尋常小學校に轉任したのは大正十二年五月三十一日であつた。赴任以來の彼は年來の蘊蓄殊に體操科の研究を披瀝して非常の熱心と誠意を以つて兒童教育に努力したので、僅々數ヶ月間に校内の氣風を一新した而も彼が圓滿にして愛情深し友情に厚い性格は期せずして、兒童の敬慕職員父兄の崇敬信頼の的となつた。

九月一日始業式が了つて兒童を歸へし職員も多くも下校したが當日彼は當直であつたので専心運動場利用の設計をしてゐた。折りからあの大地震で直ちに校内に駆け込み居残りの職員事務員使丁等と共に御眞影を始め重要書類を校庭に持出した。而して彼は専ら御眞影奉護の任に當つてゐたが間もなく校舎は附近三方面の火煙に圍まれ忽に校舎は危険となつた。彼は御眞影を奉じて使丁事務員を伴ひ數丁を離れた豫定避難所である、横網町被服廠跡に接する安田善次郎君本邸内の池畔に奉遷奉護してゐた。然るに火勢益々加はり同所も火焰に迫られ危険となつたので、更に安田君別邸内の本館階上に奉遷奉護してゐた。間もなく同所も亦猛火の襲ふ所となつたが、四周皆火の海と化し強風に煽られた猛火に避難の餘地なく之を察したる彼は階下玄關に下り、同伴した三名の使丁に對し死を以つて御眞

影を奉護する旨を告げて中二名を遣し一名を伴つて再び階上に駆け上つた。然るに數分の後圍らざる被服廠跡に三萬二千の生靈を奪つた彼の一大旋風が起つて同邸は火焰と化し同時に彼は御眞影に殉じて無慘にも壯烈なる最期を遂げたのである。

思へば佐々木哲郎君の如き有爲少壯の教師をして花の蕾で散らした事は遺憾の極である。併し乍ら彼の勇敢にして壯烈至純崇高な殉職の最期は永遠に世道人心を感奮起せしむる意味に於いて彼の生命は永遠であり偉大である。茲に於いて彼佐々木君も亦地下に瞑すべきである。

本所區江東小學校 訓導 佐々木哲郎君

●校長の病床に身を捧げた使丁

高木二六君は本所區本横尋常小學校の使丁であつた。妻女ハル子(五三)と唯二人暮しであつたが平素から職務は忠實であり、勤儉質素を旨として居たので乏しい収入ながらもよく産を修めて居た。

今の住所は一ヶ年前に貳千餘圓で買ひ求めたのである。そして子供のない二人は「善良な養子が貰ひたい。老後に他人の世話になるにはどうしても今働かねばならない」などと朝夕こんな話が夫婦の

話題から離れたことはなかつた。

九月一日は学校の始業式であり又常直であつたので「今夜は泊り番だよ」と言ひ残して朝早く出勤した。

この日午前十一時過、生徒も歸り先方も多くは歸つた。彼が晝食の用意をしてゐた時突如物凄しい異様な音響が起るや、ガラ／＼ガタ／＼戸棚は倒れる屋根瓦は落ちる附近の工場は土煙を立てて倒潰する、家は潰れる、親は子を……子は親を……悲鳴各所に起る大變災が突發したのであつた。振天動地の一大混亂の有様が續いて起つた。

使丁二六君は校長と五六名の居合せた職員の名に従つて重要書類の搬出を手傳つて一心不亂に働いてゐた。病弱な妻女ハル子は地震……倒潰……壓死等の悲惨から免れ炎々たる猛火に追はれて學校まで遁げて來た。

夫の手を握つて「早く連れて逃げて下さる」

「家はもう焼けてしまつた今一時おくれると生命が危いから」と頼んだ。

責任觀念の強い二六君は應じなかつた。「お前は先きに避難しなさい、私は學校の當直で大切な仕事はまだ／＼澤山あるのだから」とて一心不亂に活動を續けた。

妻女ハル子は只一人路を流れる避難民の群に入る氣にはなれなかつた。夫二六君を待つて學校の運動場にゐた。學校の八方は黒煙濛々として天地を蔽ひ猛火は忽ち魔の手のやうな恐ろしい勢で攻めよせて來た。もう一刻も居るべき所ではなくなつた。

運動場に避難してゐた數百の人は叫喚あはたゞしく逃げ去つた。二六君は命によつて重要書類を背負つた。待つてゐた妻女ハルの手を引いて倒潰家屋の屋根の上や押し合ふ避難民の中を南錦糸町に向つた。

荒れ狂ふ火焰の間此の世ながらの焦熱地獄を抜け出ようと勇を鼓して進んだ。

猛火に加ふるに風さへ強くなつて來た……火の子……眞紅に焼けたトタン板……色々な物が落ちて來る。避難民は他人の肩も頭もあらばこそ……

強い者は先きになる……混亂の中に一大叫喚が起るや錦糸町鐵道線路上にもみ上げられた。此時は既に脊負つてゐた重要書類のツヅラも手を握つて來た。最愛の妻女も龍巻と共に來た恐ろしい猛火の爲めにもぎ取られてしまつて居た。落膽した二六君はもう生きてゐる心地はなく無意識のうちに避難民におされ／＼て遂に龜戸町まで來てしまつた。

何方に行くあてもなく汽車に乗つた。千葉中山で下車し本横工業學校の石井君の家を訪れた。此處

で夜を明かして二日早朝妻女や重要書類のツヅラや学校や家と若しや居らぬか残りはせぬかと龜戸町まで来た。

焦熱地獄と化した本所からは見るも哀れな罹災民が避難して来るがこちらからは一步も入れない。再び中山にかへして三日となつたとき、校長の齋藤民治君は面部一面と頸部と両手全部に大火傷を負つて見る影さへない哀れな有様となつて石井君の所にたよつて來られた。平素恩愛を受けた校長のこの有様を見た。忠實な二六君は妻女や焼失した家や今後自分の衣食住のことなど全く打忘れたやうに誠實を捧げて校長の看護に心を盡した。両手の手當、面部頸部の薬や繃帯がへ、着物や食事又は糞便に至るまで親身も及ばぬほとに手を盡した。

斯うして十四日まで過ぎた。

校長の傷は案外重く遂に千葉病院に入院することになつたので、進んで附添看護を願ひ出て、その月二十日を過ぐる迄病床につききつて大小の用事に我を忘れて立働いた。両手の自由の利かぬ校長には手となり足となる人が無くてはならなかつたのだ。其後退院して金町の假寓に静養中も十日餘りは側を離れず、はたの見る眼も涙ぐましい程に深切をつくした看護に従事したのであつた。

輕薄な人情を不思議と考へぬ世の中に、かやうな美しい心の持主のあることを心強く思はねばなら

ぬ。

岐阜縣不破郡室原村
東京市本所區若宮町一〇七番地 高木 二六君 (五十四年)

● 小使から罹災兒童へ金五拾圓

震災後一小さい天幕の中で寝起したせいか、健康を害して思ふ様に働けない。學校に對しても申譯がないから暇を貰ひたい。と申出た靈岸島小學校の小使三島君はふところから「永い間御世話になつたお禮の心で、哀れな罹災兒童への慰問に費つて下さい」と言ひながら金一封を奥山校長の前へ差し出すのであつた。

其の紙包には金五十圓が入つて居た。奥山校長の手からは即時そのまゝかへされたので、今度はこつそり首席訓導の許へ差し出した。首席訓導の手からもそのまゝかへされたので、だまつて引退つたきり三島君の姿は學校に見えなくなつたが、それからいく日かたつて學校へその五十圓が郵送されて來たのであつた。校長は三島君の至情に感じて、とりあへず金を預つて本人の望みを遂げさせることになつたのだ。

小學校を卒業してから下關と門司の聯絡船に船員をして居た三島君は、勉學の望止み難く、とうとう大正十一年の八月から、晝は靈岸島小學校の給仕となり、夜は神田錦城豫備學校の生徒となつて、東京に姿を現した人なのであつた。

下宿料と學資とを出さねばならぬ三島君には、給仕としての五十五錢の日給は、あまり苦し過ぎるので其の後間もなく日給一圓二十錢の同校小使となつて今日まで過して居るのであつた。

九月一日あの大地震のあとで、靈岸島小學校は、つなみのための避難所として區からの指令を受けため附近河ぶちの人たちが、我先きにと學校めがけて押よせて來るのであつた。中には病人を抱へて來る人などもあるので學校の職員小使は、その整理や收容に、足を宙にして、聲をからして活動するのであつた。

日頃から、同僚使丁のいひつけられた仕事までもを一人でやつてのけて居た程の三島君の事であるからこつといふ場合に臨んでも勿論人に後れては居なかつた。職員用の椅子をならべては病人の寢臺にあてがつたり、毛布を敷いては老幼婦女の休み場所としたり、湯を沸かしては誰彼に配つたり、机を出しては荷物の置場所を圍つたり、凡そ集まつて來る人たちのために少しでも都合がよいと思へたすべては、皆三島君の機敏な考と敏捷な活動勞力とからぞく／＼産み出されるのであつた。しかも此の

日は阿部井小使の當直であつたのを「家の様子を見に歸つたら」と勸めて、自分から當直を代つて勤めたのも三島君であつたのだ。

茅場町方面に起つた火事は、午後七時には靈岸島小學校にも危険を思はせる程近づいて來た。

午後八時、にげられる程のすべての人をにがしてから、校長自らは御尊影を、職員は誰彼は重要書類を取まとめて、大路小路に渦まく猛焰の中を駆け出すのであつた。もう自分一人の命だけ運び出すのでさへ必死の時となつたのに、晝も夕も食事もとらずその上にすぐ近所の自分の下宿が焼けさうになつて居るといふ事も充分知つて居たが三島君は、逃げ後れてたゞ一人、學校にとり残されて居た老人の病人を脇にかゝへてしかも普通の人の三倍もの學校の書類を背中に負つて、とう／＼丸の内へと辿り出てしまつたのであつた。さうして丸の内の二日三日は、その見ず知らずの病老人のために、或はまわりの小さい子供のために、食糧を探しに出あるく事と、親身も及ばぬ看護のために、夜の目もねずに過したのであつた。

其の後いく日かたつて、病老人の家から熱い感謝の涙といくらかの金包とが届いて來たが、とうとう三島小使は受けずにしまつた。

三島君が郷里山口縣に居る時は、船員として月七十餘圓をもらつて居たが、貧しい兄の一家のため

に、其の大方を捧げてしかも尙相當の蓄積さへも持つてゐて誰の方も頼まずに。上京した程であつたのだ。今でも三十錢を一日の經費ときめて、高い月謝を拂ひつゝ、出京後僅か一年の今日でさへ、も數百圓の貯金の所有主となつて居るのである。さうして毎日學校に出てからは、人の分まで働いて一寸の間も休まうとはしない。ちやうど働かずに居るのが恐ろしいとでも思つて居るかのやうに。今度やめたいと申出たのも、健康がすぐれないのでこ數日出勤出来ないといふ事を心配しての義理堅さから出た願ひであつたといふことである。

神田區錦町二丁目一番地中村傳太郎方 京橋區豊岸島小學校小使 三島梅一君

●山本校長と佐藤訓導の壯烈なる最期

九月一日日本所高等小學校では二千三百有餘の兒童を三回に亘つて始業式を行ひ、次ぎに職員會を開いた。十一時閉會となり職員は三々五々歸宅した。

震災の時に居残つた十數名の職員は校庭に走り出た。強震頻々としてさしも巨屋の校舎も波のやうにゆれた。各所に黒煙濛々と上り本所一面に既に數ヶ所出火してしまつた。

校長と二三の訓導は御眞影を校庭に奉遷した。校長は區役所に走り松山區長代理と會談歸校、直ちに、

「火事の心配ある者は速に歸り給へ、學校は吾々が護る。」と。そこで女教師や家庭の火災地帯にある數々は歸つた。

山本校長は訓導と共に重要書類其の他を搬出し、四方の様子を見る間もなく、「八方に起つた猛火は校の周圍まで来てしまつた。危険は刻々に迫つて來た。かくて

校長「諸君！ 學校も亦危険です。御眞影を被服廠跡の新校建築事務所に奉遷し。其の他重要書類搬出を頼む」と職員と協力遂に全部被服廠跡へ引きあげた。

此の時既に何萬坪といふ廣い場所は避難民と彼等の荷物で全くうめられてゐた。

校長「今から學校の最期を見届けて來る」

一同「先生行けても歸る事が出来なくなります」

といふも「イヤッ!! 何!!」と立ち去つた。

學校に集る避難民に此所も危険なる故に速く立ち去れとて聲を限りに諭して返した。

町餘離れた所に二葉小學校がある。此所の藤澤校長は山本君の學友である。友情もだし難く二葉校

を見舞ひ重要書類の搬出作業に應援した。

紅蓮の焰に風さへ加はつて學校も猛火に包まれた。散亂する火の子を浴びながら被服廠跡に歸つて來た。「諸君！ 人事はすでに盡しました。家庭もあらゆること故、只今より自由行動をとつて貰ひ度い」と午後三時頃言ひ渡した。校長と生死を共にする者七名となつた。

校長は奉遷靴の締皮、金具をあらため、ホット一息してゐた。異様な音響は起りビュビュと風さへ強く空は下り愴慘な有様となつた。忽ち大音響と共に一大旋風となつた。事務所もろ共空中に巻上げられんばかりになつた。「危ない!! 總立ちになる。」

「落ちつけ」と制す。

校長「もう、是迄でだ、御眞影を奉じ活路を開かう」

佐藤及三好の訓導と共に獅々奮迅の勢で中央目がけて走り出た。

事務所は吹きあげられ、十二丈餘もある鐵の櫓は倒れる。眞紅とやけたトタン板は飛び散る。ヒュ〜と來ると手も首も、サツ〜と切り離され高くとぶ。此の世ながらの生地獄となつてしまつた。「それ來た」……「伏せ〜」

御眞影を守り地に伏し、猛火を潜り旋風と戦ふ中に奉遷靴の負革が焼き切れた。各々の洋服も焼け

焦げてしまつた。勇奮努力、死屍累々、算なき間を乗越え乗越え御眞影の御安泰を祈つた。

又猛烈な旋風はつゞけざまに襲ひ來り、瓦礫や丸太をいやといふ程叩きつけられた。三好訓導は倒れてしまつた。校長は佐藤訓導と奉遷に努め西方に進んだが益々強烈に吹きつける旋風のために、兩名も亦前後して斃れてしまつた。そして兩人は遂に御眞影に殉じて。悲壯なる最期をとげた。

東京市 本所高等小學校 山本長治君

同 訓導 佐藤惣一郎君

●あゝ殉職校長

元猿江小學校長坂間惣重郎君は神奈川縣都筑郡中里村の人である。君は至つて着實濃厚な方で事をなすに當つては又極めて眞面目であつた。この點は夙に村人にも認められ幼少の時から賞め稱へられてゐた。長じて育英の業に志し、爾來卅有二年孜々として教化の爲に盡されたのであつた。前任地なる深川區靈岸小學校に於ける十有五年の間は氏にとつては奮闘の盛りであつた。毎日寢食を忘れ誠心誠意ひたすらに虐げられたる細民子弟の教養の任に當り、附近からもブリンスバルとして、非常な尊

敬を受けてゐた。而して今を去る三年前幾多の町民に惜しまれて猿江校に榮轉されたのであつた。

氏の轉任當時の猿江校は不幸にも災厄の爲校舎を失ひ一時菊川小學校に寄寓してゐたのであつた。境遇としては實に同情に値すべく、又活動も思ふ存分出来ぬ状態であるにも拘らず東京市よりは優良兒教育研究の重任を囑託されたのであつた。つまり子供の性狀を根本的に掘り返し最も適合したメソッドを以てシヌテムを作つて行かねばならぬといふ大業である。篤學な氏なれば容易に歐米の原書を通じて帝都の實狀に恰當する革新的教育を創始することが出来るであらうと、可成りの囑望をつながら居たのであつた。勿論心血を注いで日夜腐心研究に没頭した。爲に猿江校は常に緊張して真理と合理の世界には可成り恵まれてゐたのであつた。これに加へて巨萬の富を投じた鐵筋コンクリートの大建築が本年五月落成したので、理想の校舎！理想の設備！理想の教育！と口々に稱へられ職員も生徒も保護者も一様に力づけられた。そして貧しき生活者より集る感謝と希望の捧げ物は實に七千餘圓の寄附金となつて現はれた。坂間校長はこの時職責の重大なことに痛く感激し「猿江の墓石となるまでこゝで奮闘しよう」といふ尊い奉仕の誓が奥深く胸に秘められたのであつた。

折しも九月一日、始業式を終へて職員會議の最中の事である、あの恐るべき強震に見舞はれ瞬く間に黒煙は深川の空を蔽ふたのであつた。この時校長は「危険だ／＼逃げろ／＼」と追ひ立てる様に部

下をせかせせた、火は直ぐ傍の安田工場へ移つた、職員はころげる様に階段を下りて「もう駄目です、早く立退きませう。と口をそろへて訴へたが、校長は沈着な態度で「では早く君等はお勸語と重要書類とを持つて逃げて下さい僕は今一度校内を巡つて來ますから、沼田(小使)は一寸残つてくれ。」誰か知らんこれが職員と校長との永久の別れであつたとは。

折から逃げまどふ民衆が約五百なだれを打つて校門からはいつて來た。校舎は黒煙に包まれ呼吸も刻々に苦しくなつてくる。校長と青年團とは聲を嘔して「あぶない／＼砂村へ／＼」と追ひ立てた、民衆の大部分はあはて、逃げのびた。猛火は容赦なく校舎を舐め初めた。極度に興奮してゐた校長は「沼田早く逃げろ」といひ置いて二三歩進むと又血みどろになつた大民衆が四五十名なだれ込んだ。「それつ……そこは危い。さあこゝへ」と手を取る様にして運動場へ入れた。猛火はくるひ熱氣高く息は苦しい、續々斃れる者が出る、校長も進退こゝに谷り今はこれ迄と覺悟したのであらう校庭の中央に倒坐した。手に書籍の鍵を握り八百有餘の愛兒の幸を祈りつゝ眠るが如く斃れたのであつた。無慘や耐火耐震を以て誇れるさしもの建築も今はその外廓を残すのみ、木といふ木は總て燃え、逞しき鐵骨の運動場も中からつぶれ、四十九人の避難者は見るもあはれに或は焦げ或は膨れて斃れてゐる、あゝのろはしき猛火よ！

逃げのびた職員が危険を冒して猿江の廢墟を訪れたのはそれから丁度二日後の事であつた。慘狀を見た職員は氣も狂はんばかりになつて死體を尋ね歩いた、校長とおぼしき人も容易に見つからなかつたが、唯一つ數ある死體と異なる死體が目についた。若しやと思つてよく見た。見覚えのある金齒、アルバカの服地左手の鍵、あゝこれは校長先生だ、夫人は「このお姿は！」と急にこみ上げて嗚咽したどれつと續いて來た。同僚もあつとばかりに泣きくづれた。あゝ何たる悲惨事だらう。

寄り／＼に集る民集も校長の屍にすぎり合掌して「先生すみません、先生すみません。私共が御迷惑をおかけしたばかりに先生迄を斯ういふお姿にいたしました」といつてなきくづる。

今や校庭に「蜜乘院博識弘道居士」の法名も靜かにさゝやかなるまがきにつゝまれ、禮拜するものゝ心よりの香花は日夕絶えることがない。

あゝ猿江校長坂間惣重郎君は斯くして永へに猿江の護神として消えたのであつた。

混亂と哀愁の秋もすぎ、今は何處を見ても復興の氣運が充溢してゐる。學校も着々整頓され後任校長も定つた。時は十二月二日冬には珍らしいすが／＼しい小春日に猿江の一角は故校長の校葬場として民心を緊張させた、焼残りの三階に北面して靈場が設けられ心ある人々の捧げた菊花造花も殊の外目立ち護國寺管長の讀經により式は午後の一時から始まつた、岡野文相、宇佐美知事、永田市長を始

め朝野の貴賓學校關係者兒童等無慮一千名は、何れも涙ながらに殉職校長の英靈に哀悼の誠意を表した。

あゝ生死を超越して殉職せる偉大なる故人の英靈！ 永へに安らげくあらんことを。

神奈川県筑郡中里村字八朔元
東京市深川區猿江尋常小學校長

坂間 惣重郎君 (五十三年)

●自家の全焼を顧みず御眞影奉遷に助力せし奇特の人

只「御眞影は最も大切である」といふ一念から

日本橋區久松小學校の隣、所は久松町四十二番地に震災前から學校用品荒物雜貨商を營むで居る清水倉吉といふ人が居る。九月一日の大地震と附近からの延焼で家財道具何一つ出さないうで全焼になつた裏には美しい努力の逸話がある。

清水君は始めあの大地震で家族全部附近の高砂橋に避難した。午後一時頃附近の人々と久松學校の中で一齊に食事を終つた。まもない事であつた、火は同區本町附近から發し續いて豊島町に延焼したのであつた。その火は引返して横山町から油町に向ひ、遂に學校附近に迫るに及んだのである。午後

四時から臨時救護所にあてられて居た久松學校は避難する群集やら傷病者の出入りで非常な混雑加ふるに重要書類の整理等で校長始め職員小使等は目のまはる程であつた。

しかし校長の命によつて御眞影や重要書類は首席訓導石田君宿直訓導和田君、小使によつて午後七時頃近隣久松警察署内に遷された時に御眞影については石田君その警衛に任じたのである。

時に火焰は町から町に飛んで久松警察署附近は群集で黒山のやうである。北風は愈々烈しく火は既に高砂町に延焼してしまつた。

一警官は署前の群集に向つて大聲で「最早逃げ路は一あるのみだ。若松町、馬喰町、左衛門橋、二丁町を渡つて上野に避難するがよい。然も各自荷物は一切放棄して身體一つで逃げねばならぬ」と警告した。

危難は刻一刻と濃くなる許り。石田君は御眞影の外に重要書類もある自分一人でどうする事も出来ぬ。直に宿直員、小使を學校迄呼びに歸たが更に返辭がない。次に小使が署内に來たので、これを亦學校まで遣したが、亦返答が一言もない。石田君の不安と恐懼は我々の想像に餘りある。

一方清水君は地震後間もなく家族一同を丸の内に避難させようと決し先づ人形町の高木某に托し自家に引返したが一時風向が良いので再び君は迎へに行つたのである。然るに家内の者は七十七の中風

の老母を脊負つて既に丸の内に避難した後であつた。清水君はこの騒擾と混亂で或は踏み殺される様な事はあるまいかと案じて日本橋まで追跡した。更に手掛りがない。今は此迄と又もや久松町の自宅附近へ引上げた。

時に西と東と血走る群集の中に不安な面持ちと緊張し切つた態度で久松學校衣門を徘徊して居る人が見える。これは正に同校首席訓導石田耕一君であつた。清水君は早くも石田君の態度をあやしんで問うた。石田君は「自分は御眞影を捧持してゐるが巡査が一刻も早くここを立退く様にとの事で先から何回となく宿直員や小使を呼びに來てゐるが更に返辭がない。困つたものだ」と。

清水君は事の意外に驚いて早速又もや學校迄走つた。あらん限りの大聲で呼んで見た、返辭が更がない。清水君は附近在郷軍人の一人で御眞影こそ何を措いても第一にとの信念を平素からの持主である。此時自發的に「奉遷に努力しませう。」と石田君に申出た。然し石田君は清水君の重要書類とか家財道具を案ずる餘り君の家の方はどうすると確めたが、清水君の犠牲的な立派な心掛によつて二つの御眞影の桐箱は早くも同君の肩にかけられたのであつた。

石田君は勅語謄本と提灯とを持つて共に濱町の細川邸迄避難した。ここがよからうかと邸内の池の水を検したが腰下迄なので危険である。急を校長宅に告げ上野に向つた。當時濱町河岸、若松町、馬

喰町、左衛門橋附近の騒擾混亂は到底言葉につくせない。電車路は荷物で一杯だ橋のたもとは群集山をなし身動きも出来ぬ程だ。折柄の烈風が荷物に火を呼び、橋を焼き人命までを奪はるといふ有様であつた。救を求める叫聲「荷物を持つ者は通せぬぞ」との聲は何れも耳をつんざく程であつた。

いよいよ清水君が近づくと「此人許りだ、荷を持つて平氣で通るのは。通すな／＼」と。然し信念の強い清水君は毫も屈する色を見せないで「これは御眞影であります」と幾度か無理に衆をおしわけ、夜の十二時頃やつとの事で上野觀月橋についた。しばし安全と、ここで一夜を明した。翌朝午前六時頃本郷區眞砂町十五番地石田君の宅に着いた。この大震大火で石田君のどうかと危んだ家屋は幸ひ焼けないで家族も皆安全御眞影のお話を聞いて一家狂喜して奉遷につとめた。ついで石田君は校の命によつて九月九日市役所の手を経て宮内省に奉遷し全く安全を得たのである。

久松學校石田訓導を訪へば「實に當時ほんの一瞬の間に騒亂急迫の場合となり、學校へ幾度呼びに來ても誰一人返辭のない時に、自宅の焼けるのを顧みないで飛んで來て奉遷に努力して戴いたことは、何とも御禮の申し様がない」と當時を述懐して語つた。

清水君は静岡縣人、明治三十七八年戰役に於て第二軍第三師團第三十四聯隊第一中隊橋中佐の指揮の下に活躍中の一人であつた。今度の火車で功七級勳八等の勳章、勳記、年金證書等すべて灰になつ

てしまつたが、「自分は全く御眞影の捧持者であつたため人より早く安全地帯に避難する事が出来さしたる負傷もなく丈夫で、家族にも再會することが出来たのです。御眞影は實に有難いものであります」と述べられた。

日本橋區久松町四十二番地 清水 倉吉君

● 災後率先して學習所を作つた小學校長

東京市深川尋常小學校は深川區東森下町一〇二にあつて、幼稚園を有つて居る。三十六學級兒童約三千、職員四十二名といふ龐大な學校である。校長阿部潔君(四九)は東京高等師範學校附屬小學校に二十ヶ年も勤続した人である。本校に轉ずると共に、先づ非常時に於ける避難所を考へた君は、第一を岩崎別邸、第二を本所被服廠跡と決してゐた。岩崎別邸は約五萬坪の敷地でも其の三分の一は池であり森をめぐらしてゐたのである。勿論収容力に於いて被服廠跡には及ばなかつたけれども、其の地形と距離の近いといふ點に於いて岩崎別邸が第一に押されたわけである。

九月一日、始業式を終へ残務を整理して歸途についた校長は、外手町で大塚行き電車に乗替へよ

うとした時にあの大震に遭遇した。校長は直ちに引返して學校に歸つてみると約半數の職員が校庭にゐた。地震に對しては校舎の安全を信ずることが出来たけれども、火災に對しては堪らないと思つたので、先づ御眞影を校庭に持出して教壇の上に奉安した。餘震は連続的にくる。避難民は後から入り込んでくる。職員は全力を擧げて其の方の世話をする中に、水道は枯れて終つた上に、恐るべき火烟が本所方面と洲崎方面とに擧つたのである。けれども、中を隔てる川があり、且つ風の方向が良かったので、此の方面まで燃えて來ようとは思へなかつた。

併し、段々と形勢が怪しくなつてくるので、午後二時頃になつて校長は御眞影の桐箱を白布で被ひそれを風呂敷で包み更にテール掛で巻いて、大槻國雄訓導を伴つて岩崎別邸に入つた。道路には多數の避難者で混亂してゐたが、未だ邸内に入つてゐる者はなかつた。留守居役の藤田君に依頼して大金庫の中に御安置したが、後大火の際を慮つて裏手の茶室に奉遷した。

かうして置いて一と先づ安心した二人は、庭内の小山に上つて愕いた。先程の火は益々盛んになつて、烈風に煽られるまゝに地を這つて襲ひかゝる。東方丹後町に起つた火の手が延びて東西北の三方が火に圍まれてゐた。これでは駄目だと思つて茶室に引返し、御眞影を奉じて池の端に避難した。そのうちに火ははや裏の森にまで入つた。二人は油の中の島に渡つて、此處ならば安全だらうと思つて

ゐたのに、狂へる火勢が漸く襲ひかゝるやうになつてみては、今は死力を盡してかゝらねばならなくなつた。乃ち島の東南に當る水際石の上に御眞影を安置し、箱を紐でくゞり、一端を其石より一段低い水中の石に、他端を手持つて二人は水中に半身を浸した。

やがて別邸では日本館が焼け初めて、今は三方すべて火になつた。物凄い旋風が渦を巻く。十時頃になると殆んど呼吸も出来なくなる程の状態となつた。丁度小石川竹早町の人で村木榮次郎君がゐて毛布と襦袢とを持つてゐたので、其の毛布を水に浸して三人で被り、それで熱風と火の粉を防いでゐた。けれども火勢は益々熾んになるばかりなので、三人は交る／＼池の深みへ飛込んで御眞影と二人の被つてゐる毛布に水をかける役目をした。けれども、三方からの火勢は愈々激しくなる、日本室との間の森にも火がついた。西洋館にも火がついた。周囲の物は皆發火點に達したか自然に燃出した。若し入口の森に火がついたら其時こそ最後であると、幾度も毛布から出てみては「まだつかぬか」と案じ煩うた。

幸ひにも三方の火は燃える限りのものを焼き盡して一方を残したので、池邊にあつた群集と共に、三人は辛うじて生命を全うしたが、午後の六時から翌朝八時頃まで十四時間水中に入浸りになつてゐた。八時頃やつこのことで焼け焦げた芝生に身を横たへ、御眞影の包みに手を通したまゝ我知らず三

時間ほど眠つた。

やがて全市に漲る黒煙の下に座つて、徐ろに今後の方針などを考へて居るうちに、他の職員も校長の此處にあることを知り、重要書類（學籍簿・成績臺帳・沿革誌其他）を携へて集つてきた。それには小使を四人つけて保護させた。

午後になつても飢を感じなかつたが、今夜もかうして明さねばならないと思ふと、お腹を拵へて置かねばならないと氣とに付いて、大槻訓導に食糧を探してきて貰ふことにした。大槻訓導はやがて藁帽子に半分許りの玄米を持つて來た。避難の中から釜などを借りてご飯を炊いたが、出來上る頃には年寄りや子供が來て乞ふので、其の人たちに分けたりして、二人は後で僅かに一つ宛の小さなお握りを口にしたのみであつた。

午後の三時頃、校長は何とかして歸宅するつもりで此處を出た。幸ひに新大橋が渡れたので水天宮に出で、左右の熱い火の原を進み、御徒町から大塚へ出て、七時頃漸く瀧の川の自宅に辿りついた。

辛うじて助かつた君は、綿のやうに疲れた身體を横たへながら、岩崎邸内に残つてゐる數萬の生命を思ふと一刻も猶豫して居られない氣がした。依つて三日の午前四時頃夜明けを待つて輕裝して市役所に向つた。丁度戦場のやうな市役所で吉田助役に面會して深川へ食糧を送ることを交渉し、折から

途上で出會した同校の鎮尾シン訓導が連れてゐた迷子（同校兒童）をも市役所に托して置いて更に内務省社會局に赴いた。社會局でも同様の交渉をして其の快諾を得、午後一時に其處を引上げた。

これより先き、市の内外には流言蜚語が盛に起つてゐたので、君は太く御眞影に對する處に苦しみ五日には高等師範學校に三宅校長を訪ねて保管を依頼したが、各方面からの申込で金庫が一杯なので、致方なく七日に第四聯隊本部になつてゐる切通しの岩崎邸に奉安して貰ふことにした。

これで大安心をした校長は、八日から深川方面の活動に一身を捧げることが出来るやうになつた。そこで十日には區長に會つて學校をはじめようと提案した。區長も喜んだので十一日には岩崎邸内に宣傳ビラを配布し、兎に角十二日から授業を開始した。單に學習所といふに過ぎなかつたが夫れでも集るもの三十四名。震災後の學校としては恐らく最初であつたらう。方々から同情が集つて食料衣服學用品等がかなり早く集つた。交通機關の全滅した街路を、瀧の川の自宅から三時間半もかゝつて毎日深川まで通つたのである。

この兒童學習所については、六十餘歳の首席訓導長井君が全責任を負うて努力したのであつた。君も亦感すべき熱心な教育者であつた。

●勇敢周到な御眞影奉遷

君は甲斐國甲府在山城村に生れ、長じて學を修め教育に志し、後小學校に或は高等女學校に勤めた。君は訓育と體育方面を好んで研究してゐる。少年時代から劍道を修行した。又一面佛法を好み奥州白河町淨土眞宗の大綱寺住職、信曉師につき修養し法弟釋曉覺の法名を得た。斯くして君は強健な身體と深い信仰とを以て教育者として育英の道に努めてゐた。

九月一日君の勤むる學校も始業式を終へ二千三百有餘の兒童は新學期の希望を抱いて午前十時には嬉々として全く退散してしまつた。

午前十時半より開かれた職員會も校長より職員に欠勤者なきを喜び二學期に對する方針と希望を披瀝し約三十分間位で閉會となり三十有餘名の職員は隨意退散した。

君は二三の職員と共に食卓に就かうとした其の一刹那、異様の音響は起つた校舎の動搖激甚なので職員は運動場に集合し只々事の意外なるに驚き、策の施すべき術もなかつた。

續いて來る強震に校舎の近隣は家屋倒潰し土砂煙は天に沖すかと思へば既に火は紅蓮の焰となり、

本所一面は火の海となりさうである。道路は避難民が潮の押し寄せ様に阿鼻叫喚の聲忽ちあたりを蔽ひ其の凄慘は言語に絶した。

君は此の間學校の重要書類の搬出及、御眞影を奉遷する校長をたすけ校庭の中央に御安泰を祈つた此の時消火栓にホースを繋ぎ水管の筒先きを門外に出し防火の用意をした。君は筒先きに立つたが憐れ水道は斷たれ漸やく一、二尺力弱く流れ出たのみであつた。

折しも各所に黒煙卷り上り突風之に加はり土砂と黒煙と猛火は濛々天日を閉ざし、加ふるに倒潰爆音續いて起り凄慘を極めた。猛火は一層狂威を振り校庭の上空より火の粉土砂など舞ひ落ち今は御眞影の御安泰もいかに……猶豫なりがたしと思はれた。

君は校長及當直員其の他と共に運動場にゐたが、

御眞影を適當なる場所に奉遷すべき旨を校長に促した。校長もしばし英斷に苦しんでゐたが君の再々の懇請と時の狀勢により遂に奉遷を彼安藤に命じた。

君は大任を受けた。數貫目の槍造りの御箱を肩にあげ勇敢に、

「生命のある限り奉遷に努力いたします」といふや之れを見た日頃親しき古田、山本兩訓導は一人にては危うし生死を共に余等もとて三人で奉遷することになつた。南に數町、倒潰家屋やモク／＼煙

の出る屋根などを踏越え、人々を押しつけて漸やく區役所へ来た。吏員悉く路上に避難し、杉山庶務課長のみ一隅に在るを認めた。御眞影奉遷を如何にすべきかを尋ねた。

曰く「君等も此處に止まり情勢を見よ」と、されど忽ちにして區役所も危険に瀕したので相生警察署に行つた。署内は戦時状態で殺氣満ちた其の活動振りには物すごかつた。

山内署長に面會し奉遷の旨を述べ、御安置を依頼すれば應接室に導かれたが、まもなくこゝも猛火に襲はれさうになつた。署を辭した。群衆は被服廠に、と多くは被服廠跡に進んだが、君等は兩國橋にと進んだ。人事を盡して天命を待つ決心を以て三人益々結束を固めた。

本所、深川は全く猛火に包まれた。日本橋區神田區方面も各所に猛火起り大爆發の音は耳をつんざき心膽を寒からしめた。勇奮、日本橋神田を突破しようかと相談した。時々餘震に襲はれ、煙の中を切りぬけ、猛火に追はれ呼吸さへくるしく、恐ろしい渦に攻められ神田の中央に出た頃は力つきて事の成否すら怪しまれた。本郷臺、駿河臺、丸の内方面は濃煙に包まれ、小川町にては襲來した紅蓮の焰の爲めに將に四方を塞がれた。危く逃れ得てあやしき小路を通り、遂に内濠に出た。

ヤット、九段坂上に着いた時は言葉さへ出し得なかつたが、惠まれた二本のバナナを三分して食し彼等は復活した。見下せば曲折數里彼等の突破せる跡は全く火の海と化してゐた。靖國神社の前も民

衆と荷とでうづめられてゐる。君は麴町區富士見町及飯田町方面の猛火を怖れて牛込見附停車場に出て進んで牛込區若松町三井家に至り、執事、海軍中佐 朝比奈正一君に面接し、御眞影奉遷を依頼した直ちに快托され、應接室に安置してくれた。朝比奈君の同情により陸軍上等兵山縣君も警回の任にあたられた。時は午後七時に近かつた。

安藤君は家族の安否を若松町の自宅にたづね、妻子と共に三井邸内に避難し、御眞影警護の爲め山本訓導と夜を明した。二日は山本、吉田兩君は自宅の安否をたづねに歸宅した。其の後妻子を戸山學校に避難せしめ、邸内林地に穴を掘り鮮人或は主義者等の襲來(流言)にそなへ、御眞影の御安泰を祈る術とも……と考へた。

三日は本横小學校訓導中村下村高田三君の來訪あり、君は晝間の警護を依頼して本所方面に職員其の他の安否を探りに出た。言語に絶する慘狀を踏んで校舎の焼け跡に行つたが職員は安否さへ不明である。地勢上避難地と想ふ龜戸町に行つた。下河原救護所に醫務長小俣政一君を訪れた。收容者は焼け爛れ或は盲者となり、不具者となり、悲鳴をあげて苦悶する有様は目もあてられぬ。此時彼は藥品の不足を視た。何等かの方法で彼等の苦痛を多少なり除いてやりたいと考へつゝ歸つた。夜は邸内にて警固に努めた。此の時町内ラヂオ堂主人と會談して本所方面の慘狀を話した。序に火傷の藥が欲し

い事を告げた。主人は君に持てるだけ火傷の薬を提供すると答へた。

四日君は十數貫目價格數百圓の藥品を得て僅かに玄米飯に飢をしのぎながら龜戸救護所に運んだ。憐れなる數千人に分けた。小俣警務長も下河原君も共に感謝した。

君は斯くして夕暮若松町に歸り二時間の休眠をとり夜警に夜を明かした。

八日は夜警まで下村訓導に依頼して千葉縣中山町に行つて、校長の火傷を見舞して且つ御眞影の奉遷について打合せ、探り得た職員の安否を報告した。十里に餘る道に勞れ一泊した。

十三日は三井家應接間より、安藤吉田及山縣上等兵警護の上、同家の自動車で丸の内六號館、東京市學務課長室に於て奉遷方を依頼し無事に責任を全うした。

山梨縣四山梨郡山城村一二九番地
東京市牛込區若松町三十八番地

東京市本橋小學校訓導 安藤光熙君 (二十一年)

●五校の御眞影御守護

女史は東京市一橋高等小學校校長湯澤直藏氏の夫人である。

曠古の大震災火災に際し、神田區市立小學校中、千櫻、芳林、小川、一橋、淡路の五小學校は、難を

上野公園内東京市自治館内に避け、御眞影を奉遷したが、慘火延焼して、上野停車場を灰燼に歸せしめ、割烹店常盤華壇を焼いて、將に東京市自治館に及ぼうとした。

依つて更に東京音樂學校に請ふて、本據を茲に移したが、飛火が靄の如く落下し、危機迫つたから相圖つて御眞影を市外千駄ヶ谷湯澤直藏氏邸に奉遷し、各校から二名宛の宿直員を派して、護衛の任に當らしめた。其の間約旬日、女史は不眠不休、宿直員を優遇し、夫湯澤氏校務に執筆して、家を顧る暇なき間に於いて、懇切周到の注意を拂つて、宿直員を助け、食糧品不足の際に於いて、家人を顧し、私財を投じて食糧品を買求め、宿直を容易ならしめた。

女史は良く夫の職務を理解し、皇室を尊び、御眞影護衛の重大なるを思ひ此の大責任を完うせしめた女史の篤行は感ずるに餘ある。

福島縣相馬郡飯野村百観宇蓋田六四
豊多摩郡千駄ヶ谷五二九

湯澤 幾代子女史 (五十六年)

●御眞影奉遷の苦心

九月一日の大事變の際、

御眞影の安泰を祈りつゝ、猛火を侵して奮闘した例はたゞに上記数件のみではない。調査員の筆につたもののみでも左の如き多數に及んでゐる。

○神田小學校森屋、岩田、兩訓導、横田小使の奮闘

○御眞影奉遷の苦心

東京市酒町尋常小學校訓導 狐塚君 鎌田君

○御眞影を奉じて窮地を脱した訓導

東京市明川高等小學校

玉城良榮君 岡本亥之助君 土田銀松君

○船中に三日間絶食して御眞影を護る

(救命篇最後段として御眞影を迎へた船頭さん参照)

東京市東華尋常小學校訓導

藤井敬次君

○校長の黒服

東京市竹町小學校長

伊藤雄治君

○沙場に重要書類を埋む

東京市山谷組小學校長

本田小一君

○私事を顧みず御眞影奉遷に努力した職員の活動

東京市日本橋女子高等小學校訓導

圓谷彌君 鈴木八郎君 福岡房吉君

○震災に善處した小學校長

東京市千穂小學校長

濱田國松君

○御眞影奉遷の努力

東京市中和小學校長

山口齊君 外職員使丁

○私事を顧みず御眞影奉遷に努力す

東京市城東小學校訓導

佐々木衛君

○水火の下に御眞影を奉じて

東京市數矢小學校訓導

早稻田耕之助君

○老事務員無事御勸語を奉遷す

東京市太平尋常小學校

清水義尊君

その奮闘には何れも勝り劣りはない。

愛
情
篇

●警官の情に感ぜし道行く女

浅草の田島町八十番地に山田徳松といふ老爺がゐた。中風で半身不随の身を一本の杖に寄せつゝ人込と火焰の中を命からしく上野まで逃げのびた。けれども氣の毒な事には、親子離れしくなつたのであつた。老い先短い老爺は毎日廢墟の都を眺めては、人知れず涙ぐんで早く俵に會ひたい早く俵に會ひたいとのみ願つてゐた。

時は丁度九月五日、北清島町交番の山田巡查が通りかゝると件の老爺が息も苦しげに、のろい歩みを我家へと續けてゐた。巡查は一目見て「爺さん生きてゐたかね、まあよかつた、お腹はよいかね」と聞いた。(それもその筈途この間この爺さんが近所の墓地に轉げてゐたのをこの巡查が救つて宅まで届けた事があるといふから)

すると老爺は、かすかな聲で「二日からまだ何も食べません、お腹がペコ〜で……」といふ。巡查は素早く眼を光らせた。そして角店の芋屋に目をつけ「あそこへ行かうお芋があるから」といつて老爺の腕をかゝへる様にして連れて行つた。

囊中から金若干を出して芋を買つて食を恵んだ。

丁度その時である。さつきからこの様子を見て居た通りがりの一婦人があつた。つか／＼と巡査の傍に来り直ぐ財布を開き中から金壹圓を出し（これは彼女の持金の半分であつたらしい）「これはほんの僅ですが、これで爺さんに何か買つて上げて下さい」といふ。

やさしい女の眼には玉の様な熱い涙が浮んでゐた。意外な言葉に巡査は痛く感激して「有難う／＼それでは折角ですから御厚意を受けませう。甚だ失禮ですがお名前は」と聞くと、その婦人はさも羞しげに日本橋區濱町二丁目中村おとくと語つて足早くそこを立去つた。

芋屋の亭主も痛く感じて「この調子で行けば復興も何の事はない」と私語した。恰も或る偉大な暗示でも受けたかの様に。

新潟縣北蒲原郡阿方村

淺草區七軒町警察署諸巡査

山田吉作君（廿九年）

日本橋區濱町二丁目十一番地

中村とく子（二十三年）

●大道に坐つて得たお金を

大正十三年、慌たゞしい秋も更けやうといふ十一月頃であつた。澁谷町加計塚小學校に野口校長を訪れて「少しばかりのお金ですが、罹災兒童に何か買つてあげてください。」と申し出たお婆さんがあつた。野口校長も老人の同情心からお寺詣りのお小遣でも儉約してほんの僅かな志を寄せられたものだらう位に考へて、一通りのお禮と共に快よく承諾したので、「それで私の志も届いた」と喜んだ。お婆さんは受取もとらずに一封を置いた儘に歸つていつたのであつた。校長が開いて見ると紙包の中には八十圓あつたので、驚いてよく調べて見るとこの八十圓には美しい老人の眞心が籠つて居ることを發見したのであつた。

毎朝五時半頃から下澁谷一帯の地へ納豆を賣つて歩く品のよい七十近いお婆あさんがある。このお婆あさんは下澁谷一七八八にある門構への立派な家に住んでゐる子供は八人にあつてそれ／＼立派に立身して皆一戸を構へてゐる。八人の兄弟中七人は男でそれが皆そろひもそろつて兵隊に出た。然も次男の定助（四三）氏は日露戦争に出征して金鷄勳章を下賜された猛者である。この七人の男の兄弟と一人の女の子は今ではそれぞれ共同し、或は連絡をとつて器械製造業、器械販賣業等にたづさはつてゐる。八人の仲のよいこれ等の兄弟からは毎月お母さんの大橋らくさんにそれぞれ應分の仕送りをしてゐた。おらくさんは毎日下澁谷の宅で七男の七郎（二十六歳）さんと女中さんの三人で何不自由なく

暮してゐたが、九月一日の大震災火災によつて市内には澤山の罹災者が出来て、その日の暮しにも困る人があることを知つたおらくさんはこのあはれな罹災者に對して非常な同情心を起した。そこで自分の出来る力でこれ等の人のどれだけでも救つてやりたいと言ふ決心をした。そこでそのことを兄弟（おらくさんから言へば子供）の者に相談したが、兄弟のものは私達の仕送るお金の一部分を何等かの方法で罹災者に寄附したらよいでせう。」と言ふのみであつた。しかし、おらくさんは、それで承知は出来なかつた。「子供にもらつたお金をそのまま寄附したのでは、自分の志があらはれない。この金をうまくつかつて自分の力で金をもうけ、それを罹災者に寄附したい。」といふ意味のことを言ひ出して相談した。兄弟の人達は、お母さんの熱心なこの申出に對して、それを「いけません。」と言ひきることが出来なかつた。そこで「身體を害しない範圍で何か商賣をしたらよいでせう。」と言ふことになつたのである。

おらくさんは先づ朝の仕事として住宅から程近い酒屋にいつて納豆を買ひ、朝飯前にそれを賣り歩いた。それが十月十日頃からのことである。納豆賣が終ると午後の一時か、二時頃まで自宅にゐて午後の三時頃になると萬世橋まで出かけ、萬世橋の近所の問屋で股引、シャツ、襦袢、足袋、草履等を仕入れて橋の附近に露天を設け、夕方歸る職人や労働者に極格安にこれを販賣した。

道行く人は年寄のお婆あさんに同情してか、品物が安いいためか、親切に然もよろこんでそれ等の品物を數多く買ふのが例であつた。お婆あさんは四時、五時、六時この三時間位の間にかかりの賣上げを得て下澁谷の自宅まで歸るのを何よりもの楽しみにしてゐた。かうした毎日が一ヶ月半もつゞくと全部の純益金が八拾圓に達したので、さてこれをどう使つたら罹災者を助けることが出来るかと考へ始めたが、老人の手で拵えた大金も幾十萬と限らぬ罹災者には九牛の一手にも値せぬ少額であるのでどうにも善い使ひ道を考へ出されなかつた。そこで先づ近くの學校に来て居る憐れな罹災者の子供たちにもせめては學用品でも買つて與へたら……と急いで野口校長を訪問したのであつたのだ。

それから暫く経つた十二月十八日には、八十五圓二十三錢を持つて又加計塚小學校にやつて來た、そして「僅かな老人の志ですが、みんな私の働いて得た金です、これからも集つただけを持つて來ますから、氣の毒な子供たちの爲になるやうに先生の御自由におつかひ下さい」と懇ろに頼んで歸つていつた。志の酬はれる悦びに老人の顔には輝やきが燃えて居るのであつた。

編者が大橋家を訪問したとき、おらくさんは納豆賣から歸つたばかり、朝飯をとつて居るところであつたが、七男の七郎君と同居して居るそのうちは立派な門構えの逆も納豆屋さんや露天のお婆あさんの出て來さう家とも思はれぬ住居であつた。

其後萬世橋の方はバラックが建ち込むで露天も出来ぬので下澁谷の一、〇二〇番地に僅かの地面を求めて露天にも似た小やかな店を設け、働ける限りは働いて帝都復興の一助にも盡したいと努めて居るといふことである。メリヤスの肌着が幾十人かの憐れな子供たちの肌を暖かく包んだのは、それから間もない後のことであつた。

本籍地 東京市芝罘本芝四丁目十六番地
現住所 東京市外濠谷町下澁谷一七八番地 大橋 ら く子 (六十八年)

●篤志な看護婦

麹町區飯田町六丁目一番地に、大關チカ子君の經營する大關看護婦會がある。

地震と同時に富士見町方面からの火が、風の吹くままに恐ろしい勢を以て飯田町一圓を襲つた看護婦會も亦此の火の襲ふ所となつた。

大關看護婦會には、いつも多數の看護婦が寄宿してゐたか此の日は殆んど全部附近の病家に派出して山内、金高の兩看護婦が居つただけであつた。二人の看護婦は取るものも取敢えず、安全地帯へ避難しようとして、兎に角飯田町の電車道へ出た。陸續として避難して行く人の群に混つて、火に追は

れながら九段下へと急いだ。

九段上、靖國神社馬場の内外、あれほどの廣い場所も附近の人達の唯一の避難場となつて、もはや立錫の餘地もなかつた。二人は地割れのした九段の坂をのぼりきつて、しばらく田安門近衛歩兵聯隊の營門の前に立つた。神田方面の猛烈な火、それを越して日本橋本所下谷の火災の煙は焰々天に沖して物凄い。火の中、煙の間を潜つて避難してくる人で九段の坂は埋まつた。其の人々の中には怪我をして居る者がかなり多い。擔はれてくるのは重傷者である。杖を便るは輕傷者である。田安門前に臨時に開かれた近衛歩兵第二聯隊救護所も忽ち満員になつた。

是を見てゐた山内、金高の兩看護婦は、自分の働く時である、傍觀すべき時ではないと、健氣にも同班長星野軍醫正に應援を申出たのである。軍醫正は非常に喜んでこの美しい願を容れた。

當時二人は咄嗟の避難であつたので、白い看護服の用意もなかつた。然し踵を接して集まつて来る重傷者を救護班員と共に一心に看護した。

時刻の移り行くにつれ、夜の更け行くにつれて救護班の仕事は忙がしくなつた。小さな救護所はせまくなつて來た。ために救護の天幕は營内に移された。二人は家へ歸る事も忘れてしまつた。自分の荷物が焼失しつゝあつたことも忘れてしまつた。全く我を忘れて傷病者の救護に全力を傾倒したので

ある。一日の夜はつひに營内に明かした。二日の日もつひに家を顧みなかつた。此の間産褥婦の介護——(陸軍營内で産褥婦の介護は妙であるが産婦まで收容されてゐたのである)は當然二人の手に渡されたのであつたが、其の他、殊に重傷者の看護に努めた。誰れもが嫌がる患者の大小便の處置に至つては全くこれを一手に引受けたのである。

三日班長に請うて、歸宅を許されたので、二人は始めて焼あつたを訪れた。大關チカ子君と偶然出會ひ、二人は今までの委細を會長に報告した。會長は其の行を讃歎した。

「よく働いて呉れました。眞に人のためにするは此の時です。給料のどうかうを云ふ時ではない。あなた方は大關看護婦會の派出看護婦ではあるが、此の場合私を捨てて下さい。會の方の事は心にかけず、あなた方二人の都合さへつくならば、今までの救護班に行つて精一杯の働きをして下さい」會長の意氣ある言葉に感じた二人は、直ちに營内にかへつた。前よりも一層の働き振りを示し、六日に至るまで、諸種の治療は勿論、被服食事の世話に至る迄、至れり盡して餘す所がない。其の優秀な技術と誠意ある動作とは患者を泣かせ他職員を感奮させるにあまるものがあつた。

連日連夜の活動に猶その注意力は常にもまして深く精力の少しも衰へなかつた事は全員の驚嘆する所となつた。儀禮の厚い事に至つては所員と共に食を頒つに常に極めて謙遜な態度に明らかであつた

「こんな天災にあひながら、これ程充分に食物の戴けるのは何といふ幸なことでありませう」とは食前常に語る所であつた。

山内さんは、非常な親孝行者であつたので度々両親に電報を發し、自分が楽しく職のために努力してゐる事を報告した。そして九月の十一日は軍艦に便乗を許されて歸國した。

金高さんは寺島本臨時陸軍病院が非常に忙がしくなつた様子を聞くと、七日自分から願つて其の方へ移つて行つた。

兩人とも救護班を去るにあつても固く其の氏名を秘したために、暫くは何人であつたかさへわからなかつた。後に漸く其の氏名が探知されたのである。

大關看護婦會派出看護婦 京都府南桑田郡龜田町字鹽屋町

山内 て つ子 (二十三年)

三重縣度會郡内城村大字立岡三七五

金 高 光 枝子 (二十六年)

●是も前世の因果

佐藤もせさんは震災の前日から、神田仲猿樂町五番地の娘の縁付いた千田信雄氏方に行つて居た。

そして主人が不在の折にあの大震にあつた。

第一震で家が倒れ、もせさんと娘と孫の三人がのつてゐた二階がズシンと下に落ちたので一時は氣を失つたが二階は潰れなかつたから、何の怪我もなかつた。外には人々の逃げまどふ聲が聞えた。その時ふと近所の心安くしてゐた森ちよのさん(六七)の事が氣になつた。

「晝の間はたゞお一人の筈ですから」

と娘もいふので、もせさんは潰れた家の屋根づたひに森さんの家へ行くと、その家も倒れ森さんは膝に怪我をして助を呼んで居た。あわてゝ背負つて逃げ出さうとしたが又揺れ出して立つ事が出来ない漸くにして娘の所に連れて來たが、間もなく「火事々々」といふ叫びが聞えて來た。あたりの人はもう皆な何れへか避難したと見えて往來はひつそりとしてゐた。

もせさんは老人の身でありながら森さんを負ひ、娘には孫を背負はせて順天中學のわきを廻り、電車通りへ出ると娘の連合千田氏も歸つて來た。それから一先づ明治大學に避難したが又火に追はれてお茶の水女子高等師範へ逃げた。しかしそこも間もなく危なかつて來たから一同は上野公園に行き、森さんを入口の石段の上に静かに寝させて介抱してゐたが避難者があとから〜と續いて來るのでそこにも居られなくなつて不忍の池の上のあたりに移つた。そこから見ると早稲田の方にも火が見える

千田氏は様子を見に出た。すると途で息子の清雄氏が妹と二人で探しに來るのに逢つた。

一同は二日の夜明に家へ歸つた。しかし地震が怖いため再び近所の久世山に避難した。森さんの傷はよほど酷かつたと見えて脚が非常に腫れ上つて苦痛が非常なので車を雇つて大學病院に送つた。しかし少し快方に赴くと、

「寂しいから早くあなたの所へ連れて行つて下さい」

と頻りに退院を望んで止まない。もせさんは息子の清雄氏にも相談して、子供も身頼りも何にも無い氣の毒な人だから、出来るだけ世話してやらうと決心して大學病院から連れ戻つた。其の時は腫れは引いてゐたがまだ立てなかつた。

近所に孫が手を傷めた時に癒して貰つた荒木といふ接骨院がある。退院後は事情を話してそこでたゞ薬價だけ拂つて診て貰ふことにした。お金もそれほど自由にならないので、もせさんが毎日背負つて病院通ひをした。雨風の烈しい日などには、

「私はどうしてこんなにあなたに御苦勞をかけるやうな身になつたのでせう。」

「いゝえ、これもみんな前世の因果でせう、前の世では私がつとあなたのお世話になつたのかも知れません」

など、年老いた二人は途すがら涙に暮れる事もあつた。かうしたもせさんの同情と苦心とで傷は追々快方に赴いたが十月二十七日に餘病せんそくを發し、十一月五日に果無く逝つてしまつた。

森ちよのさんは、昔は京都祇園の名妓で、榮衛まで捨てた某華族と、數奇な生活を送つたのであつたが明治三十五年男と分れ、單身上京して神田仲猿樂町五番地に居を構へ自身は長唄の師匠をし側ら自分の前半世につまされて、親の無い者とか、苦學して居る者に同情を寄せ、女の身一人で、誰の後援もなく「苦學勞働實行會」を創立し自宅の二階に苦學生を置いてゐたのである。

佐藤もせさんは野邊送りをも一切濟ました後、故人の志を繼ぎ苦學生の爲に其の事業を繼承して現に十數名の苦學生を收容してゐる。

本籍地 福島縣伊達郡大木戸村具田
現住所 東京市小石川區口水道町一五 佐藤もせ子 (五十年)

●聾啞の救濟

九月一日の大震火災では、君も多大の損害(荷物を旅行の爲め他に預けておいたため全焼)を蒙つたがそんなことは物ともせず、二日から直ちに聾啞の救濟に取かかつた。

震火災の爲めに聾啞の迷子も多からうと必づき、東京市社會教育課及警視廳に出頭して、主として聾啞兒救護に當り夜を徹して活動した、尙自己の屬する學校の聾啞兒五十名及職員の家庭にも多きは一日以來十五回の訪問を重ねて不安除去の爲めに努力し、又自宅には見知らぬ聾啞の老婆を引取つて四ヶ月後の今日まで世話してゐる。しかも學校は一日も休む事なく規定の日限に開校始業し東京市に於ける教授の先便をつけた。大震災に當つては種々なる人々が各々志す方面に活動してゐるが、君の如きはまことに異彩を放つものである。不具者に寄する至純の愛の顯れとして限りない尊さを感ずる

牛込區矢來町四番地 日本聾啞學校主事 村上求馬君 (四十年)

●節約した金を救ひの資に

九月三日の夕暮、陸軍省内地測量部高級事務官室に和田中佐を訪れたのは同部小使、小池與吉君である。電氣が灯かないので中佐の卓上には蠟燭が立てゝある。窓からの風で焰がゆらくとゆれる小使の眼には何事かを決心してゐる様に異様に輝いてゐた。其の輝いた眸に蠟燭の焰がうつる。

「和田中佐殿に御相談致し度い事が御座いますして」

「相談か、何の」

「他では御座いませぬ此の測量部で此の度粉米をお買ひになりましたがあれを私に賣つていただくわけにはまゐりませぬか」

「おまへ、それを買つてどうするのか、食べるのか」

「いえ、私がいたくのでは御座いませぬ、此の地震や火事で、澤山お氣の毒な方が出来ました。私の貯へたお金が少々御座いますので、これでお米なりと買つてさし上げたいと存じますのです」

「それは大へん好い考だが、そういふわけなら何もお米でなくともいいんだらう。」

「左様で御座います、何なら外のものでもよろしうございます。しかしお金ではもう大分さし上げましたので何か外のをさし上げたいと思ひました、丁度お米が着いたのを見たもので御座いますから御相談旁御願にうかがひました。」

「大分やつたつて？ 何の位やつたのか、誰に？」

「地震が起り火災が起ると下町の方から哀れな人々が私のうちの前を通りました。私はとてもそれを黙つて見てはゐられないので、五十錢、一圓とわけてやりました。誰にと申しました所で一々名前を聞いては居りませんでしたし、幾人の人にわたしたかも今覺へては居りません。」

中佐は驚いた。常から小池の行の異なつた所を見てはゐたが、こんな美しい事を、今まで誰にも話さずに分分一個の考でやつてゐたのに驚いた。何といふ敬服すべき人だらう。小池の眸には動すべからざる決意の色が見える。

「路行く人に、金を與へる事もそりや大變に好い事だ。しかしお前の前を通らない人でもつとく哀れな人がある事も承知してゐるだらう。それ等の人にお前の金をわけ與へたらどうだ。斯んな大事件が起つたのだからきつと市役所とか新聞社とかで義捐金を募集するに違ひない。其の時は、お前は一番先きに行け。一人で考へて與へるより大勢の人の決した方法で與へて貰ふ方がいいのだから。そして其の前にお前は親戚や友達の困つてゐるのがあつたら救つてやらなければならぬ。それは米も欲しいとあれば何とかして分けられんでもない。しかしよく考へて見た方がいい。」

「どうも有難うございました。よくわかりました。新聞社か區役所へ持つて行つてお願ひませう。」

和田中佐の好意を謝して小使は室を去つた。
小池與吉君は大正九年十二月陸地測量部の小使に入つたが、その前は三重縣で瓦職人をやつてゐた地形科僚太田中尉の家に地震當時は世話になつてゐたが、中尉は休暇で歸國中であつたので與吉君は何よりも先きに中尉の軍服、正裝、軍刀を持ち出した。

非常な儉約家で、多くもない日給の中から、心がけて四百圓ばかりの金を貯へた。地震後哀れな人を見ると五十錢一圓宛惜しげもなく施した。聞かれても名を固く秘して語らない。常に貯へた金を何かの時には人のために役立てようと思つてゐたのだが、此の大震こそ適當の時であると思つたのだ。後、麴町區役所で義捐金の取扱を始めたのを聞き早速金廿五圓をさし出した。

與吉君は大の大本教信者である。死職人をしてゐた時教祖直子の逸話を其の友達から聞いた。

「教祖は、どんな人でも、宿に困る人には、喜んで泊めてやつた。そして金を貰つたことはない。絹物などは決して着なかつた。」

此の二つの話にいたく感じて大本教を信するやうになつた。それから、電車も少し位の處は乗らずに歩いた。そして其の電車賃は貯へた。必要以外の物は食べなくなつた。そしてそれを貯へた。煙草も酒も思ひ切つた。煙草代も酒代も貯めた。近頃では靴の修繕迄自分でやる。かうして貯めたのが積り積つて四百圓になつたのである。震災後は幡ヶ谷へ移轉したが、三宅坂まで歩いて通うてゐる。

坂道で荷車が苦しんでゐると、何を措いても押してやる。上官の使で走り歩いてゐても、哀れな人を見るとたまらなくなつて、ポケットから金を出してしまふ。

與吉さんは働く事と、困苦を救つてやる事が、道樂であると云つてもよい。それが人間の正しい

道だ、道を踏むのが人間のつとめだと信じ切つて居るのである。

本籍地 三重縣員辨郡七和村嘉例川
現住所 豊多摩郡代々幡町幡ヶ谷

陸軍陸地測量部小使 小池 與 吉君 (四十七年)

◎ 尊い人間愛

十二月十日夜、小石川區護國寺門前の人力車夫の客待ちに、折柄の大雨に濡れ鼠となつて一人の男が喘ぎ／＼辿り着いて無料宿泊所の在る所を尋ねた。そこに居合はせた俵夫一同はその惨めな風采をひどく憐に思つて仔細を尋ねた。

男は横濱市末吉町十二番地染物屋清水三吉(四五)で去る震災の爲め家は潰れて、両親妻子合せて四人は家の下敷になつて遂に焼死してしまつた。自分も負傷して一時は救護所に收容されてゐたが、此の程全快したので上京して就職した。しかし病後とて永續きがせず、其處此處と無料宿泊所を尋ねては泊りあるいて居るといふのであつた。

聞けばまだ其の日も朝から一食も取らぬとのこと、居合はせた俵夫の大澤君は氣の毒に思つて自分の家に連れ歸り、夕食を與へ、更に降雨を厭はず、泥道を侵して小石川坂下町の市立職業紹介所に伴

れて行つて宿泊と職業紹介とを頼んだが、満員の爲その甲斐がなかつた。そこで大澤君は雨の中を自宅へ連れ帰り再び夕食を興へた。身體の工合が悪いと云つたので醫者にも見せた。尙三吉さんは災後百ケ日餘も経つたがまだ亡くなつた者の爲に、御經もあげられないので夜寝ても妻子の事が思ひ出され、眠つても夢に現はれて夜もおち／＼休まれぬと聞いて大澤君は其の夜の中に護國寺へ行つて住職に事情を話して三吉さんの家族のために供養して貰つた。

翌日、三吉さんは職業紹介所に行きたいと言出したので、大澤君は、

「二三日は着物の洗濯でもして悠り保養するがよい、わしの知合ひに紺屋もあるから其の中に仕事も世話して上げます。」

と云つたが、たつて頼むので、自分がまだ、二三遍しか着たことのない、法被、腹掛、股引、シャツなど仕事着の用意をして汗や埃でべと／＼になつた着物と着換へさせ小遣まで持たせて、

「そんなら、仕事が無かつたら又歸つて来るがよい。」

と云つて出してやつた。三吉さんは其の儘、歸つて來なかつた。しかし君は彼の垢じみた着物を自分の妻にきれいに洗濯させて三吉さんの取りに來るのを待つてゐる。

大澤君の親切な行は、決して今に始まつた事でない。君は嘗て音羽一丁目十九番地に一人で住んで

居る毛利ハナといふ老婆の家に下宿して居たが、年寄で氣の毒だといつて朝出る前には御飯を炊くやら、お汁を作るやらして自分が家を持つまで一ケ年餘も老人を世話してやつた。殊に此の人が病氣になつた時などは身内も及ばぬ程深切な看病をしたので近所の人のほめ者となつてゐる。

此の事に就て同客待ちに大澤君を尋ねて行つたが君は客を乗せて出た所であつた。そこで君を待つ間に人間愛の溢れる大澤君の同僚の高橋宇三郎君の話を一同から聞かされた。同君も其處に居合はせだが仔細あつて救護した人の氏名は語り兼ねると云つて居た。

九月十三日頃であつた。高橋君は七十三の足腰立たぬ婆さんを或家から他の家につれて行く事を頼まれた。そこは某役所に務めて居る人で此の婆さんの倅の家であつた。此の婆さんは下谷區に住つてゐたが焼出されて先に此の家に一晚つたが翌日同人の兄の家に送り届けられた。兄は某銀行の使丁をしてゐるが貧しい身なので狭くらしい家に住んで居るが漸く二疊の間をあけて此の老いた母親を寢させておいた。所が同人の妻がお産をして何としても病人の世話まではなし兼ねるから二十日迄でよいからと、自分より暮向の樂な弟の所に其の老母を送り返したのである。

高橋君が老婆を、そこへつれて行つて家に入れようとすると弟の妻なる人が恐ろしいけんまくで、それを拒んでどうしても受け入れず、果は、

「車屋さん、車代はお拂ひしますから兄の家の軒下へでもよいから置いて来て下さい。どうしても家へは置けませんから」

とまで言ひ出した。いくら何と言つた所で先方の事情を知つて居る高橋君にはどうしても兄の家へつれ歸る事は出来なかつた。といつて弟の家ではどうあつても引取らぬ。

「どんな事情があるか知らんが。自分の親を、しかも此の足腰立たぬ親を、よくこんなに酷く扱へるものだ。よし二十日までと言へばあと一週間だ。おれが見てやる。」

とその老婆を自分の家へ引込んでしまつた。それから一週間この足腰の立たぬ見ず知らずの他人の親の糞便から食事の世話までして、

「婆さん、遠慮はいらんから、何でも言ひねえよ。」

と阿くれとなく勞つてやつた。其の後、老婆は兄の家へ引取られて行つた。

老母の引取を肯じなかつた弟といふのは人を戒める地位にある人である。話の序でに一寸、名まへが出たが高橋君は、

「こんなことは書かないで下さい。わしさへ黙つて居れば人に傷がつきませんから。」

と言つて誰をも怨まず、やるべきことをやつたやうな態度で、くれ／＼其の人の名を出さないやうに

と念を押して居た。

本籍地 山梨縣東山梨郡日川村上栗原
現住所 府下高田町鎌田ヶ谷龜原一〇

大 澤 武君 (二十七年)

下谷區上野櫻木町二〇

高橋宇三郎君 (四十五年)

●眞の教育はこの熱誠を有つ

附 大森博士の家風

大地震の襲來した當時、後藤君は東京高等師範學校附屬小學校の教員室に在つた。スツヤ地震と云ふので、運動場に跳出して見ると、占春園と稱する三百六十坪ばかりある池の水が、恐ろしく震動して居るので、君はコリヤ洲崎や深川方面は津波に襲はれて居るであらうと想つた。其時は教職員や生徒は既に歸宅して、附近には四五人の職員が居残つて居るに過ぎなかつた。自己の本據地の小學校の安泰を見届けた君は、更に轉じて中學校の前の廣場に駆け着けた。其處からは中學校は云ふに及ばず高師全體の大建築が一望の下に眺め得るからである。時は正午を過ぐる十五分であつた。

頭を擧げて圖書館を眺めると、瓦はグワラ／＼雨の如く墜落し、今しも其二階から圖書係の二俣卓

爾君が、地上に飛び降りて足を折つて倒れて居る所であつた。

君は大に驚き、直に二俣君の側に駆け寄つて應急手當として濕布を施さうとしてゐると忽ち異様な臭氣が鼻を衝くので、ふと化學室の方を凝視すると、窓から煙を發して居るので、スワー大事とばかり騒起し、「化學室から火が出た！早く早く！」と叫びながら、化學室目指して駆込んだ。

折柄本校幹事にして忠實熱誠なる稻葉彦六君が居合せ、廣い運動場には卒業生四五名がフットボールに打ち興じつゝも大激震に驚いて行んで居たので共にバケツに水を汲んたるを携へて駆けつけた。化學室に駆け着けて見ると、發煙硝酸類が倒れて、白煙濛々と室内に充滿し、呼吸も出來兼ねるので、後藤君は豫ねて用意のガーズをポケットに探つて鼻口を塞ぎ、大膽にも危険を冒して、化學室内に飛び込み、最も火を呼び易い燐や他の藥品を探したが、さすがに主任理學博士和田椿三君の周到なる注意に依つて、安全なる方法の下に藏せられてあつたので、幸に事なきを得た。

第二の化學室を覗くと、其處にも一隅から白煙が立ち昇つて居るのを發見したので、即刻之れをも室外に取り出し、危険を除いた。當時若し君の勇敢機敏なる殉職的行動がなかつたなら、白雲に聳ゆる高師の大建築物も或は烏有焦土に歸したかも知れぬ。

早稻田大學の應用化學教室の燒失したのも、其化學室からの發火の爲めであつた。目白の學習院が

燒けたのも、同じく其化學室からであつた。

大膽俊敏なる行動に依つて、幸に二ヶ所まで化學室の發火を消し止めたる君は、更に寄宿舎の方の醫局の方に駆け着けて見ると、其處には今しも數人の左官か居つて、醫局内の藥品より發火したのを砂を掛けて漸く消し止めた所であつた。かうして高師は幸にして燒失を免かれたのであつた。

折柄消防自動車が驚魂しい音を立て、駆けて行つた。電話も不通であるので、心急ぐ儘君は大塚消防署まで駆け着けて、火災の方角を尋ねた。看守は櫓に登つて望遠鏡で四方を凝視しながら、附近では火事は今音羽九丁目一ヶ所（これも藥屋の藥品から發火）のみで、其向ふに見ゆる煙は早稻田大學、北方は目白の學習院、さうして附近にはないと説明して呉れた。

先づ之れなら本城は安心と、漸く安堵の胸をさすり、一と先づ自宅に引揚げて、家族一同の安否を尋ねんものと家路を急ぐ途中に青柳小學校の前を過ぎたので門内に飛び込むと、恰も校長職員すでに藥品を片付けて運動場に集合して居た。更に歩を轉じて盲啞學校を尋ねると、之れ亦幸に異状がないと確められたので、自校の無事を喜ぶが如く雀躍しながら、程近き自宅に歸り、家族一同互に無事を祝し合つたのであつた。

翌二日はお茶の水順天堂脇の渡邊裁縫學校の寄宿舎に親戚の子の母なる人が、其愛兒の安否を心配

して居るのを見て俠心燃ゆるが如き君は、直に結束して諸方を尋ね廻り、漸く上野公園に無事避難して居たことを發見し、其旨報告して其母なる人を喜ばせた。

ア、今は善事をしたと心は満腔の喜悦に輝きつゝ、憐れなる罹災者の事ども胸に浮べて、床に入り翌三日は江戸川の橋畔に行つて見た。

折柄秋雨シト／＼と降り、其中を無数の避難者が、親は子を子は親を呼びながら、池袋方面を指して逃れて行く。

かうした悲惨極まる光景を眺めて、惻隱の情禁すること能はず、直に其前に進み出て、程遠からぬ高等師範の避難所に行くべきことを勧めた、憐むべき幾多の避難者は恰も地獄で佛に會つた如く打ち喜び涙を流しながら、安穩の避難所に歩を轉じたのであつた。

護國寺境内に差し掛ると、仁王門附近の空地には焼け出された憐れなる避難者が、折柄沛然と降り出した大雨を避け兼ねて、頭からズブぬれになつて居るのを見て、君は又もや高師の安全なる避難所を教へさうした氣の毒な避難者の群を導き助けてやつたのであつた。

かれこれして居る裡に、兩國被服廠内に於ける憤懣なる悲報が風のたよりに傳へられた。義に勇む後藤君は猛然として奮起した。君は二十年來學校の運動會等に於て、所謂赤十字班を主導し、生徒中

に或は手を挫き、或は足を傷ける者ある時應急手當を爲せることから、赤十字院長の練名が生徒間中に高かつた。殊に春秋兩回の郊外に催される高師獨特の擬戦には、華々しき活動を爲したものであつた。多感なる後藤君は憐むべき幾多の火傷者を一人でも多く救ふと云ふことは、自己の貴き天職であると堅く信じて奮然蹴起し、ガーゼ、繃帶、ヨジウムチンキ、鉄、ビンセット等の應急手當品を用意し之れを一括して風呂敷に包み、五日の朝被服廠を指して發足した。

後藤君手記

「最初、厩橋を渡らうと思つて出發しました。途中で、厩橋は焼け落ちて、渡れない、との話を聞いたので、兩國橋を渡ることに定めて本郷隣祥院の前に來ました。その門前に一臺の荷車が焼けた蒲團を載せて曳き捨られてあるのに氣付きました。何氣なしに其の蒲團を開けて見ると、焼け爛れた死體が乗つて居た。恐らく火傷を負うた。身内の者を此處まで荷車で連れては來たが、途中で死んでしまつたので、捨て、行つたものであらう。私は之を見て先づ第一に、其悲愴な有様に膽をつよしました。

丁度、兩國橋、西詰に着いたのは、午後三時半頃であつた。橋の手前の交番の北の裏手を見ると、此處には約八十餘りの死體が、川から上げられてありました。心ある僧侶の供養でもあらうか、死

屍の胸には一々、

「未來曼陀羅」

と書いた紙札を乗せ、風に吹き飛ばされるのを防ぐ爲め瓦や小石で、押へてありました。私は此の悲惨な最後を遂げた人々の屍に一々拜禮を済し、兩國橋を渡りました。河面を見ると浮きつ沈みつ流れ来るものは、何れもく、仰向けや、俯伏した人間の死體許りなのです。目測によると五分時間、約八十位の割合にも達したでせうか、如何に逃げ場を失ふて河に落ち、溺れた人々の數の夥しかつたかを今想像しても、ぞつとします河の對ふ岸には、二十餘りの溺死體が細引で結び付けてありました。初めの内は、流れ来る死體を海に流れ出ぬ様、一々引き上げてゐたものであつたのを其の限りない數の爲めに、遂にそれも不可能となつて、流るゝ儘に放任してしまつたのであらう。嗚呼、何たる慘狀でありませう。

兩國橋を渡つて直ぐ、左の岸に沿つて約三百メートル程行くと、其處には、被服廠跡より運ばれた傷病者の收容所が三棟程ありました。收容所は、第一、第二、第三、と分つて傷の輕重によつて分類收容されたものと思はれます。私の行つた時は、己に第二、第三の收容所は殆死屍許りになつてゐました。第一の收容所には、約八十名の者の内三分の一は死し、三分の一は半死半生、残りの三分の一

は未だ意識のある傷病者でありました。此の負傷者の手當は、どうしたものであらう。此處には一人の醫者、一人の看護婦も見ることが出来ません。只、一二の巡査と、此の收容所を警戒してゐる番人とがゐるのみでした。それでも、府廳や市役所の役人又は、在郷軍人などの人々の活動で、食糧品は毎日供給されてゐたと見え、左程、飢えてゐるものは少い様でした。災害後、最早五日も経過した今日、此の有様を見て私は只驚かざるを得ませんでした。恐らく幾萬と云ふ死傷者の手當には手も廻り兼ねてゐた事と思はれます。私は警護の警官に遇つて、此の收容所の人々に對して、手當をしたい旨を述べました。警官も心よく受けて、

「どうぞ、あなたのようなよい様に手當を願ひたい」

との挨拶を得ましたので、上衣を脱ぎ、ズボンをまくり、ガーゼと繃帯で、マスクを急造して、手當の用意をして、

「此の中に小學校の生徒が居るか」

と訊ねました。

「居ます。」

と直答へた子供が二人程ありました。私はその内の一人の額面に大傷のある子供を沃度丁幾をつき

縛りました。その次に中込と云ふ子供の手當をいたしました。

中込君は、胸と臂から、腰にかけて、大火傷を受け、兩足も焼け爛れて膿が煮え立つ様に出てゐました。これは紗服廠の溝に、身を潜ませて、辛じて、生き残つたといつて居ました。頭や身體は泥を以て、固着され、焼け綻びた單衣に結んだ帯が、どうしても、解けないで苦しんでゐました。私
が此の帯を缺で切つてやつたら、

「あゝ、楽になつた。」

と溜息をついて喜びました。其の間には私の洋服のズボンの裾を引張つて、

「先生、どうぞ早く私に縛帶をして下さう。」

「此處に若干の金子がありますから、此れで兩國橋の袂までも連れて行つて下さう。」

と、死體の内から縋り訴へてゐる有様は、とても、筆舌には書き盡す事が出来ません。

之等のものを、なだめつゝ、簡單ながらも約二十名程の手當を、一通り済ませました。其内に、年の頃三歳位の女の兒が、

「お母さん、お母さん。」

と死屍の上を這ひ廻つて、泣いてゐるのを見ました。

併し、二十人程の手當をしてゐる内に、日は全く暮れて、點すべき蠟燭も無く、私は餘儀なく、引上ぐる外はありませんでしたが、中込君丈は歩けさうなので、大塚の高等師範學校内の收容所迄も連れ歸らうと、厩橋がどうやら渡る人のあるのを見て、痛む足を引ずる中込君をつれて行きました。が、やつぱり、厩橋は渡れませんでした。又再び兩國橋へ引返さうとしましたが、足は痛んで、素足で歩む事が出来ません。折しも通り合せた相生署の警部、原清治君は自分の履いて居た靴下を脱いで中込に與へて呉れました。その美しい心情は、只感謝の外ありませんでした。

この分では、とても大塚までは歩けないと思つて、翌朝早く改めて迎へに来る約束をして、その夜は焼けて骨ばかりの國技館に往き其處に警護の兵士に頼んで泊らせることにしました。

尙私は、此の悲惨な、手の届かない有様を見て、此の儘には捨て置き難いと思つて、歸路、五日夜の十時頃、小石川區駕籠町の府立第五中學校内の警視廳治療本部に出頭し、醫務課員の鳴原伊男治君に面會を求め、現場の状況を報告した。すると治療本部では非常に喜んで早速謄寫版に付して各警察署へも此の事を知らせます。又本部でも出来得る限り速に救護に赴きますと引受けて呉れた。宅に歸つて寢に就いて見たものゝ、あの死屍の上に泣き叫ぶ女の子の體が、眼の前にちらついて、どうしても眠る事が出来ません。私は夜の明けのを待ち兼ねて、本年十六歳になる高等師範附屬

中學三年の三男和信を伴ひ、女兒を背負ふ用意をして、再び、被服廠に行く事にしましたけれども、電車も不通となつてゐるのに彼處まで、歩いてゐては、徒らに、時間を費す許りと思ひ、富坂警察署に乗物の周旋を依頼しました所、警察署では、直ぐ引受けて（警視廳からの刷ものが届いてゐたので）兩國方面行きの自動車を止め、此れに乗せて呉れる心配をして戴きました。

私は、先づ第一に生命を取止めた中込君等を師範内の避難者收容所に收容し様と考へました。昨夜泣き續けて居た。女の子を救ふべく努めました。中込君は昨日の手當で、今日は大分元氣付いてゐました。女の子は多分母親の懷に最後まで擁護されてゐた爲でせうか。身には少しも火傷は受けてゐなかつたけれども、右股に長さ四センチ、深さ一センチの傷が二ヶ所左股に一ヶ所及び、尾骶骨より、約十糎程の槍でついた様な大きな穴があいてゐました。此れは後で、醫師の鑑定に依ると、死んだものと思ふて收容される時に受けた齧口の傷らしいといふ事です。顔や頭は、泥にまみれ、五晝夜と云ふものは大便や小便の始末もつかずに、こびり着いて異臭鼻を刺す有様です。上半身は裸そのまゝで、僅かに女の腰巻らしいものが纏はれてゐるのみでした。恐らく此れは我が子の愛にはだされて自己の身を犠牲に子を思ふ母親の真情の發露であると思はれます。燒野の雉子、夜の鶴、私は眼のあたり、此の現實に遭遇して、人知れず嗚咽を禁する事が出来ませんでした。

夫々傷の手當を濟ませて、女の子は、連れて行つた三男に背負はせ、私は中込君の手を引いて、高等師範の收容所に路を急ぎました。中込の足は思ふ様に運ばず、日は照りつける、此の分では大塚までは容易ではないと思ひましたが、淺草橋まで辿り着いた時、珍らしく一臺の人力車に出會ひましたので、懇に事情を話して、此を雇ひ、二人の子供を乗せて、一先づ小石川區雜司ヶ谷の帝大醫科附屬分院で完全な治療を依頼しようと思つて、同病院に連れて來ましたが、途中でも中込君は、人力車の中で、女の子を勞り乍ら、餘りおとなしいので、

「まだ、息がありませんか」

と頻りに心配げに見えました。

病院に連れ行くとしても、此の儘の見苦しい身體ではと思ひ、自宅で家族のものに手傳はせて、一通りの沐浴を濟ませ、それから病院で手厚き手術をして戴く事が出來ました。夕食後、中込君はその日（六日）午後七時頃、高等師範學校の收容所に收容し、女の子は三日許り、自宅へ置きました。が、傷が深かつたので手當の都合上、醫科大學附屬分院に入院して治療を乞ふ事に致しました。

中込君の名は義一と云ふて住宅は本所區相生町五丁目三十三、今年十二歳になる江東小學校尋常科五年の生徒で、兄弟なしの唯一人子です。父は跛足の不自由な身であつたが、數人の女工を使用

して折鬘斗の製造販賣を營業とし、母は妊娠中で十月が臨月の豫定であつたさうです。父と云ひ、母と云ひ、自由のさかぬ身に、唯一人の子と被服廠に避難したものの、両親は、遂にそこで哀れな最後を遂げた事でせう。行方は判りませんでした。九日になつて、従弟の慶應大學醫學生である瀧の川の一三三五地住、鯉淵卯之吉君が引取つて參りました。

女の子の方は、子を失つた親達が、もしや我が子では、あるまいかと見に来る者が毎日、十人位づゝありましたが、その中に伯父になる人が、東京日日新聞を見て若しやと思ひ、つゞいて都新聞に出た寫眞を見て、よく似た子供だと思つて、父方、母方の、祖母や、いろ／＼身寄のものを連れて、五六度病院に見に来て居る内に、どうも、さうらしいと思ひ最後に、その女兒等姉妹三人と母親と四人の寫眞のあつたのに氣付き、その寫眞を持つて来て見せると、いきなり、

「母ちゃん〜」

と、泣き出し、二人の姉の名を云ふと、一々それを指すので、いよ／＼自分の姪であることが確實になり、大火災後丁度三十三日目の十月三日に引取ることゝなりました。この女の子は並木ヤネ子と云ふて今年三歳、父は豊壽(三四歳)と云つて、本籍は埼玉縣北足立郡木崎村大字木崎三二、並木幸作(六十五歳)の三男に生れ、長兄の喜作君(四〇)は、その村の木崎小學校の訓導であり、又次兄

徳三郎(三七)も、矢張り郷里に農を營んでゐるが、三男の豊壽君は、大正二年に出京して、本所區石原町五〇番地に和洋酒・味噌・醬油の類を販賣し、何不自由なく暮してゐたさうです。母のまよ女(三〇)は妊娠九ヶ月と云ふ身重の體で、本所外手小學校尋常二年級在學の九歳の長女よし子、と六歳の次女かつ子と此の三女のやす子と三人姉妹であつたものが、父母と二人の姉の四人は、悲惨にも被服廠の焦土と化し、唯此のやす子一人のみが母の恵みにとり残されて、此の世の人となりました。併し喜作君、徳三君の兩伯父にも未だに、一人の子寶がないと云ふので、並木家にとつては最も重要な血族後繼者として將來大切に哺み育てらるゝ事と思はれます。

後藤君は茨城縣の出身である。水戸の師範學校を卒業するや、水戸中湊の小學校に十年間の教鞭を採り、次で東京高等師範附屬小學校に轉じ、爾來今日に至る迄二十七年間、即ち前後三十有七ヶ年間小國民教育の重職に膺り、今現に同小學校の訓導で當年五十八歳である。

氏人と爲り頭腦明晰にして思慮周密、加ふるに意志堅固にして同情心燃ゆるが如くである。さうして名聞を求めず、育英の業を以て天職なりと信じ、早出晩退、致々として校務に勵精し、學校を観ること、恰も我が家の如くである。この愛校の熱誠が、偶々今回の如き大事變に際して發露したのである。

○大森博士の留守宅

これは後藤君の直話である。君が震災當日青柳小學校を訪れる前、音羽護國寺の前まで来ると、向ふから和服姿で下駄をチグハグにはいて息せき切つて駆けて来る青年がある。近寄るを見れば後藤君が豫ねて附屬小學校で教へた事のある大森博士の子息で今、弘前高等學校に學んで居る大森真直君であつた。

「おい／＼そんな風でどこへ行くのか。」

「帝大の地震學室へ行くのです。濠洲へ行つて居るお父さんに、出来るだけ精しい事を知らせてやりたいのです。此の千歳一遇の時期にお父さんが居らつしやらなくつて残念でなりません。」

と真直君の眼からは涙がはら／＼と落ちた。お父さんの博士は誰も知る如く濠洲に開かれた汎太平洋學會に出席して居られたのである。

留守を守つてゐた博士夫人は人々が恐れ戦いて野宿した大震の夜も、夫が平生主張してゐる「大震の後に再び大震はない」との説を確く信じて、家族を引まとめて平然として屋内に起臥したとの事である。

此の二つの挿話を透して奥床しい地震學者としての博士宅の家風が偲ばれる。

この奥ゆかしい博士の宅では災後間もなく悲しみの日を迎へねばならなかつた。博士は出張中に病を得、船中で殆ど危篤に陥り故國に着いた時はもうベットの上から少しも動く事が出来なかつた。そして間もなくその計が傳へられた。大震にあつて博士が不在であつたことは帝國にとつて遺憾の極みであつた。更に博士が災後の觀察を遂ぐるいとまも無く他界の人となられた事は世界學術の爲めに惜んでも尙ほ餘りある出来事である。

東京高等師範學校附屬小學校訓導 後藤 胤 保君

◎藤棚の上の兵隊さん

淺草區千束町一丁目二十五番地に、荒物や駄菓子などを並べて賣つてゐる小さな店があつた。主人は中村幸太郎といつて、妻と、母と、二つになる男の子との四人暮し。貧しい上に、戸主の幸太郎君は三年前から不治の脊髄病にかゝつて、身動きもならぬ不幸な状態であつた。幸太郎君の弟に福三郎君といふ二十二歳の青年がある。福三郎君は小學校時代から、親孝行と、兄思ひとで、近所の褒めも

のとなつてゐた。學校の成績も優良で、毎年かゝる賞状を受けた。卒業後、福三郎君は塾師の弟子となつて、忠實に働き、主人からも他の弟子に増して眼をかけられた。そして年季前でありながら、主人から與へられる小遣錢を儉約して、月に二十圓づゝ兄の家へ送り、その家計を扶けてゐた。大正十二年一月、福三郎君は麻布三聯隊に入營した。入營後も日曜毎に家へかへつて病兄と老母を慰めた。「私が除隊になつたら、きつと樂をさしてあげるから、少しの間辛抱して下さい。」と彼は口癖のやうにいふのであつた。そして軍隊から支給された僅かな給料の幾分づゝを割いては、母を喜ばせるのであつた。

麻布三聯隊では八月下旬富士山麓に演習に行き、廿八日に歸營した。八月三十一日と、あの大地震のあつた九月一日は、慰勞休暇を貰つて、彼は千束町の家へ歸つてゐた。丁度一日のお晝近く、彼は同区内の主人の家へ向つて街道を歩いてゐた。主人の細君が一週間程前になくなつた。そのお悔みを述べるため行かうとしたのである。その途上であの第一震が起つた。彼は直ちに、宙を飛ぶやうにして家にひき返した。見ると無残や家は倒壊してゐる。病兄や老母の安否も心もとなく、聲を限りに呼んで家のまはりをうろついた。やう／＼家の下敷になつてゐる二人の姿を見つけて、幼児をかゝえてうろ／＼してゐた兄の妻をはげまして、家屋の下から救ひ出した。幸ひに兩人とも負傷はなかつたの

で、助け出して道路に避難させ、まづこれでよいと、彼は、家人の言葉を盡して止めるのを振り切つて、主人の家をさして飛んで行つた。

猛火が襲つたのはその留守中であつた。見る／＼火は近隣を一掃にして手頼りのない一家のものに迫つた。

妻は病夫を背負ひ、老母は孫を負うて、群集にもまれて近くの吉原公園に避難した。公園の雑沓は凄じいもので、四方から押し寄せる避難者の爲めに、つひに夫婦は、孫を負ふた老母を見失つてしまつた。火勢は益々烈しく、吉原公園も危険になつたので、妻は病夫を負ひつゝ、富士小學校に引返し聖天山に逃れ、更に淺草公園に逃げこんだ。一方老母は、家族のものを見失ひ、迫る猛火と戦ひつゝ、ついに失神して池の周りを夢中にあつて這ひまはつてゐた。僥倖にもそこに、蒲團をかぶつて火を避けてゐる人を見出し、自分も無意識にその下へ這ひこんで、孫を焼いてはならぬと脇の下にかかへたまゝ助けを呼んでゐた。池に浸つてゐた人々が時々水をかけてくれたので夥しい無慘な焼死者を山の様に出した中に辛じて焼死をまぬかれ、翌朝に至つた。俄に泣く幼児に水を貰つてのませ、家人の行衛を尋ねやうとしてゐる時、近くに生き残つてゐた老婆が南千住に行けば多分焚き出しもあるだらうから行つて貰つて来てやるといふので、喜んで依頼した。しかし間もなくその老婆は歸つて来て、ま

だ焚き出し所のさわざではないといった。そして途中吉原の前で大きい兵隊さんが一人焼け死んでゐるのを見て来たといつた。これを聞くと老母は一時に胸さわぎがしてならなくなつた。もしやと思つていそいでその人相や體格などをきくと、どうも似よつてゐるやうに思はれる。老母は驚きと悲しみとで眼の前が眞暗くなり足が棒立ちになつて一步も前に進むことが出来なくなつたが、心を勵ましてその老婆の肩にすがつて現場へ行つて見た。大きな兵隊が水道の柵の中に半身を入れ手を大の字に擴げ胸からは黒こげになつて死んでゐる。一見ると、たしかに自分の子の福三郎にちがひない。しかし、人違ひであつてくれたらと思ふ觀心から、ポケットの軍隊手帳を出して調べて貰つた。紛ふかたもない、それはやつぱり福三郎に違ひなかつた。老母は倒れんばかりにうち驚きその場に泣き崩れた近くにゐた人々に慰められ、とにかく病身の兄夫婦をさがして、この事を知らせなければと老母は氣を取り直して泣く泣く方々を探し廻り、漸く淺草公園で二人のものに巡り會ふ事が出来た。老母の知らせをきいた兄夫婦の落膽と悲嘆は、そばで見る眼も氣の毒な程であつた。しかし、いつまでも泣いてゐる場合でない。死體の始末もせねばならず、何より病氣の兄をどこかへ落つける事が必要であつた。それで老母と妻とは、あてもなく公園を出たが、たま／＼麻布聯隊の戦友が、中村福三郎君の行衛を探しに來たのにあつて、助けられて北千住一丁目四十五、中村トメ方まで辿りつく事が出来た。

戦友達は、死體の世話を一切引き受けて始末し、隊に歸つて報告した。

こゝに健氣なのは、なくなつた福三郎君の行動であつた。彼は、主人の家に行つて見ると震災の被害もなく、まだ火災にもかゝらないので、喜んで引き返すと、もう家は猛火に包まれ、一人の家人も見えぬ、たぶん近くの吉原公園に避難した事と思つて、すぐ後を追つて公園に行つたが、大勢の人がつめあつて居るので、いくら探しても見當らない。その中に火勢は愈々烈しく、こゝも到度安全な地ではないと思つた。そこで彼は、一つには家人を探す爲め、また人々の爲めに安全な通路を示してやらうと決心した。近くの藤棚の上にあがり、大聲で叫んで遁路を教へてゐた。そのうちに、とう／＼危険が自分の身に迫つた。彼は窮餘の策として、身を搜して水道管の中へはいらうとした。然しはいり切らぬうちに火焰にあはられて焼死したものだらうといふことである。

彼の行動は、死體のそばを通る人々の言葉を綜合して知られた。かはいさうにこの兵隊さんは今朝の二時頃まで藤棚の上でとなつてゐた兵隊さんだよ。この兵隊さんに昨夜、何人助けられたか知れないのに」と。

福三郎君の勇敢なる行動が戦友によつて麻布三聯隊長に報告された。その後嚴密なる調査の結果直ちに一等卒に進級、更に十月廿七日附を以て上等兵に進級せられ、ついで十一月十五日附を以て第一

師團長石光眞臣閣下より、この犠牲的行動は軍人の龜鑑とするに足ると言ふ表彰状を受けたのであつた。

麻布第三聯隊第九中隊上等兵 中村福三郎君 (二十二年)

● これで幾らか御恩が返せた

猶さんは八年前に信州の山家から東京へ出て来て、被服廠の例の石原町十九番地に棲んでゐた。その頃は或る棟梁に使はれてあちらこちらの仕事をして居たが今から考へるともう五年もの昔である。或日何時も出入してゐたお店の立馬(留吉)さんから「猶さんお前さんも折角東京へ来たのだから、一人前の立派な大工にならねばならぬ、どうだい、わしが面倒を見るから一つ獨立して棟梁になつては」と深切に言はれた。猶さんは稍考へたが「旦那にお世話が願へますとぼつ／＼やつて見ませう」とうれしうに答へた。

それからといふものは猶さんにとつては立馬さんが唯一人の親分でいつも／＼澤山の仕事を貰つては次第に出世する機にと勵んで居たのであつた。

立馬さんには小泉町のあたりにも澤山の地所があり毎月の家賃だけでも三千圓を下らぬ収入があつた。従つて家作の修繕をしたり新らしく造作もするといつた様な仕事も多かつた。その都度何時も猶さんに仕事を請負はせてゐたのであつた。

○ 深切な立馬の主人も、とる年で一昨年歸らぬ旅に立つてしまつた。残つたのが今の奥さん(いち子七一)とみよ子さん(十九)の二人、後は番頭と下女とで、何不自由のない家にも急に淋しい霧がかゝつた、折々出入する猶さんが行つてはそれとはなしに威勢のよい話をして笑せてゐた、歸りには何時も涙にうるんだ眼をバチ／＼させて獨り言の様に「あゝ旦那が生きて居られたら奥さんもお嬢さんもどんなにお氣が強からう……思ふまい／＼何事も運命だ、然しこんな事を思ふにつけ俺は何時も信仰してゐる日蓮様の恩義といふ事だけは忘れまいぞ、立馬の旦那のお蔭で今では大工の猶さんとは人にも知られる事が出来たのだからな……」

その中立馬家には芽出たい春が訪れた。みよ子さんには友長君(二十三)といふ立派な養子が迎へられ旦那の後を引繼いで萬事經營して行く事になつた。猶さんは以前より一層家作の事については若旦那の信頼をつないでゐた。

俄然九月一日に思ひもよらぬあの強震が訪れた。わけてもこの邊りは地盤も悪く火も速かつたので、女子供は「それつ被服廠へ」と皆避難させたのであつた。猶さんも人々と同じ様に妻と十四才になる弟子とを一緒に被服廠へ避難させ近所からパンを求めビール壘に一ぱいの水をあてがつて「こゝへ居れ俺は之からお店を廻つて来るから」といひ捨て、出て行つた。お店の中には潰れた家もあつた、火に近い家もあつたがこんな時には人情で平素から特別の世話になつてゐる方へと足が急ぐのであつた、途中ちよこ／＼と手助けをしつゝ遂に立馬さんの家へ行つた、中には入つて見ると上を下への大騒ぎ、御隠居様はと聞くと「裏の塀に梯子をかけたところあの被服廠の中へ一先づ避難させました」と番頭がいふ、養子も番頭も夫々小さな包を持つたまゝ表へ出て何れへか逃げのびて行く。猶さんも後について飛び出した、『御隠居様にお嬢さんさぞお困りだらう、どれ是非御助けせねばならぬ』と勇み立つて被服廠まで来た。見れば悲鳴をあげて走る人、山なす荷物であれ程の空地も一杯だ、逆もは入れないが、身軽な猶さんは無理にも中へ這入つて行つた。血走つた兩眼は鋭く人々の面を射た。『立馬さん』と大聲をはりあげては尋ね歩いたか猛火の餘焰で息は苦しく人の雪崩で足は動かぬ。折々旋風が起つては日本大學の建物の鐵板をはぐ、逆も物凄光景である。人々は雪崩を打つて出たりは入つ

たりしてゐる。その中を氣も狂はんばかりに自分の妻や弟子のありかも打忘れて立馬さん／＼とどなり歩いた。

○
それこそ本當の神のお引き合せといふものが、丁度一本の古い木の下に立馬の親子が色を失つて抱き合つてゐるではないか、『やお御隠居様』『あ、猶さんかい』と思はずだき合つた、『猶さんお金は幾らでも上げるどうぞ私等親子を救つて下さい』といち子は手を合はさんばかりにして願つた、『なあに御隠居様心配なさいますな、死ねば御一緒です、然し此處は危険です早く逃げた方がよいです、さあ身仕度をなさいませそして私の言ふ通りになさいよ』といひながら傍の死人の帯をほどいて、みよ女の足に巻きつけて草履がはりにし、いち女には濟まぬやうな氣はしたが死人の足袋を取つて來て履かせた。

俄に大旋風が起つた、ヒュー／＼とうなりを立つた鐵板が飛んで處さらはず人を打つては倒してゐる、大きな火の粉が何處からともなく飛んで來る、若い娘たちの髪が見る／＼燃えてあれつといつては打倒れる。男も女も焰の風に甜められては次ぎ／＼に打倒れてゐる。この時不思議にも猶さんの頭には機智がひらめいた、それつこつち向きに倒れなさい』といつて二人を死人の上へ倒れさせた火の風

の通り過ぎた頃やをら身を起してほつと一息つかうとすると又風にあふられて火が轟めついて来る、それつ今度は北向に倒れて!! と言つて倒れさす。

こんな風に幾度も立つたり倒れたりして呻吟の聲の中に暫しは火と戦ひつゝ僅かの隙を見て驀然二人を連れ出したのであつた。丁度出口に程近い所に櫻井ヨシといふ隣のかみさんが——逆も見違へる様に火ぶくれになつて瀕りに救を求めてゐた、猶さんは立馬親子に此處を離れてはいけませんよと堅く言ひ含め『おヨシさ確かりなさい今水を持つて来て上げる』といふが早いか塚のかけを拾つて走つた、安田さんの池から泥水を汲んで来てヨシ女に飲ませて蘇生させた、あたりの子供にも女にも分けやつて『早くこゝを逃げなさい早く〜』といひ置いて自分は又立馬親子の手を取つて山の様な荷物の上を越えて向島へと逃げのびた。

○

人込を押し分け押し分けして死ぬ様な思ひをして猶さんは立馬親子を寺島村まで連れて行つた。其處で怖ろしい一夜を明し、翌日になつて餘りに空腹を覺えたので近所の家へ無心に行つてやつとお握り二つを貰つて来た、猶さんは人一倍腹も空いてゐたが、御隠居様さあお握りがありましたよ、お嬢さんさあお上りなさい」といつて一つ宛をすゝめた。「猶さん半分お上り」と隠居が出すムスビを拒絶

して『なあに私はお腹は大丈夫ですよ』と素知らぬ風を装つてゐた。

三日になつて猶さんは一人焼跡へ行つて見た。すると無事に逃げのびた養子の友長さんが「巢鴨庚申塚の甲州屋へ立退いたと立退札を記して建てゝあつた。猶さんは飛び立つばかりに喜んだ、若旦那も御無事であつたか『さあ早くお嬢さんに知らせて上げよう』と勇み歸つてその旨を傳へ一先づ庚申塚へとその日の中に親子を連れて焦土を横ぎつてあるいた、厚い感謝の涙はとめどもなく親子三人から猶さんに向つて捧げられたのであつた。

○

『あゝこれでやつと御恩が少し返せた』が妻や弟子はどうしたかしら? ひよつとするとやられたのではあるまいかまあ焼跡へ歸つて立退き先を書いたり一應は被服廠の中も尋ねて見ようと猶さんは考へた。

今でも猶さんは非常に悲しんでゐる、あの混乱の中に猶さんの細君は三萬幾千かの亡き数には入つてゐたのであつた。妻の親には合はせる顔もない事をした「他人を助ける位なら何故自分の女房を扶けなかつた」と言はれては二の句も出ないのであつた。でも弟子丈は隅田川を泳ぎ切つて逃げてゐたので、八日目に漸くめぐり會へたといふ。

今では立馬家でも元の地所にバラックを建て地所の整理も着々運んでゐる。その地所の監督が猶さんで猶さんの考一つで貸すも貸さぬも決まるだけ信用が出来たのである。原庭警察の署長さんも心から猶さんの忠實な働きに感心している／＼な話を添えてくれたのであつた。

本所區小泉町五番地 大工職 山口猶太郎君 (三十七年)

● 妊婦は居りませぬか

深川區龜住町二十二番地に醫療器械製造を營んでゐた三ツ木富五郎君(三二)は、妻の志津榮(二五)が産婆であつた爲め、早くから無料助産をして社會奉仕をしたい素願が夫婦の間にあつた。そこで方面委員の人々にまで其の意志を表示して、漸次にそれを具體化しようとした矢先きに今度の大震災に見舞はれた。

前古未曾有の大災害のために人々は着るに衣服なく喰ふに食がないといふ悲惨な境涯に陥つた。けれども、衣服や食糧は多少不足勝ちでも忍ぶことが出来る。だがどうにも押へ難いものがある。例へ

ば出産の如きもので、これは定つた日數をふれば押へてもここで押へることの出来ない約束である。よし大天災の最中であらうがあるまいが、それには聊かの介意すらないのである。かゝる時にこそ平素の考へである無料助産の事も最も要望されるものである。かうした一條が強くと三ツ木君を動かした。三ツ木君が災後『妊婦は居りませぬか』と避難者村を馳廻つて無料助産事業を營んだ動機的第一はこゝにあつた。けれども、氏が心を動かしたことはこれのみではなかつた。氏は災後暫らく郷里の埼玉縣に避難したが、氏の眼に映じた限りに於る縣民の東京救濟方は甚しく他縣に對して遜色があつた。加之、其の物價は東京に比して著しく高いのを見た。當時東京で貫三七八錢の甘藷が原産地の川越で四十五錢もしたし、東京で十五六錢の大根が二十錢から三十錢、三四十錢で買へる西瓜が六十錢もするのであつた。三ツ木君は此の相場をみて殊に心を動かした。何といふ情けない埼玉縣であるのか假令それが縣人の一部分であるとしても、生命辛々逃げ出してきた不幸な罹災者の財布を狙つて其の骨までも舐らうとするのは何たる淺ましいことであるか——よし自分は如何に小さいことであれ一つの事業をして、聊か社會奉仕の實を擧ることによつて縣の名を清めたい、それには例の無料助産の事を決行する外はないと堅く心に決する所があつた。

三ツ木君が深川公園に助産の状況を見に来たときは、妊婦たちには上なき苦痛の時であつた。産は

あれども産婆なし」僅かに陸軍看護卒があつて経験といふものゝ殆んど無い男手によつて取上げられるのが上の部であつた。氏は茲に於て助産事業の愈々益々急務であることを痛感し、直ちに警察及區役所に走つて自分たちの決意を具陳し、其の諒解を得て九月中旬初めて助産事業を開始することにした。

最初氏は大島町十六番地の鈴木赤次郎君方に於いて無料助産を開始したが、十月十日に至つて公園バラックの一室を借受け、此處で診療を繼續することにしたのである。

診療所には勿論志津榮さんが訪ねてくる妊婦に接してゐたが、夫の三ツ木君は自ら巷に出で、お腹の大きい婦人を探した。

『妊婦は居りませぬか』

さうして氏は丹念に街頭を歩いた。若しさういふ婦人を見かけると、氏は熱心に勧めた。

『あなたは産婆がおりますか。それでは私の所へ一度お出でなさい。無料です。あなたの産婆に出逢ふまで……』

産婦の人たちは喜んだ。新らしく産婆を求める人は云ふまでもない、かつて世話になつてゐた産婆さへ行方知れずになつたので、本當に腹を痛めてゐた折だ、地獄で何やらの譬喩の如く、此の不幸な

人たちはだん々と集つてきた。三ツ木君は私費を投出して治療器械から材料を買込んで、出来るだけの世話をした。其の数が十一月一日までに百名に上り、その中三十名の出産があつた。併し、三十名の中に二名の死産があり、他にも異常のものが多しといふことである。本當にかうした大災の與へた心身の影響は絶大なものであるから、妊婦のためには甚だ氣の毒な場合であることは云ふ迄もなく、國家としてみても、第二第三の國民である若き生命の芽をかうした粗雑な島に培ふことは最大の遺憾でなければならぬ。かゝる場合に處する三ツ木君夫妻の貢献は蓋し大きいものであらねばならぬ。

東京市深川區龜住町二十二番地 三ツ木 富五郎君 (三十二年)

●傷病者と孤兒とに身命を捧げた訓導

橋本小學校の岡山訓導は未だ獨身の下宿生活で、係累のない身であつたから、九月一日第二震が終ると、本所區相生町の親戚(兄嫁の里)を見舞はんと、同松坂町に住んでをつた同僚岡登訓導と連立つて、本所に向つたのであつた。

到看すると、親戚では幸皆無事で電車通に避難して居た。そして親戚では「若し火が来れば被服廠跡に行くから心配はない。早く下宿に帰宅するやうに。」と注意されたので暇を告げて、岡登訓導宅を見舞つた。同家では主人は長崎の女子師範學校に勤務中で、家族は六歳を頭に三人の子供と七十二歳の姑だけであつたから、非常に狼狽してゐた。其のうちに附近は一面の火となつたので、氣の毒に思つて手傳つて荷物をかたづけした。そして老人の手を引き荷物を背負つて、兩國橋の袂まで出て同僚の親戚のものと一緒になつたが、混雑中であつたから、同僚と子供とを見失つてしまつた。併し若し其時に離散しなかつたならば、一同手をとつて被服廠に行つて惨死したかも知れなかつたのだ。後になつて、同僚は兩國橋の上に避難し、箆筒の抽斗を借りて其の中に三人の愛兒を入れて飛來る火の粉を防いで漸く難をのがれたことがわかり、又先に見舞つた親戚では、言葉の如く被服廠跡に逃げ込んで遂に一家全滅の悲惨に陥つたことも判明したのである。

一日の暮れ方兩國橋の袂にゐると、江東の猛火は次第に烈しくなつて、火に追はれた無數の傷病者が其處に集つて來た。或は火傷を負つて苦しめるもの、或は瘦衰へた大病人等ばかりで、實に目も當てられぬ惨狀である。其の時警察の醫者らしい人が來てそれ等の傷病者の手當を始めたから、岡山訓導は見かねて手當の手傳を始めたのであつた。併し手當の材料が足りないので、醫者は二三十人だけ

手當をして立去つた。

其の夜九時頃急に風が變つて、風上となつたので橋の袂にあつた一棟の消防署の材料置場の小屋だけ焼失を免れたが、間もなく川向の風下となつたので、火の粉が頻に飛んで來て危険が迫つて來る。若し其の小屋に燃えつければ多數の焼死者を出さなければならぬ。と考へた岡山訓導は東兩國巡查派出所の上野飛田鈴木の三巡查などと必死になつて、隅田川の水を汲んで防火に努めたので類焼を防ぐことが出來た。川向の火も漸く靜かになつたので、傷病者の大部分は夫々他に引取られたが、引取人のない二三十人は其の儘残つてゐたので、相生警察署ではこの焼殘の小屋を傷病者の第五收容所に當て、其の中に傷病者を收容したのである。

岡山訓導は其の小屋の中で傷病者全部を始んど一人で引受け繃帯をするやら、食物を口から入れてやるやら、大小便の世話までして眞に一身を捧げて、親切に介抱した。併し其の夜四十歳位の全身マツカに火傷を受けた男は水ばかり飲んでゐたが遂に死んでしまつた。

二日も同じやうにして過ぎた。

三日には奉職學校の焼跡を訪ねて感慨の涙を流し同僚教へ子の身の上などを案じながら、下谷區上野花園町十七番地池田訓導宅の學校假事務所に向つたが、暑くて通れないので、途中で會つた山下訓

導にことづけを頼んで收容小屋に引返した。岡登訓導も其の日他へ共に避難するやうにすゝめたが、傷病者が「どうか先生おて下さい。」「どうせ助からぬのだからどうか私の死ぬのを見届けて下さい」などと引留めるので介抱を続けることにしたのである。傷病者は岡山訓導の親切に感動し手を合せ涙を流して感謝した併し醫者も來す薬もないことであるから訓導の熱心な介抱に其の甲斐なく死者は續出した。そして死體からは盛んに悪臭を放つたが訓導は其死體の間に挟まつて尙も救護を續けたのである。或結核患者は苦しくなつて「水が欲しい」といふ、水がないので隅田川の水を汲んでやると、訓導に毒味をしてといふので訓導が一口飲むと、患者は喜んで其の水を飲んだがやがて瞑目したのである。其の他醫者の家族でありながら醫者の手當も受けなくて死んだものもあつた。訓導は傷病者の死に幾度が同情の涙に咽んだ。

三日の晩に二人の男兒、一人の少女、二人の男、二人の女、の死體は小屋外に片づけた。かうして訓導は四日の朝まで一睡もせず又これといふ食物も採らなかつたが、患者の回復を熱望するの餘り飢も勞れも感じなかつた。

其の間に軍醫が一回來て、火傷の手當と注射をしていつた。其の後茨城縣の腕章をつけた人が來て繙帯を取換へてくれたが藥品はなかつた。

岡山訓導は四日國技館内に近衛師團の救護班が設けられたことを知つたので、收容小屋内の患者を同救護班内に收容されんことを懇請した。そして漸く許されて拾數名の患者と共に國技館内に收容された。そして前にもまして、患者の飲食大小便の世話衣類寢具の取扱に至るまで殆んど肉親の者も及ばない程に眞に寢食を忘れて連日連夜看護に盡瘁した。館内數十名の傷病者は訓導を慈母と仰ぎ神と敬した。偶々他の病院に轉送される患者があると訓導に同行せられんことを軍醫に懇請して止まない有様で訓導も幾度か泣かせられた。

國技館内に移つてから數日後のことであつた。警察署の手を経て、本所相生町四丁目の鈴木萬之助君の女ちゑ子(四歳)が孤兒となつて收容されて來た。ちゑ子の父萬之助君は四年前から腰がたゝぬので、家族が萬之助君を車で被服廠跡に避難させる際、ちゑ子を近所の浪速壽司の妻君に頼んだのであつた。萬之助君一家は遂に全部焼死を遂げたが、ちゑ子は手に火傷を受けたゞけで生き残つた。けれども頼るべきもの一人もなきあはれな孤兒となつてしまつたのであつた。救護班ではちゑ子が泣けばかりあるので、岡山訓導に託した。訓導も孤兒の身の上を憐んで熱愛したから孤兒も一二日にして忽ちなつき先生おばちゃんといつて慕ふやうになつた。

九月十四日國技館内の救護班は閉鎖されて患者は諸方病院に轉送されることになり、孤兒のちゑ子

も市ヶ谷臨時病院（府立第四中學校）に入院することになったので岡山訓導はちゑ子の附添となつて看護に努めたが、殆んど全快したので、九月二十五日孤兒を脊負ひ、配給品を携へて漸く探し當てたちゑ子の伯父本所區縁町三丁目十一番地松田廣太郎君宅に送届け歸らんとしたが孤兒は訓導に抱きついて離れなかつたので、一夜を共に明かし、翌朝は小遣錢若干を與へ、別れを惜しみ孤兒の前途に幸多かれかしと心に念じつゝ、歸宅したのであつた。

岡山訓導はか程の美績を秘して語らなかつたから學校でさへも知らなかつたのであるが、十一月十七日附を以て陸軍省醫務局長山田弟倫氏から小高校長宛に具狀書が來たので始めて知れたのである。

本郷區湯島にあつた岡山訓導の下宿も一日に全焼したから一物も出さなかつたことはいふまでもない。

岡山訓導は目下牛込區の市ヶ谷小學校に出張してゐるが夏休前までは六年の受持で非常に兒童を愛し又兒童に慕はれてゐた嘗て受持兒童田中節子が臨終の際岡山先生を呼んでといふので、家人に迎へられて駈つける教へ子は片手には固く訓導を握り片手には母親の手を採つて瞑目したといふ事實もあるといふ。訓導は熱烈なる基督教の信者である。

原籍 三重縣多氣郡立ヶ谷村朝桐三千九百九十三番地
震災當時 本郷區湯島一丁目八番地石川方
現住所 神田區表猿樂町六番地田村方

岡山と し子（三十四年）

●鮮人の救護に盡した町長

大震災は大地自然の變化に基づいて起つたものであり、火災は人間の油断からではあつても全く不測の變災であつた。唯鮮人に對する不祥の事實に到つては大國民の襟度として眞に慚愧に堪えぬ狼狽であつた。

此の間よく前後を考察し、沈毅熟慮、周到なる手段と應變の機智とを以て禍害を未然に防ぎ得たる大勇の士も尠なくは無かつたが目黒町長宗田哲夫君の如きも當に其の一人であらう。

宗田町長の附近には一年前から土木工事や植木等の仕事の爲に六人ばかりの鮮人が居たが、今年の六月頃麻布の方から仲間が加はつて十二三人の鮮人が常に働いて居たのであつた。鮮人労働者の宿は宗田君の貸地に家を建て、住んで居る大工職の近藤與吉君の持家であつた。例の流言が傳はり始めると此處にも土地の自警團の眼が異様に輝き出した。宮下駒場の自警團員は武器を提げて近藤君に鮮人の放逐を迫り、若し應じないで不測の暴動が顯はれた場合は君も同乗だとばかりに強請したが、それを聞いた宗田町長は懇ろに事理を説いた。「此處に居る鮮人の労働者は皆よく識つて居る顔ばかりだ。

自分の宅で入浴もさせて居るし米など買ひに来るので氣心もよく識つて居るが決して暴動を企てるやうな悪い者ではない。勿論鮮人中の志士とか謂はれる仲間のうちには内地人に對して、不逞な企劃を有つものもあらうが、此處に居る者だけは我等が保證する。第一そんな氣魄は無い。よし又一步を譲つて萬一の雷同を慮つて放逐したとしても、澁谷世田ヶ谷到る處に此の騒ぎがのつて居るのだから何處に行つても保護も保證もして呉れるものはあるまい。困苦と窺乏と迫害との結果は窮鼠却つて猫をかむ、馴らした猫を昔の野獸に戻さないとも限るまい。此の者丈けは断じて我輩が保證するから決して手をつけて呉れぬやうにと力説して放逐を斥けた。血氣に逸つた自警團も町長のことをわけた提言に反對も出來かねたが、夫れでも不安は去らなかつたと見えて「萬一此の鮮人が暴徒化して放火でもした場合町長は社會に對する責を負うか」と詰問した。宗田氏は快よく應じた。「勿論責任をもつ、萬一の場合損害賠償は何程でも應ずる」と、斯うして附近の鮮人同胞を保護したのを手始めに上目黒日向に居た二十三人をも救つて附近の者に「決して慘劇なことをせぬ様に」と厳しく勸告し、更に中目黒の田道附近に居た十三人ばかりの鮮人學生が、周圍の不安に恐怖を抱いて避難歸國を思ひ立つたのを途中却つて危険が加はる虞があるからと強いて説諭して出立を思ひとまらせ、これ等鮮人の爲には心を碎いて救助品の配給に盡したのであつた。

續いて九月十一日、町長は不意に警視廳から目黒の競馬場構内に鮮人千人許りの保護收容の相談をうけた。世田ヶ谷署長も同道しての半強請である。勿論此の場合辭すべき筋のものではないが人心極度に昂奮の際であるから、町長が承諾して誘導して來たとあつては問題が大きくなると考へて一に警視廳の獨斷裁量に俟つ旨を返答した。果して其の日の夕刻になると六百餘人の鮮人は變裝の警官に導かれて競馬場内馬見場の建物に這入つて來た。町民も附近の人々も驚天した。驚破一大事、萬一これが暴れ出してはと早速町會議員や附近の總代は直ちに町長を詰問にやつて來たが、町長は断じて同意したものではない。しかし善後策は講ずる」と切りぬけて一應は陳情もし徹廢をも要請したが、しかし保護せねばならぬ目前の急務は脱することが出來なかつた。宗田君は誹謗を顧みず米味噌をうめん薪等を自働車に満載し、慰問の旗を押立て、これ等の鮮人救護に盡力し、殊に彼等の心情を和らげて後の融和を期する考へから日本語に熟達したものを選んでこれを交渉員なり總代と見て、懇々双方の誤解によつて生ずる不利を説明し、必ず不運の心を起さぬことを勧め、無辜の罪に被害したものを慰撫し、此處に居る限り目黒町長が保證する。決して危難には會はぬ。飢餓にも陥らせぬから、人心鎮靜の上に歸國するなり、他に移轉する方法を講ずるやうにと懇ろに説いて聞かせたので不安と恐怖に戰慄して居た彼等もやゝ意を安んずる處があつた様子である。一時は町民からも充分なる軍隊警戒を

要求する等のことがあつたが、案外に温和平靜な鮮人の動作に町民も安心するやうになり、一面又傷病者の呻吟せるものや衣食に乏しい哀れな姿を見るに忍びず、野菜や金品の同情を寄せるものも出来て来るやうになつた。宗田君は町會には事後承諾の英断を以て、玄米白米手拭醫療具野菜風呂桶等三百六十餘圓を町費から支出して救護慰問の實を擧げた。

宗田君は古るい東京府師範學校の卒業生であり、法律の方も修めたが本來は教育者であつた。左に當時鮮人からの感謝狀を採録する。

誠惶誠恐謹百拜、伏願者

我生靈當此環東洲亘古來有之大變雄偉壯麗東洋一之皇都霎時間火輪天龜甲地幻成此時覆載之間居住生靈生乎死乎幾作魂歸幽關身化灰燼之域幸我 皇上齊天之聖德各官憲愛國愛民之烈誠震定火滅然死傷更多亡親者呼親而哭失子女者呼子女而泣破產者携老扶幼悲淚飢、狀填塞丘叙智者難謀英者無勇只自蒼荒奔走吁長矩歎而已大哉我 天皇盡善美之仁政雄哉我 官憲盡忠輔國之大畧死者吊之傷者醫之飢者養之寒者衣愛之如老保之如兒處之安間 天德之下感頑何言賤身則所知者飢則食寒則衣之無賴野性當其時也不死何爲嚙々悲哉東渡本意一覽皇都之文物次求生活上方針矣哀哉父母悲哉妻子從此永別伏想而仰天訴望鄉而哭幸、伏蒙天德無私雨露均添之息如縷殘命八死得活更有家族相對之日德何頌焉

息何謝焉一片丹誠莫知所措誠惶誠恐茲謹百拜伏祝我

天皇陛下聖壽萬歲

諸位官憲芳名千秋

同胞兄弟昇平年月

大正十二年十月 日

原籍 朝鮮全羅北道長水郊溪內向三峰里六百十一番地
現住所 東京府荏原郡目黒村字上目黒町三百八十六番地

右 者 禹 漢 春

謹白拜上

目黒町役場 御中

東京府荏原郡目黒町長 宗田 哲 夫君

◎ 異彩を放つ鮮人との融和

一、感謝状を送られた小石川區大塚坂下町坂下町々會

拜啓今度の震災は實に曠古の大慘事にして誠に普働の至りに御座候従ひて一般心理は動搖し浮言は胥動したるに因り一時我が朝鮮人の危急は其の極に達し不安の空氣澎湃したるに拘らず拙者共は御町會の賢明なる御方の御盡力御愛護を蒙り安樂に其の亂波を濟み困域を脱し候事は誠に感謝の至りに御座候何れ御會同の節御禮申上ぐ可くと存じ取り敢へず御禮狀差上申候次第也 勿々敬具
大正十二年九月二十日

小石川區大塚坂下町一九〇

天道教東京傳教師 朴 思 稷
天道教東京青年會代表 李 根 茂

震災後、諸印刷の困難であつた折に、逸早く數百枚の禮狀が町内有志の許に送られた。

小石川區坂下町一九〇天道教宣教所に、帝大法科に在學する李根茂君(二八才)を訪ふと、

「私どもは誠に幸でした。當町内には有識者が多數お住ひになつてゐるから、私どもは最も安全に保護されました。とりわけ隣家の小石川區々會議員で町會の理事長をしてゐらつしやる徳永爲次君は生命を賭して私どもを保護して呉れました。そして日々食料まで運んでくれました。」

と語つた。坂下町は數百の朝鮮人が住つて居る北豊島郡高田町雜司ヶ谷大久保に接續してゐるので、彼の鮮人來襲の流言が傳つた時、一般町民の神經は極度に興奮し、四日には此の宣教所及びその家主同町内富山與作君の宅はそれ等の民衆が叩き壊すといふ噂さへ傳はり、富山氏夫妻は徳永君の宅に避難した程であつた。若し其の指導宜しきを得なかつたならばこゝにも悲慘事が演出されたであつたらう。

しかし當町内には貴族院議員講道館長嘉納治五郎君、帝大教授法學博士上杉慎吉君、同法學博士牧野英一君を始として多くの有識者があり常々町會を指導し町民もよく其の指揮を仰いで居たので大事に到らなかつた。

殊に上杉博士は徳永君と共に町會員に伍し、朝鮮人の來襲の如きは單なる流言に過ぎぬことを宣し且つ其れを傳へるものがあると常に之を逆襲させた。

「朝鮮人が數百人爆彈を持つて押寄せて來ます。」
と報告して來ると、

「お前はどこから聞いた。」
その先はくと町内の人々を派して突き止めると何れも中途で湮滅してしまふ。のみならず、終には

坂下町内へは流言を傳へる者すらなくなり、町内は極めて平靜となつた。そして先の激昂は變じて同情となり、宣教所の人々が外出する際には常に町會員が二三人附添つて保護してやるやうになつた。朴思稷、李根茂君等の感謝狀はかうして生れたのである。

○坂下町々會役員

會長 嘉納治五郎君
副會長 上杉 慎吉君
理事長 徳永 爲次君
顧問 河野 廣中君

尙ほ聞く所に依れば、徳永君(四九)は當時警戒のため坂下町交番に詰切りになつて居た巡査數人に對しても二三週間焚出しをしたとの事である。

二、金鷄勳章今も輝く

北豐島郡高田町雜司ヶ谷水久保一四七番地 中 村 太 郎 君 (四十三年)

前記李根茂君は震災前は水久保に住んで居た。たしか三日のことであつたまだ町會員の保護を受けない時、避難して居た天道教宣教所で食料が缺乏したので妻君と友人二人を連れて自宅に米を取りに

歸つたが、端なくも水久保の自警團七十餘名に圍まれ、撲たれ、罵られあはや危険の迫らうとした。其の時あわて、飛込んで来たのは中村太郎君であつた。

「諸君、そこに居るのは帝大學生だ。決して危険のない李君だ。亂暴するのを止めて呉れ給へ。」と大音聲に呼ばつたが一同は聞き入れぬ。君は更に、

「諸君、僕が命と全財産を以つて保證するから、どうか許して呉れ給へ。」

と更に深く群衆の中へ割入つたので、さしも激昂して居る人々の心も解けて四人は米を取つて無事に歸る事が出来た。

此の大勢の中に飛入つて四人を救けた中村太郎君、今はそば屋をして居るが明治三十七八年戦役には金澤の歩兵聯隊に屬し一兵半として出征し、旅順背面の攻撃に参加し、望臺の戦に決死隊として奮戦して功七級勳八等に叙せられた勇士であつて平生も同地青年團保久會の幹事として着實に活動して居る人である。

●藤枝男爵十四名の鮮人を國元に送る

一日の震災に生きた心地のしなかつた市民は、二日夕刻から頻々と傳へられた流言蜚語のために極度の不安に襲はれた。大震再來を傳へて來るかと思ふと〇〇方面で軍隊と不逞暴漢とは戦闘中だから各自戸締を嚴重にして武装をせよと傳令が走つて來る有様。

處は四谷坂町七番地の麗友社、其處には十四人の鮮人の學生が居た。震災當日何處へ行つて居たのやら翌くる二日の晩になつても杳として其の消息なく三日の朝になつて漂然と一同が社に歸つて來た戒嚴令下の兵士や警官を始め附近の者は思ひ／＼に想像を逞うした、限りなき恐怖に襲はれたのであつた。

今まで従順な學生さん達だと、好意を持つて呉れた隣り近所の人達までが、爆彈を投せられはすまいか。毒でも井戸に投げ入れられはすまいかと、今は猜疑と憎惡をもつやうになつた。あわれなのは彼等十四名の學生、米を磨かうとしても一滴の水さへ貰へず、糧食を求めようとしても一步も戸外に出られない。彼等は全く監禁同様でしかも生存の保證さへないのである。

麗友社のすぐ隣りに居る男爵藤枝雅修氏は震災當初より家族を陸軍士官學校内に避難させ、健氣にも獨り留守居で、自宅並びに、附近の警戒に務めて居たが、善良な彼等の様子を目のあたり見ては、轉た、同情の念に堪えず、當時あのやうに缺乏してゐた水さへ分け與へ、或は近所の八百屋に頼んで

糧食の世話をさせ、或は泣き崩れてゐる者を慰さめるなど人知れぬ苦心と厚い同情とを寄せて只管彼等の保護に努めた、其れがため周圍の人達も漸く猜疑の心を去つて、親切を盡してくれるやうにはなつたが、永く彼等を此處に留め置くのを不憫に思ひ、何とかして大阪まで同伴して國元へ送りとどけようと考へて居る矢先、男爵の親友の醫師安達八乙君が、丁度大阪から救護班として上京して居たのを幸ひ、同氏の歸阪を待つて一同十四名を托することにした。安達君も男爵の麗はしい情愛に感激して、兎角煩はしい手續や、危険を伴ふ此の件を快諾せられた。斯くて彼等十四名は九月十一日の零時四十分親切な安達君に警護されつゝ、懐しの郷里へと新宿驛を發した。男爵はなほも其の後の事が氣遣はれたので、二十五日大阪まで行つて安達君から委細を知つて始めて安堵されたのである。

人の顔さへ見れば誰もが鮮人に見え、鮮人ならば不逞者と決つたやうに、血眼になつて鐵の棒を引きづつて歩いてゐた人々の前では彼等鮮人の生命は全く風前の燈火のやうであつた。

男爵の斯うした厚い恵みに依つて無事歸國することを得た彼等十四名は果してどんな感激をしたであらう。

歸鮮後彼等から男爵の下に厚い／＼感謝をこめた禮狀がとゞいた。

東京市四谷區坂町

男爵

藤枝 雅修君

● 鮮人からのくゝり枕

慘澹たる帝都の惨害は人心を不安の極に達せしめた。戒嚴令は布かれ、自警團は各地に蹶起したが疑心暗鬼を生じ、流言蜚語が頻に起つた。

電柱などの貼札にも人をおびやかす警告めいたものが多くなつた。その人心恟恟たる九月十三日の而も夜の八時半頃鮮人の一團十五名が人形町から和泉橋を渡つて焼残の神田佐久間町に向つた。何かの不安を豫示するかのやうに附近の混雑は名狀することが出来ない程で女子供などには早くも逃出したものさへあつた。

一行は平河町より右に折れ佐久間三丁目三十八番地醫師川上昌保君(六五)の門内に到着した。

門前には黒山のやうに人が集つた。軍人の眼は光つた。自警團は再三鮮人の引渡を迫つたが川上醫師は頑として應じなかつた。醫師は固く鐵門を閉ぢ、鮮人を道路に面した診療室に入れ、窓を押開き群集の面前に於て警官に立合せて順次に治療を始めた。打撲傷裂傷挫骨傷其の他の難病全部を手厚く施療したのである。群集も此の大膽な醫師の態度に氣を奪はれて開いた口がふさがらなかつたといふ

醫師は鮮人等に、夜間は危険なれば明日より晝間来るべきことを諭し、十時半頃警官に保護を頼んで人形町邊の日鮮起業株式會社に送届けてもらつた。

翌十四日、鮮人は約の如く日中川上醫院に來た。醫師は鮮人をかはるゝ寢臺上に仰臥せしめ、特に枕を當てさせて治療した。終つてから一同を集め今當てさせた枕を手にし、巻いた手拭を取除くところからは思がけない美しい朝鮮の美しいくゝり枕が現れたのであつた。

醫師「これはどこの枕か知つてゐる？」

鮮人「朝鮮のであります」

醫師「この枕が此所にあるいはれを話さう、先年朝鮮から東京に來た一青年があつたが、或事情から非常な苦境に陥つた。余は見るに忍びず及ばずながら學生として保護し、余の家に宿泊させて聊か世話をしたことがある。其の時郷里にあつた青年の姉が其のことを聞いて非常に感謝し、御禮のしるしにと眞心をこめて自分でこしらへて態々贈つて呉れたものが即ち此の枕である。君等は今回斯る災害に遭遇し不思議にも郷里の美人の眞心をこめた枕を當て、治療を受けたのだ感想は如何に」

鮮人「朝鮮萬歳であります」

十五名の鮮人はかうして同月二十四日に警視廳の鮮人の診療所が出来るまで毎日川上醫師の懇切な施療を受けたのであつた。其の延人員は百餘名に達した。川上醫師の行動が鮮人をして感涙に咽ばしめたことはいふまでもなく、又市民の鮮人に對する態度感情を緩和せしめたことも勿論であつた。

川上醫師は篤い基督教信者で、國家民人を思ふの至情から、民間にこそあるが常に日鮮の融合を圖り内地人が朝鮮人を諒解するの必要を論じ、官民合同の朝鮮研究を企てんことを力説して來たものである。

大正六年國際連盟の議が起り、民族自決の論を見るや、朝鮮に動搖あらんことを憂へ、有志を説いて内鮮融和會を組織した。又東京在住の朝鮮學生の研究が多く政治經濟法律の方面にのみ偏するを知るや朝鮮の學生を集めて科學講演會をも開いたことがある。

朝鮮政治上警察官を置いて軍隊に代ふるや、君は東奔西走齎金して警察官慰問の目的を以て半紙二萬帖靴下一萬足を買求め大正八年一月一日出發朝鮮語通譯一名を連れて渡鮮二十五日間各地に演説して日鮮の融合を圖り、翌大正九年にも長男を遣はして再度警察官の慰問を實行したことがある。

今や君の赤誠は鮮地の人々にも通じたものと見え、僅一回の渡鮮のみではあるが朝鮮に幾多未見の知己を有してゐる。診療室の一隅にはヨハネ傳第十三章よりとつた京城基督教會の總理李商在筆の

凡事無求真理外一心相照不言中

の幅が掲げられてある。李商在は七十三歳の老人ではあるが、鮮人中の學者である。君とは未見の間であるが先年君の徳を慕つて態々贈つて來たものだといふ。

君の宅には今でこそゐないが以前には幾多の鮮人の書生や女中が居て世話をうけて居た。今回來に先んじて鮮人の施療を決行したのも決して偶然ではないといつてよからう。

東京市神田區佐久間町三丁目三十八番地 川上昌保君 (六十五年)

● 決死の保護

寺田佐市君は品川三木槍ヶ崎安全組合第六區の組長である。

同組合内太田太一君宅に大地震前から十數名の鮮人が起居してゐた。同家は夫妻二人のみで家が廣過ぎる處から空間を貸してゐたので四月頃には鐵道省に出る人が間借りをしてゐた。其の人が退くとだん／＼鮮人が頼んで來るやうになつて震災當時には約二十一名の鮮人が間借りするやうになつた。其の多くは國道工事——現に品川から横濱へ通する國道工事が進捗してゐる——の勞働者であつた。

寺田君は地震のあつた九月一日には安全組合の副組長であつて組長小泉文治郎は不在ではあり組合の仕事は皆寺田君がとらねばならなかつた。君は當時藏前の東京電燈變電所に勤務してゐたが地震突發と同時に家へ歸つた。

二日の朝である、君は辨當を持つて新宿方面に用を足して徒歩歸宅しやうとして九段から日比谷の方へ行く途中、日は暮れかかつたし、疲れもしたので、今宵は日比谷公園に一泊の決心をして歩いて來ると、あちらでも此方でも大分殺氣立つてゐる。恐ろしい鮮人問題が起つてゐたのだ。

鮮人が隊を成して民家を襲つて來る。
爆彈を諸々へ投げ入れる。

井戸へ毒を入れるやも知れぬ。

流言は、まことしやかに傳へられる。吉田君の行くそばをもう顔色の悪い印絆纏を着けた勞働者がひつばつて行かれる。

時々閃電の如く寺田君の頭を射つたのは、自分の組合に、槍ヶ崎の安全組合に起居してゐるあの廿一名の朝鮮人のことであつた。

應は減つた。草勞れた。然しあの廿一人の人々を思ひ出した時に、一刻も猶豫すべき時に非ず、知

らねばならぬのは彼等の安否である。駈け續けて三日の午前二時半頃、槍ヶ崎の家へ歸つた。

附近の人々は朝鮮人の居る事を心配し、他の組合の人は其の鮮人を連れ行かうとし、形勢は不穩である。寺田君の組合では、組合員全部が協力して、朝夕顔を見合せてゐる。廿一名の鮮人を怪我のないやうに、と保護してゐた。鮮人は恐れをなして戶外へ出る者はない皆家の中で身震ひをしてゐた。心配に心配して來た彼等が、安全に保護されてゐるのを見た寺田君は組合の人々に涙を流して感謝した。

君は先づ太田太一君の宅に行つて、金朴仁（當時早大學生）を呼んだ。そして世間の状態が斯んなであるといつて話してきかせた。そして尙此の際少しの行動も慎しまねばならぬことをも話してきかせた。金は廿一名の中で唯一の日本語の話せる者であつた。そして寺田君は皆によく此の意を通じるやうに附け加へた。

大崎にある、東京炭坑の鮮人勞働者も何人か今連れて行かれたと云ふ報せがある。彼等は小さくなつて室の隅みに固まつてゐた然し連れて行かれた鮮人も其處の職工長が間もなく取り返したといふ報せがある。

寺田君は彼等の食料を氣遣つて芝浦の製作所に交渉に行つた。百反坂の青年は寺田家と協力して彼

等の食糧運搬に盡力を惜しまなかつた。

三日の正午聯合會長の召集で組合長の會議が開かれた。問題になつたのは勿論此の鮮人廿一名を保護してゐる事だつた。

「危険なる鮮人を何故保護してゐるか」

「寺田君は何故鮮人に味方するか」

「危険なると否とに拘はらずよろしく鮮人は警察に引渡さねばならぬ」

寺田君は攻撃の中心になつた。君は極力辯護に力めた。

「朝夕顔を合せてゐる組合内の一員である鮮人を何で不安に思ふのであるか。彼等も同じ日本人である。何千、何百といふ内地人の中にゐて、よし暴動を畫むにせよ、何が出来る者か。警察も今や收容能力不足してゐる此際に、引渡しても却つて迷惑であらう。組合で保護してやるのに何の悪い事があるか」

とすべての攻撃を却けた。丁度席上に居た第二區長の山崎君（おかみさんは魚屋、君は大工職であつた）は寺田君の力強い辯護を聞き大いに賛意を表して義侠的に寺田君の説を敷衍した。又同席上にあつた、前東京府立工藝學校長石黒君も彼等を助けてやるのは今であると極力鮮人の保護を主張した。

會議は遂に彼等を保護しやうと云ふ事になつた。若干の金を以て食糧品の買出しをしてやる事になり買物には組合員の一人が必ず附いて行く事になつた。

聯合會の席上でそれだけ議決されてゐるのに、まだ危険視してゐる他の組合があつた。君は其の人々に交渉するのにとの位苦心したかわからない。

或夜二十七八人の屈強な連中がやつて來た。手には槍を持つてゐる日本刀を携げた者もある。ピストルを有つた者、匕首を懐にした者、宛も戰場にも出るかとうたがはれるやうなやうす。あまりにやかましいので寺田君は家を出ると今や太田氏の門をくぐらんとする處である。太田君の家には例の二十一名の鮮人がゐる。大事に到らしめてはと寺田君は飛んで行つた。

「一寸待て！」

「君等は毎夜、五分、十分を置いてやつて來ては鮮人を訊問しやうとする。何の訊問であるか。組合ではすでに彼等の保護を決議してゐる。たつて門に入るならば我にも覺悟がある。君等の持つてゐる物は鮮人のために使はんとするのか。君等が暴力を以てするならば我にも暴力がある」

君は携えた刀の鯉口を寛ろげた。彼等は君の意氣に恐れて其の儘立去つた。

となつてゐる組合員の協力は遂に一指をだに鮮人に觸れしめなかつた。今から考へれば誠に詰らぬことであるが當時にあつては並大抵の苦勞ではなかつたのだ。

人心は定まつた。鮮人に同情する人が多くなつた。太田君宅に保護されてゐた鮮人廿一名は獨り歩きしてもよい時になつた。十六名は故郷戀しと厚く寺田君以下大勢の組合員に禮を述べて歸國した。中に李駕徳は歸國後丁重な禮狀を君並びに太田君夫妻に宛てよこしてゐる。

當時太田君夫妻の宅に保護された鮮人は次の廿一名であつた。

- 慶尙南道山情郡山面長竹里四七七 尹 鳳 淳 (三十五年)
- 慶尙南道居昌郡馬科面月瀨里 孫 永 述 (三十三年)
- 慶尙南道居昌郡馬銜面月瀨里 李 俊 錫 (三十二年)
- 同 居昌郡龍陽面汗基里四四四 文 張 玉 (二十七年)
- 同 晉州郡晉主面大安一洞 金 太 龍 (三十八年)
- 同 同 道洞面長在里 薰 斗 業 (三十五年)
- 慶尙北道率化郡法田面法田里一二三 姜 錫 元 (二十六年)
- 同 南道晉州郡琴山面松相里四二三 朴 仁 彦 (四十二年)

- 居昌郡井上面葛溪里 林 台 鉉 (三十二年)
- 同 同 同 應 春 (二十七年)
- 陝川郡鳳山面高杉里 李 正 基 (二十四年)
- 同 同 同 鐘 永 (二十五年)
- 陝川郡鳳山面高二里 李 山 處 仁 (三十年)
- 居昌郡深川面揚臺里四六四 劉 德 根 (三十年)
- 同 同 居昌郡深川面揚臺里四六四 金 德 介 (三十一年)
- 同 同 同 干 宗 漢 (二十二年)
- 同 同 同 河 小 用 尹 (二十二年)
- 安藤州錦川里四四 金 東 仁
- 同 同 同 金 季 玉
- 靜岡縣市傳馬町六一六 杉 浦 賀 根
- 慶尙南道居昌郡北山面葛溪里 李 聖 徳
- 東京府荏原郡品川町三ツ木槍ヶ崎七五二番地 寺 田 佐 市 君 (三十七年)

●青年鮮人の美しい情

東京市本所區向島小梅町百七十八番地に、大野儀一といふ人の鉛筆工場がある。此の家に職工崔然在君(二二)といふ青年鮮人がゐた。

崔君は朝鮮咸南北青郡下車書面上新兵里に生れ、志を立てて大阪に來た。大正十一年二月五日苦學の目的で東京に上つた。そして明治大學の中等科なる夜間商業に通學して居た。

彼は九月一日常の如く鉛筆工場で働らいてゐたが、地震と共にすばやく外にとび出た。表隣りの家は既に倒壊してしまつてゐる。

崔が其の家屋へ出ると、足の下で助けを求める聲がかすかに聞えた。花井初子、一家五人と隣人妻子二人と右隣りの子供一人が、その下敷になつてしまつてゐたのである。直ぐ助けやうとしたが二階家の潰れた下に在るのだから手がつけられない。

そこで通行人に加勢を求めたが、誰れ一人手を貸すものはない。萬策盡きて一人で瓦を除き、柱を取り去つてゐた。そこへ幸にも友人李貞模君が來た。次ぎに近所の植木といふ染物屋も援助してくれ

又面識ある青木某も手傳つてくれた。

崔君は大いに力を得て、遂に八人の人々を助け出した。この一家は女子供だけであるばかりか皆をれれ重傷を負つてゐたので、どうすることも出来ない。各所には黒煙上り猛火は炎々天を焦す。避難民は悲鳴をあげて潮の押し寄せる様な有様である。火足は速くも身近く攻めて來た。危険は目前に迫つてしまつた。崔君は此の時子供を背負ひ老婆の手を引いて淺草驛迄連れ出した。人の波を押し分けて、八人の負傷者を三度までかかつて驛の廣場に運んだ。

今度は自分の荷物をとりに歸つたが、その時はもう自分の家は紅蓮の焰に包まれてゐて近よる事も出来ない。此の時叫喚が起つた。業平及淺草驛にも火が近づいたと聞いたので最初取り出した荷物も其のままに投げ捨て、淺草驛へ引き返した。崔君は再び危険に陥つた花井一家と隣人八人を勵まして子供を背負ひ、親の手を引き命からく猛火の中を連れ出し、漸く寺島まで避難した時は午後五時頃であつた。崔君はまた工場を心配して來て見たが全く入る事は出来なくなつてしまつたから、堤を傳つて寺島へ歸つて來た。途中に老女が十三歳の兒童を頭に十人の子供を連れて狼狽してゐた。崔君は又其の子供を背負ひ、老人の手を引き他の子供を勵ましつゝ寺島に連れて來て、先きの花井初子一同と共に玉の井に避難させた。